

2024 年度 地域連携センタープロジェクト事業
成果報告書

伝統文化のアーカイブ化を考えるⅡ

2025 年 3 月
青森公立大学 経営経済学部
地域みらい学科 佐々木研究室 編集

巻頭言

本報告書は青森公立大学地域連携センタープロジェクト事業、学術文化振興財団「伝統文化のアーカイブ化～青森ねぶた祭を中心に～」事業の成果報告書である。本事業は2023年度に開始され、本年度は2年目となる。研究事業の目的は、「青森ねぶた祭」を今後いかに伝承していくかという課題に対し、先進地域の事例を調べ、具体的な案、さらには実践を行うことである。事業一年目には、「写真」というモノを使用し、それを分類提示することが現実的であるとの結論にいたった。また2年間の調査研究により、各地域でのアーカイブ化の現状の一部が明らかになり、「青森ねぶた祭」でもやはり専門の博物館的なシステム、仕組みが必要であることがわかった。これに対し、現状できることは集めた資料などをWEBで展示していくこと。また、季節ごとに市内でスペースを借りて、具体的なモノの展示を行っていくことなどであった。このため、2025年度には写真展を行うことを目標とすることが決まった。

さて本研究の過程で、さらに明らかになったのは次の二点である。①近年全国的にも「地域×アート」をテーマとした街づくりが行われている。これは「創造都市」「創造産業」といったコンセプトに合致し、今後の日本の地域社会モデルになっている。そのため青森市も芸術作品としての「ねぶた」を中心とした、コンセプトがあるアートな街づくりが必要となっている。②「青森ねぶた祭」の伝統を継承するためには、それぞれのステークスホルダーが、それぞれ自身のコンセプトで資料収集を行うべきであるが、それが全体として連携していくことが重要である。こうした連携こそが、①で指摘するような「アートな街」をつくる基盤となる。すなわち「青森ねぶた祭」に関するアーカイブ化は、「ねぶた」アートの促進につながり、それが同時に「青森市×ねぶたアート」というコンセプトチャルな街づくりに繋がっていくということである。

本年度の研究調査においても多くの人の協力を得た。特にねぶたアーカイブ研究会のメンバー、竹浪比呂央ねぶた研究所の皆様、そして青森公立大学の佐々木ゼミの学生の協力がなければ本報告書は完成しなかった。本年度の研究事業では日本オーラル・ヒストリー学会と共催し、ワークショップを行うことができた。青森を全国の方に知ってもらいよい機会となった。機会を与えてくださった、日本オーラル・ヒストリー学会に感謝したい。最後に調査地では仙北小鷹さんさ踊り保存会代表の渋川修氏、民俗文化サークル四方山会代表の河合克行会長には特にお世話になった。この場をかりてお礼申し上げたい。ありがとうございました。各地域で地元の祭、そして街を支える方々にお会いできたことは、今後の大きな財産となるだろう。そして今後、そういった志をもった人々と連携することが、地域や街の活性化をさらに促進させるであろう。次年度は本事業の最終年度となるが、次の展開につなげられるようさらなる成果を出していきたい。

2025年2月

青森公立大学 教授 佐々木てる

目次

第一部 2024 年度 調査報告

- ・「地域×アート」～伝統文化のアーカイブ化の視点から～ 佐々木てる 1
- ・2024 年度 東北調査報告 青森公立大学 佐々木ゼミ 2 年生 14
 - 1 盛岡 ～さんさ踊り～ 中村美羽 14
 - 2 仙台七夕まつり 奈良彩葉 宮腰奏美 17
 - 3 山形①～山形花笠まつり～ 成田萌乃 20
 - 4 山形②～広重美術館・本間美術館～ 大坂優生 22
 - 5 秋田 ～秋田竿灯まつり～ 高橋珠翠 種市享乃 25
 - 6 まとめ 種市享乃 28
 - 7 調査レポート 30

第二部 牧野修也編著 2021『変貌する祭礼と担いのしくみ』学文社 レジューメ集

- 第一章 地域社会から祭礼をとらえる 33
- 第二章 マンション町衆が担う山鉾町の伝統～京都祇園祭 蟠螂山～ 36
- 第三章 都市祭礼の興趣とダイナミズムは維持されるのか
～祭礼の「マニュアル化」がもたらすもの～ 39
- 第四章 諏訪地域における御柱祭の変化と継承
～“観光資源”化と“伝統”のせめぎ合いの中で～ 41
- 第五章 川崎市宮前区 45
- 第六章 大里七夕踊と青年団のかかわりの 100 年 48
- 第七章 「担い」のしくみを変容させることで継承する集落芸能
～長野県南佐久軍小海町親沢集落・人形三番叟～ 51
- 第八章 祭礼を<縮小>させる地域社会 ～千葉県印旛郡栄町酒直のオビシヤ～ 56

第三部 2024 年ねぶた運行団体紹介

- 青森菱友会 60 あおもり市民ねぶた実行委員会 61 日本通運ねぶた実行委員会 62
- 県庁ねぶた実行委員会 63 東北電力ねぶた愛好会 64 ヤマト運輸ねぶた実行委員会 65
- N T Tグループねぶた 66 J Rねぶた実行プロジェクト 67
- 青森市役所ねぶた実行委員会 67 青森市 P T A 連合会 68 青森自衛隊ねぶた協賛会 69
- マルハニチロ倭武多会 70 サンロード青森 71 パナソニックねぶた会 72
- 私たちのねぶた自主製作実行委員会 73 に組・日本風力開発グループ 74
- 青森山田学園ねぶた実行委員会 75 青森県板金工業組合 76 ねぶた愛好会 77
- 日立連合ねぶた委員会 77 消防第二分団ねぶた会・アサヒビール 78
- プロクレアねぶた実行プロジェクト 79

報告資料 学会・公開講座

第一部 2024 年度調査報告

「地域×アート」

～伝統文化のアーカイブ化の視点から～

青森公立大学 経営経済学部
地域みらい学科 教授 佐々木てる

はじめに

本研究事業「伝統文化のアーカイブ化～青森ねぶた祭を中心に～事業」の目的は伝統文化をいかにアーカイブ化していくかを、理論的・実践的に考えていくことである。これは2023年度より3年計画で行っている事業である。本年度の研究は前年度で明らかになった課題を継続的に検証し、「青森ねぶた祭」のアーカイブ化をすすめるために行われた。前年度明らかになったこととしては、特に「青森ねぶた祭」の人形灯籠である「ねぶた」そのものに注目する点、そして写真など視覚的にわかるものを収集、分類する必要がある点であった。またこうした収集したものを、最終年度である2025年度に展示することが必要だとわかった。というのも、多くの市民もしくは市外から来る人々に、「青森ねぶた祭」もしくは「ねぶた」を理解してもらうためには、博物館といった展示施設が不可欠と感じたからである。しかしながら、本格的な博物館設立には多くの費用、ランニングコストがかかる。そのため、Web等で博物館機能をもったサイトを作成し、年に何回か実際の展示を行うことが現実的であると考えている。また展示を行う場合、現在では「写真」というものが、当時の雰囲気を伝えることができ、わかりやすく伝えやすいとの意見が提出された。また当時の風景をリアルタイムで見た人がいるうちに、分析する必要があるという意見もでた。こういった経緯から、2024年度は県内の「展示」施設を含め、近隣県の施設の調査を行った。また前年に引き続き、青森ねぶたメディア・アーカイブ研究会にて専門的な知識をもった方々とともに、今後の文化継承について議論を行った。

上記の事に加え、特に前年度着目した「地域×アート」の可能性をさらに追及し、青森市を「ねぶたアートの街」として推進するための調査も行った。この背景には地方の都市が自らの独自性を出し、特徴のある街として成立させることが求められていることにある。いわばランドリー（2003）が指摘するような「創造都市」が求められているといえよう。実際青森商工会議所青年部の例会においても、国土交通省が勧める「「居心地が良く歩きたくなる」まちなかづくり～ウォーカブルなまちなかの形成～」が推進されているが¹、そのストリートデザインとして「ねぶた」の活用も考えられる。逆にいうと地域再生、地域の再活性化、住み心地のよい街づくりを「創造都市」といった考えとリンクしたうえで、「ねぶた」のアーカイブも考えなくては伝統継承に繋がらないことが指摘できる。そこで本報告ではまず、「創造都市」「地域×アート」に関してまず整理しつつ、本年度の調査での知見を紹介することとする。

1 創造都市+地域文化

1.1 創造都市とはなにか

まず「創造都市」とは佐々木雅幸（2007）によれば、「市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ都市である」としている（佐々木2007: 42）。この「創造都市」の議論の背景には、グローバル化を背景としたヒト、モノ、カネが集約される「世界都市」の行き詰まりがある（加茂2007: 16-20）。すなわち「世界都市」が

多機能、多文化を兼ね備えた空間として発展するのと同時に、階級格差や住み心地の悪さといった問題が生じてきた。またこういった「世界都市化」は国内でも限られた地域しか推進することができない。そのため、いわば「地方都市」にとって、重要な「都市」モデルが模索されてきたといえるだろう。

これらの議論はヨーロッパの都市、特に前出のチャールズ・ランドリーや、リチャード・フロリダの先駆的な研究が下地となっている。ランドリーもフロリダも都市の持つ課題に注目し、文化の創造性やクリエイティブ・クラス（創造階級＝科学、芸術、デザイン、エンターテイナーなど）の重要性を指摘している。イギリスのブレア内閣下では「建築、美術、デザイン、ファッション、映画、音楽、舞台芸術」などを「創造産業」とし、これらの分野がイギリスの今後を担う産業とした。この影響もあって、現在では「創造都市ネットワーク」というものが世界的に確立されており、そこでは「工芸と民族芸術、デザイン、映像、食文化、文学、メディアアート、音楽」などが注目を集めている（野田 2020：53）。

日本においては佐々木雅幸（2001）がいちはやく創造都市に注目し、日本の地域を事例（大阪、金沢）として「文化都市」の重要性を指摘している。これらの 2000 年以降の都市デザインに対する研究、実践は現在の地域社会がかかえる問題、すなわち地域の再活性化、特徴のある街づくりの指針に重要な影響を与えている。特に近年では、地域社会にもともとある文化資源をもとに、そこから新しい価値創造を生みだすことが求められている。例えば 2013 年に「創造都市ネットワーク日本」が設立され、2024 年 4 月 1 日現在では 170 の団体が加盟していることがわかった²。ただし、青森県は八戸市のみであり、今後は青森市も加盟していくべきであろう。

2.2 地域文化・伝統文化の価値

各地域にある「伝統文化」「民俗行事」といったものは、その地域の文化資源として提示できる。それらの文化資源は産官学のすべての視点で有益となっている。例えば、産業という視点では、観光資源への利用のみならず、雇用の促進や新しい産業の創出につながる。行政の視点では、街づくり、人口対策、歴史や文化の醸成、さらには地域アイデンティティ（シビック・プライド）につながる。そして学術では、伝統文化の継承、芸術的価値の上昇、後継者育成など教育面でも効果がある。前年度でも事例を紹介したが、「地域×アート」という視点から、特徴のある街づくりを行っている地域は年々増加しているといえる。そしてその「アート」の中核として多く利用されているのが、民俗文化に見られる日本古来の伝統文化であることは少なくない。例えば島根県の岩見神楽は産業、観光、伝統継承など多くの側面で効果を発揮しており、間違いなくシビック・プライドとなっている。また岩見地方の益田市、浜田市、江津市、大田市などでは、市役所の観光課の中に「岩見神楽」専門の部署が設置されている。すなわち行政も積極的に「創造産業」に関わっているといえる。

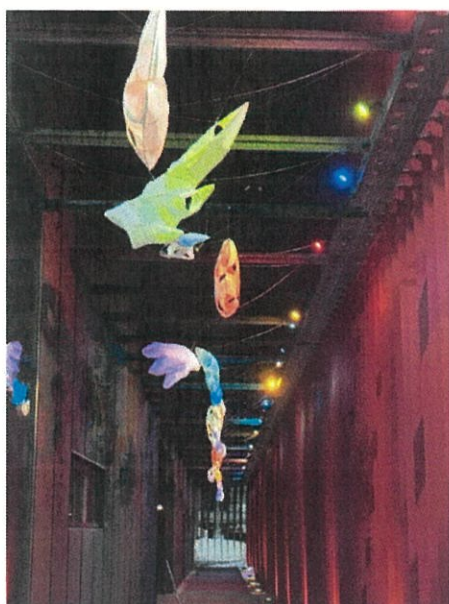
こういった伝統文化における文化資源は、次世代の特徴ある街の中核となる可能性がある。そのため重要なことは、短期的な消費財ではなく「いかに保存・継承されているのか」という視点である。つまり「地元の人とその文化を大切にしているか」ということが重要となってくる。こうした視点をとりいれるならば、昨年度から継続している本事業は、「ねぶた」を中心とした「創造都市」に向けての研究だと言い換えることができるであろう。

2.3 「青森ねぶた祭」と造形芸術としての「ねぶた」

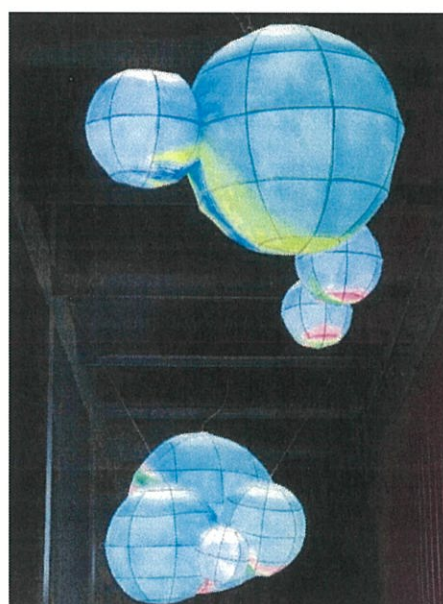
さて今年度特に意識した視点は、「青森ねぶた祭」とは独立したアートとしての「ねぶた」の価値の確立である。「青森ねぶた祭」に登場する人形灯籠はまさしく、祭に登場する「山車」であり、その造形としての評価が高いことは周知のことである。同時にそれはあくまでも「山車」であり、8 月 7 日の祭礼の終わりと共に、壊すものである。これに対し造形芸術

としての「ねぶた」とは、「青森ねぶた祭」で制作される「ねぶた」の技法を用いた、芸術作品である。写真1、2は「青森の新しい風」（竹浪比呂央監修、竹浪比呂央ねぶた研究所制作）、「泡（あぶく）」（塚本利佳制作）という作品である。これらの作品は、夏の青森ねぶた祭に登場する「人形ねぶた」とはまったく違ったものだといえる。

ねぶたを造形作品として提示する試みは、すでに2021年の冬に「ねぶたアート創生プロジェクト」（1月23日～2月28日）として、青森駅周辺および浅虫地区周辺にねぶた師の作品の展示が行われていた。また2024年夏（7月31日～8月12日）には「AOMORI NEBUKO FESTIVAL」として、15名のねぶた師によって、「波」をテーマにした作品が展示された。こうして展示されたものの一部は売却、譲渡され、現在も市内に展示されている。それらの作品はすでに「ねぶた」の街としてのシンボルとなりつつある。地元民からすれば、ありふれた光景かもしれないが、質の高い「紙と光」のアート作品が市内各所に展示されているのは青森市ならではの光景だといえるだろう。先の述べた、ウォークアブルな街づくりにおいて、こうした作品を、散策しつつ観賞できることは街の一つのおおきな特徴となるだろう。



（写真1 青森の新しい風）



（写真2 泡）

3 2024年度 調査・研究活動について

さて本事業の目的は、冒頭に述べたように伝統文化のアーカイブ化を考えるものである。特に「青森ねぶた祭」そして「ねぶた」について、次世代へ継承するための方策を考えることを目的としている。そのため、次世代に文化を継承するためには、①既存の史料を収集・保存・展示すること、②青森市自体を「ねぶたアートの街」にすることが必要だとわかってきた。これらのことを念頭に、2024年度におこなった調査・研究活動を報告しておく。

3.1 先行研究の整理：ゼミにおける文献講読

本事業を推進するために、大学の研究室のゼミ活動において「地域×アート」に関する文献調査を行った。参考にしたのは下記の文献である。下記の牧野の文献に関してはゼミ3年生による輪読を行った。それ以外は2年生のゼミでそれぞれ担当を決めて報告してもらった。

- ・テレコミュニケーション編集部編 2020『地域活性化へ文化・芸術のデジタル活用』リックテレコム
 - 第1部① 収蔵文化財の高精細レプリカを作成：時と場所を選ばず展示が可能に
 - ③ 「ねぶた」をデジタルでアーカイブ化：地域の伝統を継承しその拡大へ
 - ④ 歴史を引き継ぐ港町の盆踊り：花火大会運営に ICT を活用し伝統を継続
- 第3部② 空港ラウンジにオンラインデジタル北斎
：日本文化に触れ「また訪れたい」との思いを
- ・松本茂章 2024『地域創生は文化の現場から始まる』学芸出版社
 - 第5章 すでに地域にあるものが創造人材を呼ぶ
- ・野田邦弘ほか編著 2020『アートがひらく地域のこれから』ミネルヴァ書房
 - 第3章 アートが地域を創造する
 - 第10章 大災害の現場を祝祭に変えるダイナミズム
 - 第12章 アートを活かした大学の地域づくり・人づくり
- ・牧野修也編著 2021『変貌する祭礼と担いのしくみ』学文社
→第2部 レジューメ参照

これらの文献研究より下記のような視点を重視して調査を行っていくことが重要であると知見を得た。

- ①地域社会におけるアートの可能性を調べる：いかに活用し、新しくどのように展示していくのかの視点を学ぶことが重要。
- ②青森市がねぶた芸術の創造都市として確立するために参考なる点を調べる：「ねぶた制作技法の特化、芸術性の確立」を念頭に、実践例を学ぶ。
- ③ほかの都市の祭礼のアーカイブ化の現状を調べる：青森ねぶた祭および、ねぶた自体の歴史性を記録（アーカイブ化）するためにも、他の地域の祭礼に関する展示法を学ぶ。
- ④各地域の祭礼における伝承（教育、後継者育成）方法について調べる：各地域の祭礼について、以下に新しい世代を取りこみ、そして育成しているのかを調べる。

3.2 調査報告：「地域×アート」に向けて

3.2.1 県内の美術館調査

地域とアートを考える上で、青森県の実美術館は一つの指標となるだろう。青森県は他県と比べても珍しく、5つの現代美術館が存在する。2024年は4月13日から9月1日まで5館が連携して「AOMORI GOKAN アートフェス 2024 つらなりのほらっぱ」が開催された。このアートフェスは「地域の周遊を喚起する“5館が五感を刺激する”」プロジェクトとして企画された。青森県、青森市、弘前市、十和田市、八戸市、公益社団法人青森県観光国際交流機構も賛同して行われたこの企画は、青森県がアートの面で特徴を持っていることを自覚し、それを売り出すきっかけになっている（公式ガイドブックより）。こういったことから、5館のうち4館を開催期間中に訪問することとなった。

調査日：2024年5月22日 青森市「青森県立美術館」（2年生7名、4年生1名）

調査日：2024年7月13日、14日

八戸市「八戸市美術館」、十和田市「十和田市現代美術館」（2年生7名）

主な調査内容：青森県の芸術関連に関する取り組みの調査。収集、保存、展示について。学芸員への聞き取り（青森県立美術館）。青森県の5館連携の取り組みにつ

いて。

訪問して出た意見としては、どの美術館も特徴があり、素晴らしいものであるが、伝統芸能や青森由来の芸術文化の発信が弱い点である。日常（民俗）文化に即した展示がもっとあってもいいのではないかと意見がでた。

3.2.2 山形みちのく阿波おどり「東北の祭礼行事のつながり」

山形のみちのく阿波おどりは、東北の新しい祭礼行事としてすでに（2024 年で）18 回行われている。青森からは「もつけ連」が参加しており、今回は参与観察として実際に参加、そして参加団体との交流を行った。特に祭礼に関する後継者の育成に関する話を伺うことができた。参加している団体は祭礼に関して活発に活動している団体、地域だといえる。そして若い世代の参加もある。若い世代の参加に関しては、その祭礼参加のモチベーションがどのように醸成されているのかを調査したいと感じた。また多くの参加者は自分達の芸能にプライドを持ち、日々修練を重ねている印象を受ける。もちろん後継者育成に関する課題は多いが、それぞれ独自のやり方を行っている。この点については、9 月の東北調査にて聞く項目としてリスト化した（詳しくは「2024 年度 東北調査報告、7.2 を参照」）。

調査日：2024 年 8 月 31 日、9 月 1 日（2 年生 6 名参加）

青森（ねぶた）、岩手（さんさ）、秋田、宮城、福島、山形（はながさ）、東京高円寺阿波おどりを通じた連携+シンポジウム

8 月 31 日みちのく阿波おどり参加

9 月 1 日交流会に参加：各地域での祭礼の現状、継承について聞き取り

3.2.3 北海道教育大学岩見沢校、「岩見沢ねぶた」ゼミ生派遣

北海道教育大学岩見沢校の学生が中心になって、地域イベントとして「岩見沢ねぶた」を毎年運行している。北海道教育大学岩見沢校は「美術文化専攻」「芸術・スポーツビジネス専攻」「音楽文化専攻」など、芸術系の専攻が存在している。近年、学生を中心に地域おこしの一環として、ねぶた制作そして運行を行っている。この制作に関して、ゼミ生も参加し、「地域×アート」の実践例として学んでいる（詳しくは「2024 年度 東北調査報告、7.1 を参照」）

調査日：2024 年 8 月 28 日～9 月 2 日（2 年生 1 名、3 年生 1 名派遣）

岩見沢ねぶたの制作協力、市の行事への参加。

学生自らが主体となって、祭を実行。青森の跳人や囃子も参加。

青森公立大学のねぶた制作サークルも協力。

スポンサーの集め方、運営についても学ぶ

3.2.4 東北調査：「地域×アート：伝統文化のアーカイブ化の視点から」

東北調査に関しては、「2024 年度 東北調査報告 1～6」で詳しく紹介しているののでそちらを参照してほしい。調査の概要は下記の通りである。

調査日：2024 年 9 月 18 日～9 月 22 日（2 年生 7 人）

9 月 18 日（水）

・もりおか歴史文化館

- ・盛岡八幡宮祭典山車事務所・の組 関係者に聞き取り
- ・盛岡八幡宮
- ・仙北小鷹さんさ踊り保存会訪問 盛岡市立仙北中学校 剣道場 練習参加
- ・仙北小鷹さんさ踊り保存会代表 渋川修さん 聞き取り

9月19日(木)

- ・南昌荘

9月20日(金)

- ・七夕ミュージアム
- ・広重美術館

9月21日(土)

- ・株式会社 アスク訪問(9:00~10:00)
山形花笠 民俗文化サークル四方山会 代表 河合克行氏。聞き取り調査。
- ・本間美術館

9月22日(日)

- ・秋田市民俗芸能伝承館(愛称:ねぶり流し館)

3.2.5 伝統文化保存:各地の日本画の保存と展示

本年度も前年度同様、日本各地の美術館を巡り、芸術としての「ねぶた」の可能性をさぐってきた。主に竹浪比呂央ねぶた研究所との共同研究であったが、ねぶたの題材として「日本画」が参照されていることがよくわかった。この点に関しては、2024年度第6回高校講座で竹浪比呂央が講演を行った(P.P.に関しては資料参照)。

関西調査 2024年10月18日~10月21日 共同調査:竹浪比呂央他

訪問先:福井県立美術館、京都文化博物館、白沙村荘 橋本関雪記念館、京都市京セラ美術館

明治から昭和期における日本画家の作品の軌跡、その分析について
収集、保存、展示。橋本関雪記念館では文化財継承・保存について

東京調査 2024年10月27日~28日 共同調査:竹浪比呂央他

訪問先:泉屋博古館(東京六本木)、東京都美術館

関西調査 2024年11月8日~11日

訪問先:京都嵐山 福田美術館、和歌山 無量寺 串本応挙芦雪館

主に伊藤若冲、円山応挙、長沢芦雪の作品、保存、展示について学ぶ

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス -TARO

:「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」の採択事例について

- ・石川県加賀市の獅子舞アーカイブを通じた次世代への芸能継承事業
:獅子舞の継承。アーカイブ化について。

- ・各地域の鉾差しとの共同による剣(マネキ)の使い方調査および試作、担い手育成事業

:担い手をいかに育てるのか。祭礼中止と継続について。

東京調査(予定):2025年2月12~13日東京国立博物館 共同調査:竹浪比呂央他
大覚寺の襖絵展示ほか

2.5 そのほか

そのほか、東北6県の祭礼関係者によって行われたシンポジウムに司会として参加した。また前年度に引き続き、星野リゾート青森屋にて「ねぶたコンテンツを利用した観光事業」に関して調査を行った。当日は支配人、広報の方と意見交換を行うことができた。

東北6県シンポジウム（秋田）2024年11月23日 佐々木+ゼミ生2名参加

星野リゾート青森屋調査 2025年2月5日～6日

ねぶたを中心としたコンテンツ使用に関する調査・懇談会予定

→2024年2月実施 報告書作成→青森屋に送付

4 メディア・アーカイブ研究会報告

2023年度に引き続き、青森メディア・アーカイブ研究会を3回開催した。第4回はねぶたの「送り」について、貴重なお話をいただいた。第5回は日本オーラル・ヒストリー学会と共催し、研究会メンバー3名による報告が行われた。また第6回はねぶた制作風景の写真などが回覧され、ねぶた小屋の昔の様子などが話題になった。全体を通じて、ねぶた制作が徐々に洗練化され、そして現在は芸術性が高まっていることがわかった。

次年度は研究会で分析したことを背景に、写真展示などを行う予定である。以下、研究会の内容の報告になる。

4.1 第4回 青森ねぶた・メディア・アーカイブ研究会 報告

4.1.1 概要

日時：2024年5月11日（土）16：10～18：15

場所：アウガ5階 研修室

報告者：伊藤一郎（ACT）、報告補助：石井涼太（ACT）

参加者：佐々木てる、竹浪彩矢子、後藤公司、伊香佳子、稲葉千秋、佐藤史隆

記録：成田葵葉

4.1.2 研究報告（話題提供）：ACT伊藤一郎「ねぶたのおくりの記録」について

・「文書」としての記録

ACT 映像とその説明（台本）が残っている

手法：映像を遡って文字起こし

・保存基準

弘前ねぶた：（正面の）ねぶたは「動」を送りは「静」

青森ねぶた：送りは正面ねぶたに関連性のあるもので、ストーリー性を意識している
（例外で物語は関係がないものもあるが、時代が共通しているなど共通点がある）

・下絵と原画の基準

下絵（鉛筆まで）、原画（色がついたもの）※ねぶた原画コンクールは例外
送りに下絵・原画を書いているかどうかはそのねぶた師による

伊藤氏より、おくりに関する取材は台上げの時にねぶた師に直接聞き、最終的には送りの内容を一覧表にまとめているとの報告があった。後半は主に2023年のねぶたおよびその送りについて、および2012年のねぶたとその送りについて画像を鑑賞した。

4.1.2 アーカイブとして残していくには

- ・ケーブルテレビの記録。テープは 2007 年以降。古いデータからさかのぼると 25 年分
- ・保管に向けて：一般許可は社長許可が出れば可能

Q 送りの立体感が意識されはじめたのはいつからか

→ルーツを探る

Q ねぶた師が送りのデータをどのくらい保存しているか

→ねぶた師へ確認（特に竹浪名人）

4.1.3 まとめ

送りの掘り返しは難しいが、ACT のデータをベースに収集していく。

4.2 第 5 回 研究会兼第 22 回 日本オーラル・ヒストリー学会：ワークショップ／ラウンドテーブル 伝統文化をアーカイブする：「青森ねぶた祭」を支える人々の取り組み²

4.2.1 概要

近年多くの地域で、伝統文化や特色のあるアートを軸に地域活性化を進める事例が報告されている。すなわち地域社会にもともとある、なんらかのコンテンツを捉えなおし、新しく展開することによって、地域の特色を浮かび上がらせているのである。これらの取り組みは、各自治体が悩む人口減少対策や、観光客の誘致の一つの対応策ともなっている。

これらの取り組みを青森市で考えるならば、現在「ねぶた」そのものを街の特色としてもっと活用する取り組みがはじまっている。市内公共施設はもとより、宿泊施設、飲食店にもねぶたが飾られているし、またねぶたの制作技法を使用したアート作品も多く誕生している。これらの取り組みの背景には「ねぶた文化」というものを支えている、関係者の努力が背景にある。本ワークショップでは、青森ねぶた文化を様々なメディアを通じて発信している方々をお呼びして活動内容を伺うことにする。そしてその活動内容から、人々の語りをはじめとする、地域の声をいかに後世に残していくかを考えていくことにする（学会 HP より）。

日付：2024 年 9 月 14 日

時間：13：30～16：00

場所：青森観光物産館アスパム 4 階会議室（十和田）

コーディネーター・主旨説明：佐々木てる（青森公立大学）

司会：阿南透（江戸川大学）

活動内容報告：

林広海（ねぶた師）：ねぶた文化のアーカイブ化 ～HP の紹介～

Web

佐藤隆史（ものの芽舎 取締役）：雑誌からみる「青森ねぶた祭」

雑誌

稲葉千秋（ABA アナウンサー）：「青森ねぶた師」を撮ること、映すこと

TV

コメンテーター：石川良子（立教大学）：オーラル・ヒストリー研究からみたアーカイブの取り組み

（※佐藤、稲葉の報告 P.P.に関しては巻末資料を参照してほしい）

4.2.2 大会報告

2024年9月14日(土)の午後、青森観光物産館アスパム4階会議室(十和田)において、ワークショップが開催されました。テーマは、「伝統文化をアーカイブする～「青森ねぶた祭」を支える人々の取り組み～」でした。今回の大会は青森大会ということもあり、話題提供者はみな青森の方々でした。青森、特に青森市では「青森ねぶた祭」という全国でも有名な祭礼が8月に開催されています。この祭礼のために、青森市民は1年かけて準備を行います。つまり、青森市民にとって「ねぶた」は人口減少対策や、観光客の誘致の一つの対応策というだけでなく、伝統文化でありビック・プライドでもあります。こうした地域文化の重要性を会員の方々に知って頂くために、開催校企画ワークショップを行いました。なお、このワークショップのために、前日「ねぶた」をテーマとしたエクスカージョンを行いました。エクスカージョンでは「ねぶた」の基礎知識や、観光コンテンツとしての「ねぶたアート」の利用実践例などを紹介しました。

今回のワークショップでは、特に「ねぶた文化」というものを支えている、関係者の方々にご協力いただき話題提供をしていただきました。報告者および報告内容は以下の通りとなっています。林広海(ねぶた師)「ねぶた文化のアーカイブ化(Webを中心に)」。佐藤隆史(ものの芽舎 取締役)「雑誌からみる「青森ねぶた祭」」。稲葉千秋(ABA アナウンサー)

「「青森ねぶた師」を撮ること、映すこと」。(コメンテーター:石川良子(立教大学)。司会:阿南透(江戸川大学教授))。ねぶた師の林氏はシステムエンジニアの経歴を生かし、ねぶたに関するHP(青森ねぶたミュージアム)を制作しています。その取り組みや、ねぶた師を目指した経緯などをお話いただきました。雑誌を制作している佐藤氏には、その雑誌で扱われてきたねぶたの歴史を、青森市の歴史を含めお話いただきました。実際の雑誌を見ることで、モノのアーカイブ化の重要性を感じます。最後にABAの現役アナウンサーの稲葉氏には自身が制作した番組について紹介して頂きました。そこではTVメディアが映し出す、人々の語りの記録が映し出されていました。3人に共通しているのは、それぞれの専門領域の中で、地元地域の文化や伝統を大切に、それを多くの人に知ってもらい、そして残していくという意識でした。報告のあとは3グループにわかれ会員の方々と自由に交流をしていただきました。

こうした実践交流を行うことで、地元地域の人々は外部からどのように見られているのかを知り、そして外部の人は地域の人々の取り組みを知ることができました。今回のワークショップが、双方にとって活動、研究の一助となることを願っています。そしてJOHAならではの実践交流会が今後続くことを願っています。

(学会ニュース・レターより、大会校理事 佐々木てる)

4.3 第6回 青森ねぶたメディア・アーカイブ研究会、報告

4.3.1 概要

日付:2025年1月25日(土)

時間:15:45~18:00

場所:リンクステーションホール青森 小会議室3

報告:竹浪彩矢子(青森県立美術館 学芸員)、井上咲子(竹浪比呂央ねぶた研究所)

出席者:竹浪彩矢子、井上咲子、阿南透、竹浪比呂央、稲葉千秋、井上舞、瀬藤朋

伊香佳子、佐々木てる

記録:佐々木てる

4.3.2 報告① 竹浪彩矢子「ねぶたの美術史的な考察について」

主に2024年7月8日に公刊された論文、「造形芸術としての青森ねぶた 技法と表現に注目して」(『芸術学研究』、京都芸術大学芸術学研究室、pp.102-142)についての報告であった。注目点としては下記のような点であった。

目の中に青色を入れる

ねぶたの面では、目の玉の中のふち青色がはいっている。これは日本画の影響を受けて塗られているとのことである。すなわち白目の中にぼかしを入れる技法である。白目が真っ白だけだと三白眼になってしまう。こういったぼかしを入れる技法は、浮世絵などにもみられる。なお日本画において、美人画などでは目の描き方が同時に、人物の性格、雰囲気がでるため重要とのことである。ねぶたの場合、目の玉を入れ、目じりなどを塗って、乾いてからロウをぬるとのことである。

制作過程

面は最後に作り、特に竹の時代面を最後につくって、本体にくっつけていた。針金になるようになって、重くなっていったので、最初から中に木を入れて固定していった。また、竹の時代は手足の線は墨で表現していた。それが針金で形を評点することで、徐々に人間らしくなっていった。こうした技術面の進化が造形の進化に繋がっていったと考えられる。特に近年「ねぶたアート創生プロジェクト」に代表されるよう、アートとしてのねぶたという認識が出てきている。

装飾について

近年ねぶたのまわりを彩る装飾造形が多いが、水や光などを表現しはじめたのはだれか。やはりS38~40 佐藤伝蔵 稲光、水、などがはじまりだろう。またS41 遠藤盛藤「那智の滝」で表現されている水は、浮世絵、絵画、錦絵など参考にしているものである。図9の墨の線がすばらしい(北川金三郎)との指摘があった。

はだかねぶた

はだかねぶた、というジャンルも面白い。令和5年には相撲をテーマに裸ねぶたが出陣した。そもそものはしりは、昭和40年の県庁ねぶた、秋田かく四朗であった。そのほか、一人ねぶたが流行った時代もあったが、平成10年代には一人ねぶたが減少していく。

アートとはなにか

「新鮮さ」として表現される。では芸術とアートの違いはなにか、などの意見交換があった。また美術館(博物館の一分類)、博物館(明確な定義がなされている。博物館法参照)、ミュージアム(一般的な広い用語)の違いなども確認された。

4.3.3 報告②：井上咲子「平成初期のねぶた制作風景」

自身のライフ・ヒストリーと共に、ねぶた制作にかかわるようになった経緯、そして制作について語ってもらった。はじめてかかわった平成5年から平成12年までの制作風景を、所持している写真で紹介しながら解説を行った。

特に①チームとしてねぶたを作るということ、特に「紙貼り」というチームについて、また②派生してねぶた師がねぶた制作をトータルで監修するというスタイルがどのようにして生まれたのかが興味深い話となった。

ねぶたの制作小屋の原風景：制作スタッフとは？

井上氏がねぶたに関わってきた過程が時系列で紹介された。○番号はアルバムの番号を指す。

⇒平成5年 はじめて、ねぶたを見る。「平景清」「象引」の作品名を記憶。(北村隆作)

⇒平成6年① はじめてねぶた小屋へ(この年の2月に職場で竹浪比呂央氏と出会う)

写真「龍王」(コマツ連合ねぶた：千葉作龍作)

「北方夢幻・津刈丸」(青森菱友会：竹浪魁龍作)

紙貼りの終わった白いねぶたに感動。その後、彩色の工程時も見学に。

⇒平成7年②～⑤ はじめて彩色の手伝いに。

「漢楚春秋・剛勇樊噲」(青森マルハ佞武多会：竹浪魁龍初の作品)の送り

「三内丸山・縄文鼓動」(コマツ連合ねぶた：千葉作龍作)の正面

⇒平成8年⑥～⑨ 骨組みから手伝うように。

⇒平成9年⑩～⑫

⇒平成10年⑬～⑯

⇒平成11年⑰～⑳ 竹浪組としてはじめて紙貼りチームができる。

「魚跳龍門」マルハ

⇒平成12年㉑～㉔

「今別の伝説 大泊の鬼」(青森菱友会)

鬼の肌：オレンジをぬって赤を重ねる。「竹浪の赤」

「山幸彦 海中に入る」(青森マルハ佞武多会)⇒はじめて、ぼかしを担当

紙の変化により(それまでの奉書紙から、ロンテックスに変わり)、塗りやすくなった。

4.3.4 まとめ

印象深かったのは、当時は制作中に写真をとる習慣はなかった。そのため制作工程をうつすのが難しかったとのことである。また平成11年に竹浪組として紙貼りチームが創成されたという点である

ねぶた制作について：

竹浪比呂央ねぶた制作チームとしては、「制作スタッフ(骨組、墨書き、ロウ書き、彩色)」、「紙貼りスタッフ」に分類できる。紙貼りのスタッフは、13～15人程度。おおよそ2週間くらいで紙を貼る。一日平均7人くらいである。いつくらいから墨を入れるかは重要である。そのため紙貼りには、おおよそそのスタート日時をつたえ、そしてだいたいのシフトをつくって依頼する。また制作全般においてもそうだが、誰が何をできるかも考慮しており、その人が来るときに依頼する仕事もある。制作スタッフの多くは昼間仕事を持っているため、平日はだいたい18時くらいに来て、夕食をたべ19時ころから作業を開始する。たいていは22時頃までやっていく。

アートはどの時代からか

佐藤伝蔵の時代からといえる。それまでのねぶたは、運行団体が皆で作っていた。そしてねぶた制作代表者が面をつくってあとからつけていた。団体(ボランティア、趣味の人たち)の人はみよう見まねで、祭の山車として作っていた。

これに対し、おそらく佐藤伝蔵が最初に、すべて「監修」という形で、自分の納得したもの

のを作りたいということで、ねぶた制作をおこなったのだろう（1968年頃から）。また同時代の鹿内一生も同じころから制作代表者＝ねぶた師としてプロ化している。つまり、構図から墨、色にいたるまで、すべて監修し、指示をはじめた。これが作家性として成立していく。ここで制作や手伝いという概念も誕生する。団体のボランティア作品から「ねぶた師」の作品となっていく。この時に、依頼→予算化（制作料）の流れも成立する。プロ化のはじまりといえるだろう。

まとめ：「地域×アート」の可能性

2024年度の調査研究において得た知見をまとめておく。

①保存伝承について

まず各県がそれぞれ試行錯誤し、保存継承に務めていることがわかった。例えば、岩手県の盛岡さんさでは、盛岡さんさ踊り推進会や仙北小鷹さんさ踊り保存会などの団体、保存会が主体となり指導を行っている。宮城県の仙台七夕まつりでは、七夕で使う飾りを地域の女性を雇用している業者に制作依頼している。山形県の花笠まつりでは、四方山会が小学生に踊りや歴史を指導していた。秋田県の秋田竿燈祭りでは、秋田竿燈祭り実行委員会が主体となり小中学生に指導している。すなわち、どの県も後継者育成のための努力がなされていることがわかった。また伝承のための博物館などに注目すると、岩手（もりおか歴史文化館）、仙台（七夕ミュージアム）、秋田（ねぶり流し館）は充実していたことがわかった。これに対し、山形県の花笠まつりには文化を資料として保存継承していくための建物がなかった。山形の文化を地域住民や、歴史的に関わりがない人など多くの人がいつでも花笠まつりの歴史を知ることができるよう、歴史を記録し保存しておく施設が今後アーカイブの面で必要になってくるのではないかと考えた。すなわち、調査を通じて改めて、青森市でも「ねぶた」に関する教育のさらなる充実させ、そして観光施設だけではなく学術面や伝承も従事した、ねぶたの博物館が必要があると感じさせられた。

②芸術としての「ねぶた」

本年度も昨年同様に美術館、博物館の調査を行った。東北調査では本間美術館、天童市広重美術館、京都では京セラ美術館、京都文化博物館、嵐山の福田美術館、福井県では福井県立美術館、和歌山では無量寺串本応挙芦雪館、東京では東京都美術館、泉屋博古館東京などを訪問した。そこでは収集・保存、展示の工夫がなされていることがわかった。例えば解説などは音声ガイドダンスを含め、専門家の役割が際立っていた。こういった視点を取り入れれば、「ねぶた」アートに関する、図録集や専門解説員の育成など、様々な工夫ができるであろう。また「ねぶた」制作という側面では、日本画の技法、題材などがねぶた制作に強い影響を与えていることがわかった。例えば、研究会でも指摘されていたが、ねぶた師は雨や雷、水などを表現する場合、浮世絵や日本画から着想を得ている。このような点からも、「ねぶた」そのものが芸術性やアート性をもともと内包していることがわかる。そのため「青森ねぶた祭」にとらわれず、アートとしての「ねぶた=NEBTA」を推進していくことが、文化推進という意味でも必要だといえる。

③「アート×地域」：創造都市に向けて

先行研究から得た知見でもあったように、日本でも「創造都市ネットワーク日本」が確立され、特色のある街づくりが進められている。文献では大阪や金沢の事例が挙げられ、ネットワークには八戸が参加していることもわかった。現在青森では、市内各所に「ねぶた」が

飾られている。青森駅周辺の商業施設、ホテルでも展示されていることが多く、お土産品などでは夏の祭礼に使われたねぶたの写真や絵などが使用されることが多い。すでに「ねぶた」自体は観光などコンテンツに使用されているが、それをトータルな街の特徴として内外にアピールするにはいたっていない。これは政治的に主導しつつ、実際に産官学が連携して行うべき問題である。青森市は近年著しく人口減少が進んでいるといわれている。しかし、伝統文化の力が、多くの人を呼びよせ就業機会を増加させる機能を持っている。アーカイブとは一見すると、学術的な価値しかないように思えるが、産業や教育、そして将来的な街づくりとつながっている。こういった意味で本年度の研究調査から、「ねぶた×アート×地域」という枠組みで、青森市自体が特徴のある街づくりが可能であることを確信した。

次年度の課題としてはより実践的に、展示会を行うなどアーカイブ化の実証実験を行うことである。そしてそれを将来の街づくりの礎としたい。

註

- 1 国土交通省のホームページ、政策・仕事>都市>都市再生 (https://www.mlit.go.jp/toshi/toshi_machi_tk_000072.html)
- 2 「創造都市ネットワーク日本」ホームページ参照 (<https://ccn-j.net/>)
- 3 「日本オーラル・ヒストリー学会」ホームページ参照 (<http://joha.jp/page/6>)

参考文献

- 『AOMORI GOKAN アートフェス 2024 公式ガイドブック』グラフ青森 (2024 年)
チャールズ・ランドリー著／後藤和子監訳 2000＝2003『創造的都市』日本評論社
国立歴史民俗博物館ほか編 2023『Rekihaku アートがひらく地域文化：特集』人間文化研究機構国立歴史民俗博物館 文学通信 (発売)
野田邦弘ほか編著 2020『アートがひらく地域のこれから』ミネルヴァ書房
松本茂章編 2024『地域創生は文化の現場から始まる』学芸出版社
牧野修也編著 2021『変貌する祭礼と担いのしくみ』学文社
リチャード・フロリダ著／井口典夫訳 2008＝2009『クリエイティブ都市論』ダイヤモンド社
佐々木雅幸 2001『創造都市への挑戦』岩波書店
佐々木雅幸+総合研究開発機構 2007『創造都市への展望』学芸出版社
テレコミュニケーション編集部編 2020『地域活性化へ文化・芸術のデジタル活用』リックテレコム

2024 年度 東北調査報告

青森公立大学 佐々木ゼミ 2 年生

1 盛岡 ～さんさ踊り～ (中村美羽)

1.1 調査概要

調査者：佐々木てる 大坂優生 高橋珠翠 種市享乃 中村美羽 奈良彩葉
成田萌乃 宮腰奏美

訪問箇所：

- ①岩手県盛岡市 もりおか歴史文化館
- ②盛岡横山八幡宮
- ③仙北小鷹さんさ踊り保存会

話し手：渋川修 (仙北小鷹さんさ踊り保存会副会長)

調査日：2024 年 9 月 18 日 (水) 19:30～21:30

調査場所：仙北中学校

1.1.1 さんさ踊り

さんさ踊りとは、岩手県に伝わる盆踊りの一つで太鼓、笛、唄にあわせて踊る。発祥は盛岡市の三ツ石神社にまつわる「三ツ石伝説」と言われている(写真1)。昔、三ツ石の神様が悪さをしていた鬼を退治し、鬼は降参の印として石に手形を残して去った。喜んだ人々は「さんさ、さんさと踊り囃した」ことからさんさ踊りが始まったと言われている¹。頭の上にある花笠は、鬼の退散を祝う意味を持つ(写真2)。8月1日から4日に行われる「盛岡さんさ踊り」では、盛岡市の各団体がさんさ踊りを踊り、パレードとして盛り上げる。



写真 1.1 さんさ踊り



写真 1.2 花笠

1.1.2 仙北小鷹さんさ踊り保存会²

小鷹さんさ踊りとは、南部藩のお殿様が鷹狩りをしていた地域を小鷹と呼び、そこで発展されたさんさ踊りである。明治時代より前から踊られていて、「門付け」といってお祝い事やご先祖様の供養などの時に家々を回って踊り、盆踊りとしても踊られていた。このさんさ踊りを現在まで踊りつないできた団体が仙北小鷹さんさ踊り保存会である。仙北小鷹さんさ踊り保存会の会員は約 80 人、そのうち高校生以下は約 30 人である。小鷹さんさ踊りの特徴は、テンポがゆっくり、太鼓を左右に激しく振る、腰を低くし全身を大きくつかうところが特徴である。見学したときは 11 月に子供向けの大会があったため、練習に来ていた人たちの半数以上が高校生以下であった。主な活動は、盛岡さんさ踊りのパレードに参加、街なかさんさ踊りに参加、マリオスホールで披露、結婚式などのお祝い事に参加、学校で授業、

海外公演など多くの場所で小鷹さんさ踊りを広めている。

1.1.3 小鷹さんさ踊りの継承

仙北小鷹さんさ踊り保存会の副会長を務めている、渋谷さんから小鷹さんさ踊りを踊るときに意識していることや保存会の会員同士の交流、継承に必要なことについてお話を聞いた。渋谷さんによると「まずは、小鷹さんさ踊りで意識していることである。それは見ている人がかっこいいと思うさんさ踊り、つまり『魅せるさんさ』を踊り続けることである。そのために次のような練習を行っている。初めて練習する人には最初は踊りのパートを覚えてもらう。踊りのパートを覚えてもらうことで踊り全体に深みを増すことができ、また難しい部分がどこなのか気づくようになるため人の気持ちも分かるようになる。太鼓のパートを覚えるには、週3の練習を1ヶ月続ける必要があり、家での予習と復習が欠かせない」とのことである。このように普段からコツコツと練習することが「魅せるさんさ」を踊ることにつながる。

次は、保存会の会員同士の交流についてである。「息のあったさんさ踊りを踊るには、練習だけでなく会員同士の交流も大切である。仙北小鷹さんさ踊り保存会の皆さんは、さんさ踊りだけでなく盛岡八幡宮例大祭にも参加して交流を深めている。また、『盛岡さんさ踊り』では楽しみながら踊り交流を深める、そして『小鷹さんさ踊り』は芸能として真剣に踊るというように取り組み方にもメリハリをつけている」とのことである。

最後に次の世代への継承に必要なことについて伺った。小鷹さんさ踊りを次の世代へ継承するために必要なことは以下の三つだと考えているようだ。**1つ目は「SNSの活用」**である。「仙北小鷹さんさ踊り保存会ではフェイスブックなどのSNSを活用し、日々の活動について情報発信を行っている。情報発信によってまだ小鷹さんさ踊りについて知らない人たちに伝えやすくなり、ダイレクトメッセージによる保存会への参加志望が来やすくなった」。**2つ目は「学びの場を設ける」**ことである。「仙北小鷹さんさ保存会では、小学校で小鷹さんさ踊りについての授業を行っている。学校で授業を行うことは学校側の協力が必要であるが、仙北・向中野地域では協力的である。学びの場を設けることで、自分たちの地域の伝統を守りたい、盛岡に住み続けたいという気持ちになってもらいやすくなる」。**3つ目は「魅せるさんさ踊りを踊り続ける」**ことである。「魅せるさんさを踊ることは、見ている人たちにやってみたいと思わせ興味を持たせることができる。また、踊る人たちにも良い刺激になり、一人一人が競争意識を持つことでさんさ踊りへの参加を継続させることができる」。

1.2 盛岡山車と課題

盛岡山車とは、9月14日から16日に開催される盛岡八幡宮例大祭で練り歩く人形山車（写真1.3）である。歌舞伎や歴史上の名場題材にしており、一台に200人の勢子が付いて練り歩く。盛岡山車を制作している「の組」の方、盛岡八幡宮の方から盛岡山車についてお話を聞いた。盛岡山車は3ヶ月前から準備が始まり、祭り期間が終わると山車を解体する。年によって参加する団体違い、毎年参加する団体は盛岡山車の制作費を十分に得ているが、毎年参加できない団体は制作費が足りないため、数年に一回参加している。町で盛岡山車を運行するとき、道が狭いため明治時代の山車よりも小さくなっている。盛岡山車では以上のような課題が挙げられていた³。



写真 1.3 盛岡山車

1.3 もりおか歴史文化館

1.3.1 施設概要

この施設は、旧岩手県立図書館を増改築し、平成 23 年 7 月に盛岡城跡公園に開館した。盛岡の歴史や文化に関する資料を収集・保存・公開する社会教育施設を目指している⁴。1 階は観光交流ゾーン、2 階は歴史文化ゾーンである。今回は、1 階の観光交流ゾーンのみ見学した。観光交流ゾーンでは、盛岡さんさ踊りや盛岡山車、チャグチャグ馬子、主に盛岡の祭りについて知ることができる展示であった。盛岡さんさ踊り、チャグチャグ馬子についての動画を視聴できるスペース（写真 1.4）となっている。また盛岡さんさについて書かれているパネル（写真 1.5）やチャグチャグ馬子の模型（写真 1.6）もある。別の場所には明治時代



写真 1.4 動画視聴スペース



写真 1.5 盛岡さんさ踊りのパネル

の盛岡山車と現代の盛岡山車（写真 1.7）が飾られていた。また盛岡山車について記されている動画とパネル（写真 1.8）もあった。

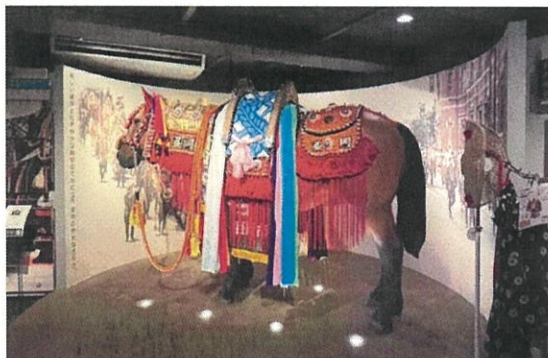


写真 1.6 チャグチャグ馬子の模型



写真 1.8 盛岡山車のパネル



写真 1.7 明治時代（左）と現代（右）の山車

1.3.2 もりおか歴史文化館の分析

盛岡の伝統文化を映像に残し、パネルに文字を起し公開することで、観光客や地元の人たちに知ってもらうことができる。しかし古い情報の映像であったため、最新の情報も取り入れるべきではないか。1階の観光交流ゾーンは無料エリアとなっていることから、観光客だけでなく地元の人たちも行きやすい。小さな子供たちの団体も見学しに来ていた様子を見て、子供から大人まで利用できる施設であるとわかった。

1.4 まとめ

仙北小鷹さんさ踊り保存会は、継承方法として SNS を活用すること、学びの場を設けること、魅せるさんさを踊り続けることを意識して活動している。若い世代やまだ知らない人たちに小鷹さんさ踊りを伝えるためには、これらの活動を通じて、「興味」を持ち、「もっと知りたい」という意識をつくっていくことが大切だと思った。その結果、継承までのステップへ進めることができるのではないかな。

盛岡山車は、制作費の関係で盛岡八幡宮例大祭に毎年参加できる団体と、参加できない団体がある。盛岡山車を途絶えさせないためには、どの団体毎年参加できるように経済面での課題を解決する必要があるといえる。

もりおか歴史文化館は、さんさ踊りや盛岡山車など伝統文化を保存し、観光客だけでなく地元の人たちも学べる施設である。よりよい保存施設を目指すためには、最新の情報も積極的に取り入れ現在の伝統文化を知ることができるようにすればよいと感じた。

註

- 1 さんさ踊り/さんさ踊り | 盛岡市公式ホームページを参考にした。
- 2 仙北小鷹さんさ踊り保存会様より頂いた資料を参考にして執筆した。
- 3 盛岡山車大絵巻パンフレットより参照
- 4 もりおか歴史文化館については HP (<https://www.morireki.jp/about/>) を参考にした。

参考資料／参考 URL

さんさ踊り、盛岡市公式 HP「もりおか歴史文化館とは」(<https://www.morireki.jp/about/>)

盛岡山車大絵巻パンフレット

仙北小鷹さんさ踊り保存会 資料「向中野小学校3学年 総合的な学習の時間 大すき!向中野～仙北小鷹さんさ踊りを知ろう～仙北小鷹さんさ踊り保存会の方々のお話を聞く会」

2 仙台七夕まつり

(奈良彩葉 宮腰奏美)

2.1 調査概要

調査者：佐々木てる 大坂優生 高橋珠翠 種市享乃 中村美羽 奈良彩葉
成田萌乃 宮腰奏美

調査日：2024年9月20日（金）10：00～11：00

調査地：宮城県 仙台市 鐘崎総本店笹かま館七夕ミュージアム

2.2 仙台七夕まつりについて

仙台七夕まつりとは、毎年8月6日～8月8日に宮城県仙台市で開催される祭りである。和紙や竹を使った豪華絢爛な七夕飾りが特徴で、その姿は日本一の七夕まつりと称されている。仙台市内を華やかに彩る七夕飾りを見ようと、毎年200万人を超える観光客が訪れて

おり、東北を代表する祭りの一つとしてその名をとどろかせている¹。



写真 2-1 展示されていた七夕飾り①



写真 2-2 展示されていた七夕飾り②

2.3 鐘崎総本店笹かま館七夕ミュージアムについて

私達は、仙台七夕まつりについて学ぶために、宮城県仙台市の鐘崎総本店笹かま館七夕ミュージアムを訪れた。この施設では、七夕飾りが常設展示されているため、祭り期間以外でも七夕飾りを見ることができる。色鮮やかな七夕飾りは、どれも目を見張るものばかりだった。以下の写真が実際に展示されていた七夕飾りの写真である²。また、仙台七夕まつりに欠かせないのが、「七つ飾り」と呼ばれる小物たちである。七つ飾りとは、投網（とあみ）・屑籠・巾着・吹き流し・折り鶴・紙衣（かみごろも）・短冊であり、商売繁盛や無病息災など様々な願いが込められている。この七つ飾りがどの七夕飾りでも見られる点が、仙台七夕まつりの特徴の一つである。



写真 2.3 投網

2.4 仙台七夕まつりの歴史³

①藩政期～明治期の七夕

仙台七夕まつりの起源は、仙台藩の初代藩主伊達政宗公が、領内の女性に日頃の苦勞を労い、芸術の関心を高めるために七夕を奨励したことに由来するとされている。明治維新による五節句廃止

後は、全国的に七夕が衰退する中、仙台七夕は家ごとに守られ続けたとされている。



写真 2.4 屑籠



写真 2.5 巾着



写真 2.6 吹き流し



写真 2.7 折り鶴



写真 2.8 紙衣



写真 2.9 短冊

②大正期の七夕

1923 年（大正 12）年の関東大震災後の不景気を乗り切るため、商店街では連合大売り出しが企画された。この際に、従来の七夕には無かった“商店街の七夕”が登場したとされる。

③戦前

昭和初期には、不景気で衰微に傾く七夕の復興を目指して「第一回全市飾り付けコンクール」が行われた。仕掛け者や電飾など、様々な趣向を凝らした七夕飾りで、町全体が大いに盛り上がったとされている。その後、七夕は毎年盛大になっていき、1932 年（昭和 7）年には当時の仙台市の人口 10 万人に対し、七夕の人出は 15 万人を記録した。“観光としての七夕”が注目を集め始めたのもこの頃だとされている。しかし、太平洋戦争の影響により仙台七夕まつりは、1939（昭和 14）年に開催の中断を余儀なくされた。

④戦後

戦後の 1946 年（昭和 21）年に仙台市の焼け野原に竹飾り 52 本が立てられて七夕が復興。その様子は新聞で連日取り上げられるなど、多くの仙台市民が七夕まつりの復活を待ち願っていたことが当時の記録からわかる⁴。翌年には、飾り付けの審査が再開され、仙台七夕は見事に復活した。

⑤現在

豪華絢爛な一大イベントの七夕まつりとして今日まで続いている。竹飾りの規模と華やかさは、まさに全国随一とされている。

2.5 継承・保存方法

仙台七夕まつりが現代まで受け継がれてきた理由について考察する。第一に「地域ぐるみの取り組み」である。不況や戦争など多くの困難があつた中でも仙台七夕まつりを教育行事の一つとして取り入れたり、地元の商店街が商業振興を目的に復活させたりと、地域住民が一体となって七夕を盛り上げようとする熱意が、仙台七夕まつりの継承に繋がっていることが指摘できる。

第二には「新しいものと伝統の融合」である。仙台七夕まつりは、時代と共に飾り付けが変化する一方で、仙台伝統の七つ飾りや本物の和紙で作られる手作りの七夕飾りなど、400 年間続く良き伝統が現代でも受け継がれている。さらに、仙台七夕まつりで使われる色鮮やかな竹飾りは、店ごとに製作する風習が消え、現在では地域の女性達を雇用する業者に製作

を外注することが増えている。制作現場は製作技術の貴重な伝承の場になっており、パート女性たちにとっては仕事を越えた大切な居場所にもなっている。元々、仙台七夕祭りは伊達政宗公が女性の技芸上達のために奨励し、家庭の行事として継承されてきた。つまり、現代の事情に合わせて創意工夫した結果が、原点に近づいた例といえるのではないだろうか。このように、新たなものを取り入れつつ、古くから伝わる伝統を残している点が、仙台七夕まつりが継承され続けている理由だと考えた。

註

- 1 仙台七夕まつり「仙台七夕まつりについて」より引用
- 2 鐘崎総本店笹かま館七夕ミュージアム展示資料より作成した
- 3 HP 鐘崎の笹かまぼこ「仙台七夕まつりの歴史」より引用
- 4 仙台七夕まつり「戦後復活した仙台七夕まつり」より引用

参考資料・参考 URL

仙台七夕まつり「仙台七夕まつりについて」(<https://www.sendaitanabata.com/about/>)
鐘崎総本店笹かま館七夕ミュージアム展示資料 (2024 年 9 月 20 日閲覧)
鐘崎の笹かまぼこ「仙台七夕まつりの歴史」(https://www.kanezaki.co.jp/shop/belle_factory/tanabata_history.html)
仙台七夕まつり「戦後復活した仙台七夕まつり」(<https://www.sendaitanabata.com/about/history/>)
夢ナビ「祭りは誰のもの？仙台七夕まつりに見る、文化資源の保存と活用」(<https://yumenavi.info/vue/lecture.html?gnkcd=g012266>)

3.山形① ～山形花笠まつり～ (成田萌乃)

3.1 調査概要

調査者：佐々木てる 大阪優生 高橋珠翠 種市享乃 中村美羽 奈良彩葉
成田萌乃 宮腰奏美
調査日：2024 年 9 月 21 日 (9：00～12：00)
話し手：株式会社 ASK 会長 河合克行

3.2 山形花笠まつりの東北地方における位置づけ

東北には山形花笠まつりを含めて様々なお祭りが存在する。図 1 は河合会長から頂いた資料を基に制作した表である。山形花笠まつりは、開催期間が 3 日間、経済効果は 49 億円、入込客数は 80 万人とされている。図 3.1 より、青森ねぶた祭は開催期間が 6 日間、経済効果が 295 億円と、東北の祭りの中で、開催期間、経済効果共に最も大きな値であることがわかる。

	開催期間	経済効果
青森ねぶた祭	6日間	295億円
盛岡さんさ踊り	4日間	94億円
仙台七夕まつり	3日間	207億円
秋田竿燈まつり	4日間	84億円
山形花笠まつり	3日間	49億円
福島わらじまつり	3日間	28億円
合計		757億円

図 3.1 東北の祭り 経済効果比較¹

3.3 伝統芸能の伝承方法

河合会長が立ち上げた民俗文化サークル「四方山会」では、様々な課題を具体化し、解決するために、伝統芸能の継承に力を入れている。今回は3つの事例をもとに考える。

1つ目の課題は、少子高齢化から人口減少についてである。図3.2より、今後も高齢化、人口減少が共に急激に加速していく事が予想されている。近年、高齢者が地域の中心を担っていることが多くなっている。

昔から引き継がれてきた伝統など、何もかもを知り尽くしているのが高齢者になってしまい、次世代を担う若者が地域の行事に取り組む時期を逃してしまう傾向にある。この課題を解決するためには、高齢者がその事態に気づき、理解し、若者を積極的に受け入れることが大切である。高齢者から若者へとバトンを渡し続けることが今後の未来にとって大切なことである。

2つ目の課題は、希薄化する地域の絆についてである。図3.3は、「ご近所付き合いについて」に関するアンケート調査の結果である。1975年から2018年までのおよそ40年で「よく」と回答している人の割合を1975年と2018年とで比較すると、町村では約40%、大都市では約20%低下している。

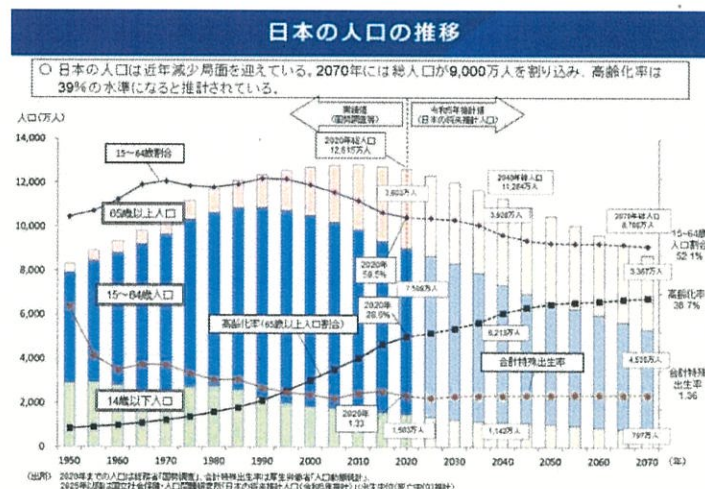


図3.2 日本の人口減少の推移²

2つ目の課題は、希薄化【町村】

	よく付き合っている	ある程度付き合っている
1975年	68.3%	24.5%
2018年	21.1%	48.9%

【大都市】

付き合っている」

	よく付き合っている	ある程度付き合っている
1975年	35.9%	41.1%
2018年	14.6%	47.6%

図3.3 ご近所付き合いについてのアンケート³

このように人付き合いが減っていくことで地域の絆が希薄化していくのだと考える。また、原因の1つとしては、市街地の子供の減少や郊外の過疎化による小中学校の統廃合などが挙げられている。地域を深く知る機会の減少により、愛着を育む機会が減少するなど、地域活動の存続の危機などが課題になっている。

3つ目の課題は、地縁組織から志縁組織への移行についてである。まず、地縁組織とは、自治会・町会・PTAなど、居住地域を対象とした組織である。志縁組織とは、ボランティア団体・NPO法人・スポーツクラブなどを指している。この事例の課題は「地域文化」や「祭り」を盛り上げる為の組織や団体に所属する人たちの高齢化により、「若者」世代が参入しにくい環境となり、世代の役割の軽減に繋がりがかねない状況となっている事である。解決策としては、高校生をはじめとした若者を交えたフリーディスカッションによる意見の集約や若者組織・団体との意見交換会などによる課題の共有化など、若者との交流に重点を置いた活動を目指すことが大切である。

以上の3つの課題より、少子高齢化や人口減少によって地域が希薄化することや地域活動の縮小などを解決する必要性が明らかになった。指摘されていた問題は今後さらに促進す

ると考えられるため、課題解決への取り組みがこれまで以上に必要だと感じた。

3.4 河合会長との意見交換

私たちは民俗文化サークル四方山会の河合会長を交えて、若者への伝承方法や祭りの継承について話し合いを行った。私たちは、「子供時代から思い出作りを行うことで、一度地元を出たとしても将来的に戻って来たいと思ってもらえるようにする」「若者同士のグループを作り、互いにに関わり合うことで、互いの地域や祭りについて学ぶことができ、見解が広がる」「学校など学生が多く集まる場で伝統文化や祭りの授業を行い、祭りに触れることが出来る環境をつくる」など、様々な意見が出た。今後はこの意見交換会で出た意見を実現するために、地域のひとと若者の間に入り、若者が伝統芸能の伝承に積極的に介入できるようにしていく必要があると考えた。具体的に市役所や自治体と協力して、地元の人が地元の良さを発見するためのイベントなどに参加したり、自分達で積極的に企画したいと思った。

3.5 まとめ

今回の調査では、山形花笠まつりの東北地方における位置づけや、伝統芸能の伝承方法を考えるための課題について考えることが出来た。青森ねぶた祭との比較を行うことで、祭りの規模についてよく知ることができた。また、民俗文化サークル四方山会の河合会長との意見交換会を行ったことによって、伝統芸能の継承について再認識することが出来た。今のままの活動を続けるだけではなく、若者の関心を引くような活動を考えることが必要である。今後は、祭りや地域を盛り上げる団体に積極的に話を聞いて、伝統芸能を今後も残し続けたいと思った。

註

- 1 ASUKU 河合会長の報告資料より引用した
- 2 厚生労働省の HP「我が国の人口について」より
(https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_21481.html)
- 3 「ご近所の顔や名前を全く知らない」人は何割？近所付き合いが希薄化し年々低下傾向にポイント交換の PeX の HP より
(https://pex.jp/point_news/a51f11d97cdfd06f891bd738c1700bb1#goog_rewarded)

4 山形②～広重美術館・本間美術館～

(大坂優生)

4.1 調査概要

調査者：佐々木てる 大坂優生 高橋珠翠 種市享乃 中村美羽 奈良彩葉
成田萌乃 宮腰奏美

訪問先

- ①広重美術館訪問 (2024 年 9 月 20 日 15 : 00～16 : 00)
- ②本間美術館・清遠閣・鶴舞園 (2024 年 9 月 21 日 14 : 00～15 : 00)

4.2 広重美術館訪問

天童市に位置する広重美術館は、江戸時代の浮世絵師として広く知られる歌川広重の作品が収められた美術館である。天童市にこの美術館がある理由としては、幕末、天童藩が、広重に絵の依頼し、「天童広重」として、山形に関する絵を残したことがきっかけとされている。当時は 200～300 幅程描かれたと考えられているが、現在で 22 幅までに減少しているため、現在残っている作品は非常に貴重となっている。また、錦絵の絵の具は草木類から

作られているため、太陽光や電灯の光などに弱く、すぐに色あせてしまう。より良い状態で鑑賞するために、展示期間を設けて展示を行うなどの取り組みがされている。

我々が訪れた際、企画展として「広重が描く水辺の風景」が行われていた。四方を海に囲まれ、河川や湖の多い日本の風土のなかで、古来より日本人は「水」に親しみを持っていたといえる。広重も名所風景画のなかで清らかな水辺の風景を数多く描いており、この展示では初代広重晩年の大作のひとつ「六十余州名所図会」を中心に、江戸や東海道、諸国の名所絵のなかから選りすぐりの水辺の風景が展示されていた。涼やかな藍色がふんだんに用いられており、浮世絵ならではの表現に心を打たれた。



写真 4.1 天童市 広重美術館

4.3 本間美術館・清遠閣・鶴舞園訪問

本間美術館は美術館・邸宅・庭園が一ヶ所に集まっている珍しい施設である。昭和 22 年、戦後の荒廃した人々の心を励まし芸術文化の向上に資することを目的に本間美術館は創立され、本間家に伝わる庄内藩主酒井家・米沢藩主上杉家など諸藩からの拝領品を中心に展示活動を始めた。地域貢献の精神を伝えながら、古美術から現代美術の展覧会、庭園「鶴舞園」が織りなす四季の風情、「清遠閣」の京風木造建築の美、さらには北前船により栄えた酒田の歴史まで楽しめる、芸術・自然・歴史の融合する美術館となっている。



写真 4.2 本間美術館

本間美術館は、日本一の大地主として知られた豪商・本間家が創始者である。本間美術館のコレクションは、本間家が収集した日本・東洋古美術が柱となっている。それに加え、多くの篤志家から寄贈があり、古美術から現代美術までの幅広いジャンルにわたる、数多くの収蔵品がある。



写真 4.3 猛虎図

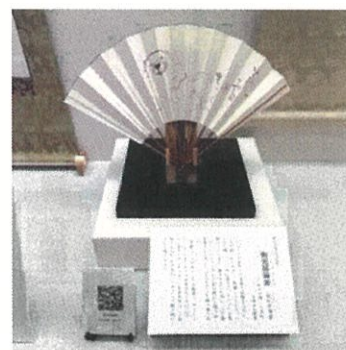


写真 4.4 狗児図扇面

写真 4.3 は岸駒の猛虎図である。虎描きの名手として知られる岸駒だが、その代表作とも

いえる猛虎図を見ることができた。今にも絵の中から出てきそうな迫力に圧倒された。
写真 4.4 は長沢蘆雪の狗児図扇面である。愛嬌のある絵を描くことで有名な長沢蘆雪だが、こちらも代表作を見ることができた。この作品から、今も昔も可愛いという感情を持つのは一緒なんだと感じた。

清遠閣は、藩主酒井侯が領内巡視をする際の休憩所として作られ、大正 14 年には昭和天皇が宿泊されるなど、酒田の迎賓館としても使用されてきた。日本の伝統的な家屋の作りの中にも、西洋の雰囲気を感じられる細工があり、現代的な家づくりへの転換ともいえる場所になっているのではないかと感じた。写真 4.6 は清遠閣の中にある梅の飾り細工なのだが、ある工夫がされている。実はこちら影がウグイスになっている。職人が屋主に相談せず、こっそり施したとされている。ウグイスそのものは彫られていないものの、影を介すことで見えてくるといところに職人の繊細な技術と、粋を感じることができた。



写真 4.5 清遠閣



写真 4.6 清遠閣の飾り細工

鶴舞園（写真 4.7）は、文化 10 年、4 代・本間光道が築造した鳥海山を借景とする池泉回遊式庭園である。池の中島に鶴が舞い降りたことから、藩主酒井侯により「鶴舞園」と名づけられた。庭園の整備は、冬期間に港で働く人々の失業対策事業として実施された。北前船が運んできた佐渡の赤玉石や伊予の青石、初夏の白ツツジ、秋の紅葉が美しい風情豊かな庭園だった。



写真 4.7 鶴舞園

4.4 まとめ：クリエイティブシティと天童市・酒田市について

クリエイティブシティ構想（創造都市）とは、都市開発における産業振興や地域活性化に対して、文化芸術の持つ創造性を活用することが重要であるという考え方のことを言う。例として、神戸市の City of Design KOBE、札幌市の sapporoideas City などが挙げられる。アートによって魅力的な都市環境が作り出されることで、観光や経済の活性化に好影響を与え、地域の直接的な成長にもつながるとされている。アート作品を用いた観光コンテンツを作り出したり、街そのものをアートとして作り上げたりということが行われているのである！

我々が訪問した天童市、酒田市はクリエイティブシティの考え方を生かすことができる地域として捉えることができるのではないかと。貴重な美術品が多いという地域特性と、観光や経済にとって重要な存在になっているという点である。ただいずれの市も、この素晴らし

い美術館を地域づくりや街づくりに活かすことができると感じた。街の中には、アートを感じるものがあまりなく、街をあげて美術館を打ち出している雰囲気はなかった。素晴らしい宝をもっと全国に打ち出して、アートの街として栄えていく道があるのではないかと思った。

註

- 1 参考：「文化芸術創造都市」/文化庁 (https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/chiho/creative_city/)

参考文献

天童美術館展示資料

天童美術館パンフレット

本間美術館展示資料

本間美術館 HP (<https://www.homma-museum.or.jp/>)

5 秋田 ～秋田竿灯まつり～

(高橋珠翠 種市享乃)

5.1 調査概要

調査者：佐々木てる 大坂優生 高橋珠翠 種市享乃 中村美羽 奈良彩葉
成田萌乃 宮腰奏美

調査日：2024年9月22日（日）10:00～11:00

調査地：秋田県秋田市 秋田市民俗芸能伝承館（ねぶり流し館）

5.2 秋田竿灯まつりとは

まずは、秋田竿灯まつりについてである。竿灯とは、竿灯全体を稲穂に、連なる提灯を米俵に見立て、額や肩、腰などに乗せて豊作を祈る祭りである。秋田竿灯まつりは、秋田県秋田市の竿灯大通りが会場となっており、8月3日から6日の4日間行われる。2024年8月19日時点で122万人の観光客が訪れており、重要無形民俗文化財に指定されている。

5.3 竿灯の種類と技

次に、竿灯の種類について述べる。竿灯には主に大・中・小・幼の4種類の大きさがある。最も大きい竿灯は大若（写真5.1）である。大若は、重さ約50キログラム、高さ約12メートル、提灯の大きさは65×45センチメートル、提灯の数は46個で、対象年齢は高校生以上である。次に大きい竿灯は中若（写真5.2）である。中若は、重さ約30キログラム、高さ約9メートル、提灯の大きさは48×36センチメートル、提灯は46個で、対象年齢は中学生である。次に大きいのは小若（写真5.3）である。小若は、重さ約15キログラム、高さ約7メートル、提灯の大きさは48×36センチメートル、提灯は24個で、対象年齢は小学校高学年である。最後に幼若（写真5.4）である。幼若は、最も小さい竿灯で、重さ約5キログラム、高さ約5メートル、提灯の大きさは30×21センチメートル、提灯は全部で24個。対象年齢は幼稚園～小学校低学年である。これらの竿灯を額や肩、腰に乗せ、「ドッコイショー、ドッコイショー」の掛け声とともに次々と披露される。また、竿灯にはいくつかの技がある。



写真 5.1 大若



写真 5.2 中若



写真 5.3 小若

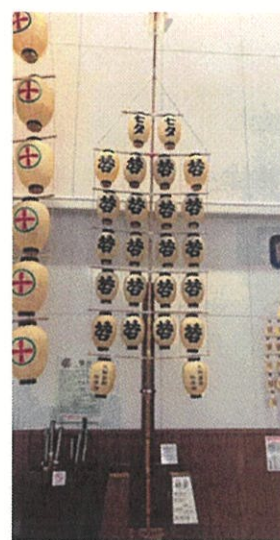


写真 5.4 幼若

まず額（写真 5.5）だ。竿を利き手の手のひらに受け、指の間から静かにずらしながら額に乗せる。額に静止させ、両手を大きく開き、足腰をグッと踏ん張る。これは竿を額で支え、首の根っこが座った質量感あふれる技である。2 つ目は肩（写真 5.6）である。これは竿燈を肩に乗せてバランスをとる初級の技で、比較的覚えやすい。3 つ目は腰（写真 5.7）である。これは手のひらで静止させたあと、腰に乗せる。上体を程よく横に傾け、両足を開いてバランスを取る。かなりの修練が必要な派手な技で、熟練の差し手が披露する。



写真 5.5 額



写真 5.6 肩



写真 5.7 腰

5.4 竿燈の歴史

竿燈は、起源的には青森ねぶた祭と同じように考えられている。青森県は大型の灯籠であるねぶたとして伝承されてきたが、秋田県は竿燈として伝承されている点で大きく異なっている。

竿燈の起源はねぶり流しである。秋田では「ねぶり流し」と呼び、全国では「眠り流し」

と呼ばれている。ねぶり流しは、古くから伝わる祖先の霊を弔う行事に、豊作を望む庶民の祈願などが結びついて盛んになったとされており、真夏の眠気や邪気を払う風習として広まっていった。はじめは、身についた汚れや悪霊などを川に流し、夜には提灯を高くかざして歩くような行事であった。また、眠っている間に悪霊が取りつくと思われていたため、盆のころ眠気を取り除くために七回水浴びするなどの風習があった。祭りの最終日の翌朝、竿燈の先端につけられた御幣（ごへい）を旭川に流す、御幣流しが行われる。御幣には神が宿り、市内を練り歩いたあと、川に流すことで睡魔や邪気を払うことができるとされている。竿燈の起源はこの眠り流し行事であり、以下三つの行事や風習が結びついたものである。まずは、子どもたちが笹竹に灯籠や短冊をつけて練り歩き、川に流した七夕行事、次にお盆に精霊を迎えるため、門前に建てた高灯籠の風習、そして農作祈願が結びつき、江戸時代中頃に竿燈が始まったとされている。

江戸時代後半には「眠り流し灯籠」と呼ばれ、子供や若者たちが長い竹竿に灯籠をたくさんつけて町中を練り回る「竿燈」行事となった。ねぶり流しは、明治14年から竿燈と呼ばれ、全国的に知れ渡っている。

5.5 竿燈まつりの保存・継承方法

竿燈の保存・伝承に取り組んでいる3つの団体を紹介する。一つ目は、秋田市竿燈会である。これは、昭和6年に組織され、町内竿燈会や市内の小中学校、各職場などと連携している。二つ目は、秋田市竿燈まつり実行委員会である。竿燈祭りのPRや運営を行っている。また、竿燈の実演や体験を通してふるさとの良さを感じ、郷土を愛する心を育んでもらえるよう、秋田市内の小中学校へ竿燈を派遣している。（写真5.8）この二つの団体は、実演や体験を通して、竿燈に関わることで学ぶ機会を作っており、後継者の育成と技術の伝承に努めている。三つ目は、ねぶり流し館である。

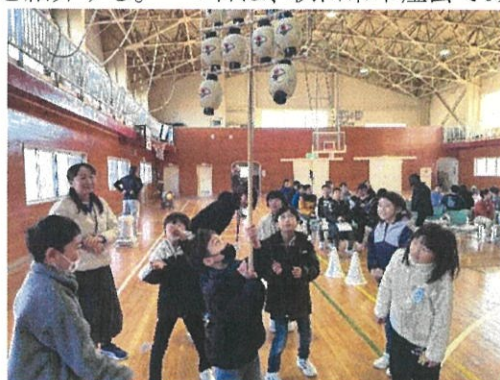


写真5.8 教育風景¹



写真5.9 体験

秋田市民俗芸能伝承館であるねぶり流し館は、平成4年に開館され、竿燈をはじめとする秋田の民俗行事や芸能の保存・伝承を行っている。また、施設内の練習室や会議室を練習の場として利用されており、ねぶり流し館は、文化の保存伝承、また、後継者育成と技術向上の場となっている。さらに、観覧者が実際に竿燈に触れ合うことのできる場にもなっている。私たちも実際に体験してきたのだが、バランスをとるのが難しく、指し手の技術の凄さを実感した。この竿燈は、実際に竿燈祭りで使用する大きさではなく、体験用の大きさとなっている（写真5.9）。

竿燈まつりが全国的に有名になってからは、出張竿燈（臨時出竿）と呼ばれる、県外での竿燈演技を開催しており、海外でも竿燈が上げられている風景が見られる。写真5.10と5.11は2022年の10月にフランス・パリで行われた、北前船寄港地フォーラムの様子である²。パリのほか、タイのバンコクと中国での活動も行われている。



写真 5.10 北前船寄港地フォーラム①

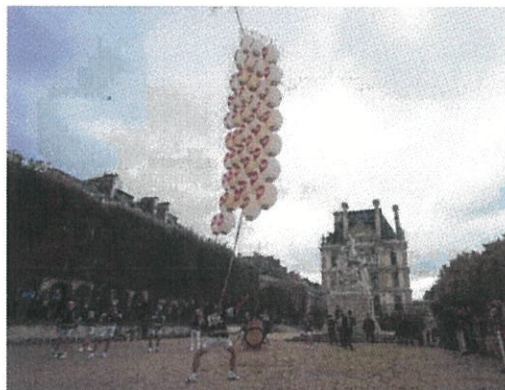


写真 5.11 北前船寄港地フォーラム②

まとめ

秋田竿燈まつりは、青森ねぶた祭りと同じ「眠り流し」という古い風習から始まったことがわかった。この祭りは、地域の人たちが協力し合いながら守り続けており、秋田市竿燈会やねぶり流し館などが重要な役割を果たしている。秋田竿燈まつりは単なるイベントではなく、地域の人々の思いが込められたものであり、この祭りが国内外で知られるようになったのも、地域の人々の努力のおかげだと思う。この祭りが今後も続いていくためには、私たちもその大切さを忘れずに守っていかなければならないと感じた。

註

- 1 秋田竿燈まつりの公式ホームページ、「小・中学校への竿燈派遣」より引用
- 2 秋田竿燈まつりの公式ホームページ、「出竿総集編」より引用

参考資料・参考 URL

秋田竿燈まつり-Akita Kanto Festival-公式ホームページ (<https://www.kantou.gr.jp/>)

秋田市民俗芸能伝承館 ねぶり流し館展示資料 (2024 年 9 月 22 日閲覧)

国土交通省「東北地方の主な夏祭りの人手状況」(<https://www.tb.mlit.go.jp/tohoku/content/000331080.pdf>)

6.まとめ

(種市享乃)

表を作成し、各県の祭りの比較分析を行った。まず表の項目は、左から各県で行われている祭礼、開催期間、保存場所（ハードな側面）、誰がどのように保存継承しているのか（ソフトな側面）のように分け比較分析を行った。各県独自の祭礼が行われているが、注目すべき点は後半の 2 つの項目である

初めに保存場所（ハードな側面）を見ると、山形県の花笠まつりには文化を資料として保存継承していくための建物がないことがわかる。花笠まつりは山形県の象徴である紅花を模した花笠を使用し、地域の美しさと農耕の様子を表現したものであり、山形県の重要な伝統文化の 1 つである。そのような山形の文化を地域住民や、歴史的に関わりがない人など多くの人がいつでも花笠まつりの歴史を知ることができるよう、歴史を記録し保存しておく施設が今後アーカイブ化の面で必要になってくるのではないかと考える。また記録された

資料は教育の場に生かすことができるためやはり保存場所についての検討が必要である。

	祭礼	期間	保存場所 (ハードな側面)	誰がどのように 保存継承しているのか (ソフトな側面)
青森	ねぶた祭	8/2～7	ワ・ラッセ	総合的な継承方法はない
岩手	盛岡さんさ踊り	8/1～4	もりおか 歴史文化館	仙北小鷹さんさ踊り保存会 などの各保存会や団体が 主体となって指導
宮城	七夕まつり	8/6～8	七夕ミュージアム	地域の女性を雇用している 業者に依頼して作成
山形	花笠まつり	8/5～7	×	四方山会が小学生に指導
秋田	竿燈祭り	8/1～6	ねぶり流し館	秋田市竿燈まつり実行委員 会が小中学生に指導

表 6.1 各県祭礼分析

保存場所となると、施設を新しく建設することになるため費用の面からみると難しい問題であるという意見が出てくる可能性もある。青森のねぶた祭にはワ・ラッセの他に「青森ねぶたミュージアム」というデジタル上でねぶた祭の魅力発信するサイトがある。このように施設を新しく建設しなくても、オンライン上で保存していくこともできるため、固定概念に囚われず視野を広げていくことが大切だ。

次にソフトな面では、各県がそれぞれ試行錯誤し、保存継承に務めていることがわかる。岩手県の盛岡さんさでは、盛岡さんさ踊り推進会や今回練習風景を見学しに行った仙北小鷹さんさ踊り保存会などの団体や保存会が主体となり指導を行っている。宮城県の仙台七夕まつりでは、七夕で使う飾りを地域の女性を雇用している業者に制作依頼している。山形県の花笠まつりでは、今回聞き取り調査を行った四方山会が小学生に踊りや歴史を指導している。秋田県の秋田竿燈祭りでは、秋田竿燈祭り実行委員会が主体となり小中学生に指導している。これら 4 県と青森県の青森ねぶた祭を比較すると、ねぶた祭はねぶた制作・跳人・囃子、それぞれが独自で保存継承を行っており、総合的な継承方法は確立されていないことが分かった。個々の団体で活躍するのはいいことではあるが、より青森ねぶた祭を盛り上げ全国や全世界に魅力を発信していくためには、全団体を統括し明確な目標を設定することや、継承方法を確立させる役割を担う委員会や団体が必要だと考える。今一度、青森ねぶた祭を今後どのようにしていきたいのか、全体が目指すべき目標は何なのかを全団体を巻き込んで明確化し、それらをまとめ導いていく組織について考える必要があると感じた。

7 調査レポート

7.1 「岩見沢ねぶた」

(大坂優生)

8/31、9/1に行われた岩見沢ねぶた祭 2024に参加した。北海道教育大学岩見沢校の祭り実行委員会と共に活動させてもらったが、ねぶたという共通のコンテンツを盛り上げようとする仲間としてすぐに打ち解けることができた。私たちは祭りの運営、ねぶたの化粧、解体まで参加させてもらったが、アドバイスをしあったり、共同で作業しあったりと、たくさんの交流ができた。私は、2日間とも扇子持ちを務めた。的確な指示の方法や初めて見る人たちへの魅せ方など勉強になることも多々あった。青森と違って見物客がねぶたの後ろをついてくるというシステムだったため、安全に気を付けつつねぶたを魅せなければならなかったところが難しかった。

参加にあたっては、青森ねぶた祭で得た知識や知恵を岩見沢ないしは北海道の皆様へ正しく、正確に伝えるという目標を持って活動した。ねぶた祭が身近にある私たちだからこそ伝えられることが多いと感じた。特にねぶたの土台や荷台に関しては、安全面に最大限考慮したビスや針金の留め方を伝えた。他に、明かりの入れ方も助言を求められたが、岩見沢ねぶたで採用している入れ方がとても参考になり、互いに成長できた瞬間だったと感じている。

祭り本番は、北海道唯一のねぶた祭りということもあり、過去最高だという 22,000 人の方々に来場いただいた。毎年のように来場者や規模を拡大しつつ、ねぶたのクオリティを上げるのが素晴らしいと感じた。さらに運営に関しても学生がすべてを担っていて、協賛や出店の交渉も自分たちで行っていると聞いた。同じ大学生として、この上ない刺激を受けた。来年もぜひというお話をいただいている。ありがたいと思うのと同時に、我々ももっとレベルアップしていかなければいけないと感じている。これからも岩見沢の素晴らしい学生たちと切磋琢磨していけるように、引き続き精進していきたい。



写真 7.1 岩見沢ねぶた祭の様子

7.2 「みちのく阿波踊り」 奈良彩葉

2024 年 8 月 31 日に山形県山形市山形駅前で行われる「みちのく阿波踊り」および、9 月 1 日おこなわれた交流会に参加したので、その報告を行う。

「みちのく阿波踊り」は、「東北はひとつ」を合言葉に、東北地域の活性化と東日本大震災からの復興を目指して開催されるイベントであり、阿波踊りを通じて新しいエネルギーを東北に取り入れることを目的としている。私たちは、青森県の阿波踊り団体「もつけ連」と共に、山形駅前で行われた「みちのく阿波おどり」に参加し、貴重な体験を得ることができた。

阿波踊りに初めて参加した際、動きに少し戸惑いを感じたが、ゼミの仲間たちと共に力を合わせて踊ることで、無事に踊りきることができた。阿波踊りの後には「ねぶた囃子」が始まり、会場は一層盛り上がった。他の団体のメンバーがねぶた囃子に合わせて踊ったり、観客から「ねぶたいいね〜!」「青森最高!」と声をかけてもらったりするなど、青森の魅力を多くの人々に伝えることができ、とても嬉しく感じた。また、祭りのクライマックスでは、参加した全団体が合同で踊る「総踊り」が行われ、会場全体が一体感を持って盛り上がる様

子は圧巻であった（写真 7.2、7.3）。



写真 7.2 参加風景



写真 7.3 参加者集合写真

祭りの翌日には、各地域の参加団体が集まり、山形の郷土料理である「芋煮」を共に味わった。「芋煮」の基本的な具材には里芋、牛肉、こんにゃく、ねぎが使われるが、地域や家庭によって味付けや肉の種類が異なることが特徴である。芋煮は時期になると、旅館や飲食店で提供されるほか、学校給食のメニューにも登場する。この機会に、芋煮をシメとしてカレールーと共にうどんに加えて食べる「カレーうどん」を楽しんだ。芋煮の出汁には旨味が豊富で、うどんと良く絡み、最後まで夢中で食べることができた（写真 7.4）。

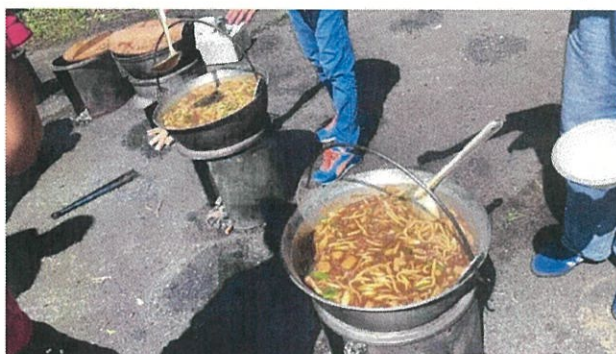


写真 7.4 芋煮

食事の後には、各地域の囃子や踊りを披露し合ったり、教え合ったりすることで、参加者同士の交流が深まった。祭りの雰囲気とは異なり、穏やかな交流の中で他の地域の踊りを楽しむことができた。また、この芋煮会を通じて、普段はあまり接することのない若い世代とも触れ合う機会を得ることができ、祭りを通じて「東北がひとつになる」ことを実感した。

「みちのく阿波おどり」への参加は、私たちにとって非常に貴重な経験となった。祭りを通じて、東北各地の文化や郷土料理に触れることで、地域間の交流が深まったと感じた。このような機会が今後も続くことを願い、また参加することを楽しみにしている（写真 7.5、7.6）。



写真 7.5 交流会風景①



写真 7.6 交流会風景②

参考文献・参考 URL

みちのく阿波おどり (<https://michinokuawaodori.com/>)

農林水産省の HP、「食文化 うちの郷土料理、SEARCH&MENU、芋煮 山形県」より
 (https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/k_ryouri/search_menu/menu/imoni_yamagata.html)

第二部 牧野修也編著 2021『変貌する祭礼
と担いのしくみ』学文社 レジューメ集

牧野修也著 第一章 地域社会から祭礼をとらえる (pp.1-30)

報告者：佐々木てる

一、「祭礼の担いのしくみ」を問う理由 (pp.2-4)

これまで：祭礼＝「地域社会の統合のシンボル」(祭礼の参加・継続が前提)

→現在：人口流出、高齢化、関心の低下→参加・継続自体が危機

○新住民が祭礼の参加に重要なこと

「地域社会の一員であることを居住者自身が意識」

「地域社会の側から地域社会の一員であると認識される」

→しかし、祭礼に求めるものも変容している可能性がある

それによって、祭礼に興味があっても不参加になる可能性が、、、

「肝」の部分が変化する可能性がある：祭礼は継承されるが「中身」が違う

そのため、

★重要なのは「人」ではなく「しくみ」を問題にすること

「しくみ」＝居住される人の意識、そして外部（観客）の意識

本書の目的：祭礼の変貌（「しくみ」の変容）を見ることで「地域社会の変動」を描く

二、地域社会の領域をどう捉えるか(pp.4-5)

地域社会とは？

辞書的：「一定の地域的な広がりそこに居住する人びとの帰属意識によって秩序づけられる社会」

本書：「祭礼を挙行する際に行われる個別具体的な社会的行為を行う単位としての地域集団」

例：祇園祭→祭全体ではなく、巡行する「町（ちょう）」というイメージ

三、「祭り」と「祭礼」(pp.6-7)

柳田國男の区分

「祭り」：神事、参加資格、内部性

「祭礼」：神事＋観覧、外部性（みられることを前提）

★では現代においても「祭り（神事のみをおこなっている所）」が残っているのはなぜ？

→なぜ「祭り」が「祭り」のままであり続けようとしているのか

「共同性」「周期性」「催事性」にも注目（「祭り」も含めた祭礼として扱う）

四、地域社会の社会学研究における祭礼研究 (pp.8-11)

祭礼の社会的な扱われ方（武田俊輔分類）

・農山漁村社会（農村社会学）

①人口減少を背景とした祭礼の継承問題

②地域活性化のための伝統の利用、復活

・都市社会（都市社会学）

- ①新規来訪者との葛藤と社会統合
- ②新規到来者を組み込むための祭礼行事の不可的要素
- ③一時的な縁による祭礼への参加

古典的な扱われ方（農村社会学）

- ・鈴木榮太郎（すずきえいたろう）
 - 神社：村社会の中心。村民＝氏子、村の領域＝氏子集団の領域
 - 祭礼に参加するのは最低限の義務
 - 祭礼＝公式行事、メンバーシップの有無
- ・有賀喜左衛門（あるがきざえもん）
 - 祭礼組織＝村落の生活組織の在り方が具体的に表れる

都市社会学的な扱われ方

- ・有末賢
 - 都市文化の変容と新住民の参入をキー概念として検討
 - 祭礼＝内部と外部という関係をもった重層的構造がある
 - 祭礼組織によって重視する点が違う
 - ★都市社会においても、参加資格によってメンバーシップが明示
 - ただし、農村部と違うところ：地縁、血縁＋選択縁。社会変動によって変化。
- ・玉野和志
 - 「新しい祭り」：町内とは異なるもの
 - 地理的領域性は前提：ただし前世代を引き継ぎつつ、新しい氏子組織の展開
 - 旧来の神社祭礼にはない内容を加える→「正当な後継者」の地位の獲得
 - 両者の違い：地域社会に属しているのが所与のことであるか否か
 - 祭りというイベントを通じて、自身が地域社会の一員であるという意識がはぐくまれていく

五、選択縁化する地域社会の祭礼（pp.12-14）

これまで地縁（選択と排除、コミューティ的）

→選択縁化しつつある

- ・上野千鶴子
 - ①伝統保存型：閉鎖的な地縁集団が担い手
 - ただしムラの祭り→担い手＝観客、
 - 都市の祭 →不特定多数、見世物、祭の時だけのコミュニケーション
 - ②行政主導型：演出型、神なき祭、イベント型
 - ③住民主導型：住民主体→伝統再生型と新興型
 - ④非地域型：下から（フリマ）、上から（企業型）、地域とあまり関係ない
 - ★全体的に義務ではなく参加が自由になりつつある＝選択縁化

六、祝祭化する地域社会の祭礼（pp.14-17）

地縁→選択縁化＝地域住民の凝集性が減退、つながりが弱体化していく

- ・松平誠
 - 都市社会の祭礼＝「合衆型」へ

地縁や血縁とは無関係な「連」や「講」といった「社会縁」のよる単位集合
→個人的な縁なので、加入脱退も自由、交換も可能、開放的なネットワーク
ただし、日常的なつながりが希薄、生活共同や生活組織にはつながりにくい

選択縁化→祭礼が選択されることが重視される：「祝祭化」

「新しさ」「最新」「更新」：興味を持ってもらう。

＝広報、マスメディアに扱ってもらう

外部評価によって祝祭の価値が決定される

結果：外部の評価が重要になる。→人の動員、文化財や遺産への指定

自分達のやっていることの正当性の担保

⇒「肝」を忘れることの危険性もある

ただし外部から変化しているように見えて、内部では一貫していることもある

・足立重和 例：郡上八幡の「郡上おどり」

「祖先」との継承重視（昔からやっている・伝統の追求）

横とのつながり「共通性」を重視（ここだけは一緒・本質性の追求）

★祭礼の担い手が何を重視しているかが問題

七、祭礼を「開く」とは (pp.18-19)

本書の主旨：祭礼を描くことで、地域社会の現状を描き出す

＝地域社会の変化で祭礼も変化する

・地縁集団（「閉じている」）⇒「開く」必要性の議論

背景：地縁集団＝「遅れている」

→必ずしもそうではない：時代時代によって変化＝「開いている」

「開く」＝意思をもった選択的な地域形成

そこに生きる人が、それぞれで何を活かそうとしているのか
達成しようとしているのか。

八、本書における各論考の位置づけ (pp.20-28)

第一部 「再構築される担いのしくみ」：大都市および地方都市

都市社会の祭礼

第二部 「担いのしくみとメンテナンス」：「縮小化」する地域社会

農山漁村の祭礼

第一部→京都祇園祭、滋賀県長浜市の曳山祭、長野県諏訪地方の御柱祭

川崎市ニュータウンの祭礼

第二部→鹿児島県串木野市の七夕踊り、長野県の人形三番叟（さんばそう）

千葉県印旛のオビヤシャ

中村圭著 第二章 マンション町衆が担う山鉾町の伝統

～京都祇園祭 蟷螂山～ (pp.34-71)

報告者：吉田翔太

一、祇園祭と町衆(pp.35-45)

(1) 祇園祭と山鉾町

・祇園祭

三大祭りのひとつ→2009年にユネスコ無形文化遺産に登録

起源：町衆による民間私祭として始まる

「人の往来が頻繁な都の宿命、外来の人びとからもちこまれる未知の疫病退散を祈念するもの」として定着

・山鉾町

「山鉾町」：山鉾を擁する町

「町衆」：祭りを担う人々→身分や時代によって変化

現在→運営は山鉾町を基本とした保存会組織、大部分が公益財団法人化

(2) 山鉾町の近代と大正デモクラシー 「適任者自治」のはじまり

・大正時代以前

家持層のみしか町衆として認められない

・大正デモクラシー後

祭礼行事に熱心に参加し、人格、教養とも適任と周囲から認められた者は合議の場への参加が許される(適任者自治)

(3) 祇園祭を担うエージェント

蟷螂山：お囃子をもたない山鉾に分類 (図 2-1 A パターン)

作事方(大工方)：山鉾の組み立て→高度な技術の継承

手伝い方(曳き手/舁き手)：14～20人で動かす

町内の有志、学生、ボランティアなど

(4) 高度経済成長・バブル・地上げからの集合マンション建設

高度経済成長期における地価高騰や高層ビル、集合住宅の建設により人口が減少
→旧住民の町離れとマンション新住民の急増により山鉾町の構成人口が変化

マンション建設に賛成した山鉾町は...

入居者に対し、町内会及び保存会への入会の強制やマンション共益費に町会費を組み込むことを決めた

マンション建設を受け入れなかった町では担い手の減少と高齢化問題が発生
→山鉾連合会や隣接する町から担い手を募る町も出てきた

ヒト、モノ、カネのマネジメント+「伝統」という文化資源の継承が必要

(5) オーバーツーリズムにより増加する警備負担とクラウドファンディング

・インバウンド観光客の急増、オーバーツーリズムにより宿泊施設の需要増加

→多くの宿泊施設が開業

- ・個人観光客の増加→多言語化、警備・案内の複雑化
→「神事」であるはずが「おもてなし」に町衆は翻弄
- ・警備費用の補完のためクラウドファンディングに挑戦(2017年～)
→意外性や目新しさから毎年目標金額を達成

二、祇園祭 蟬螂山 マンション町衆の誕生(pp.46-54)

(1) 祇園祭 蟬螂山起源

概要：居住人口は山鉾町で最多の700人超(約95%がマンション住民)
中国故事「蟬螂の斧」引用、からくり仕掛け
禁門の変により焼失
→1981年に復興(復興までの約110年間は「居祭」として参加)

(2) 昭和の復興と失ったコモンズの再獲得

- ・津田菊太郎氏を中心に蟬螂山保存會が発足し再興
担い手不足には外注による簡略化
からくり仕掛け：玉屋工房 作事方：竹田工務店 が担当
- ・旧住民が掲げる「マンション住民との共生」
例：講演会、参加案内の配布による呼びかけ、袴の着付け教室、子供の参加
→旧住民だけでなく新住民もともに祭りに参加できる仕組み

(3) どのような新住民が祭りに深くコミットするようになるのか？

- 家族で一緒に祭礼に参加して楽しんでいる人々が深くコミット
- ・祭への参加度合いはコミュニティへのコミットと深い相関関係

山鉾町の住民にとって山鉾巡行は「特別な行事」ではなく歳時記の中の「行事」つまり生活の一部

(4) 体験としての祇園祭とフリーライダー

- ・山鉾町に住むことだけを享受するフリーライダーの出現
メディアで見たことと現実とのギャップ→1,2度経験して去ってしまう

三、マンション町衆が担う山鉾行事の伝統と神事(pp.54-61)

(1) マンション町衆のリーダー誕生

2007年 マンション住民が初めて保存会の代表に就任
2014年 三役(執行委員)もマンション住民が就任
現在、執行委員全員がマンション住民

- ・費用
日本手ぬぐい、扇子、Tシャツの商品化→祭礼授与品として宵山で販売
※コロナ時は町内限定販売
- ・作家からのデザインの無償提供
「文化の力」：祇園祭に関与することで生じる名誉は威信となり、京の町衆の

目利きにかなったという保証になりうる
→先人が必死に守り抜いた財産に魅了される新住民の出現

(2) 負担が増加する自主警備と署名活動

・自主警備

祭礼期間中の交通量の増加はインバウンドの増加により複雑化

→危機意識の増大



「祇園祭における交通安全強化を求める陳情」を求めて署名活動

結果：町の住民の6倍近くの署名を集めた

なぜこんなに署名が集まったのか？

→蟬螂町を担ってきた歴史的な縁でつながる人々からの署名

「時空を超えた地縁」が外部へ可視化

(3) コロナ禍で出現した祈りの空間

応仁の乱当時：「たとえ神事、これなくとも山鉾渡したし」

山鉾巡行あり、神事なし

コロナ時：山鉾巡行なし、神事のみ執行

感染症拡大防止のため、行事の取捨選択が迫られる

→「本来、祭礼とは何か」を問う機会となる

観光公害により混沌としていた中、本来の祭礼が何だったのかを再確認

四、マンション新住民を包括する担いのしくみ(pp.61-66)

図2-2 新住民の参加の指向性

コロナ禍によりつながり指向から信仰指向へシフト

→飲み会の減少、「神事」の再認識

図2-3 保存会の組織形態とマンション新住民の参入パターン

パターンA ピラミッド型組織

パターンB 伝統的町衆型組織 (適任者自治)→蟬螂山

蟬螂山でパターンBがとられた理由

1. 旧住民の流出時、少人数での執行役員体制が整っていた
2. 新・旧住民の共生を掲げ、人材育成に積極的に取り組んだ
3. 山鉾保存会の組織形態が任意団体のままであったため
→ゆるやかな参入が可能

なぜ蟬螂山では町の神事としての山鉾行事が継承できたのか？

・時代や状況に合わせて臨機応変に対応してきた

例：高度経済成長時、コロナ禍

「担い手が『退出—参入』を繰り返し、有能で伝統文化・信仰指向を持つ人材が残る」
というシステムの構築 →「京都人への同化」

武田俊輔著 第三章 都市祭礼の興趣とダイナミズムは維持されるのか

～祭礼の「マニュアル化」がもたらすもの～ (pp.73-115)

報告者：松田優唯

一、本書の課題・祭礼におけるルールとノウハウの継承をめぐる困難 (pp.75-78)

○祭礼の継承が困難になる原因

少子高齢化、参加者の減少、物的資源や資金（ヒト・モノ・カネ）

→解決するために多くの手段がとられた

しかし、そういった資源は必要条件の一つに過ぎない

祭礼を行うことの由縁や意義、得られる達成感・喜びがなければ動機づけが失われる

○祭礼を行う意義

担い手：名誉や威信の競い合い

見物人：スリルや熱狂といった興趣

名誉ある地位が希少性を持つ→本気の競い合い→興趣がもたらされる

○問題点

・名誉・威信が希薄化→莫大な資源を費やして競い合うことの動機付けがなくなる

・知識やノウハウの継承→コンフリクトや人間関係への悪影響

よって、祭礼を行う意義が失われたり、伝承が困難になったりする可能性がある

二、長浜曳山祭の概要と調査データについて (pp.78-84)

○祭の概要

・滋賀県長浜市の中心街で毎年4月13日～17日に行われる

・起源：太刀渡り→羽柴秀吉の息子出生の際に町民に祝金を見舞い、それをもとに各町で曳山を造って渡ったことによる

・13の地縁組織（「山組」）があり、山組名+町内名がセットで呼ばれる

・曳山の上で子どもが歌舞伎を行う（狂言と呼ばれる）

・費用：町内ごとに800～1000万程度

・参加者：各家の世帯主の男性とその息子（女性に役割は与えられない）

・高い祭典費を納める家のほうがより威信が高い

・世帯主やその息子が任される役割の重要性で貢献度や威信が変わる

・人口減少により、地縁のない人も参加している

・若衆：狂言を担う45歳前後の人 代表→筆頭

中老：主に事務方を担う70歳前後の人 代表

○調査について

筆者が自ら祭礼に参加

インタビューや参与観察、語りを分析に反映させた

三、祭礼における用益の配分とそのノウハウ (pp.84-91)

コンフリクト：名誉・威信とは異なるもう一つの用益

祭礼の興趣であり、時には積極的に創出される
家同士...狂言でどこの家の子どもがどの役を務めるのか
世代間...立場の違い

(若衆：狂言で名誉を誇示したい、中老：費用を抑えたい)

「全部がうまいこといきすぎて完全にマニュアル化されたら、祭りというのはイベントになって、祭りの高揚感はぐっと減る。これがなかったら一本調子で、面白くも何ともない」

意図的にコンフリクトを発生させ、興趣を発生させている

四、柔軟なルールと伝統のダイナミズムを可能にするしくみ (pp.92~96)

祭礼のルール、柔軟性の継承→「恥をかかせて勉強させる」「訊いて覚える」

若衆：記憶に残り忘れない。長老：知識を披露して威信を高められる
日常的な会話や人間関係の結びつきがあってこそ、伝承も可能になる

コンフリクトの記憶こそが、祭礼における「伝統」や無形のルール、などを印象深く伝える上で重要な意味を持つ

コンフリクト→日常でそれについて話す→洗練される→鉄板ネタになる

飲み会の席で酒の肴として繰り返し楽しまれ、世代を超えた鉄板ネタとなり、やがて町内の伝承につながる

五、コンフリクトを通じた伝承の困難化

- ・全体的相互給付関係が成立する要件：「近隣性」あるいは「地縁」。中心市街地に店だけを残して住まいを中心市街地外に移したり、店をテナントとして貸し出して郊外に住んだりする人たちが選択縁的な関係性の人たちの増加

↓

飲み会などの日常的な関係性が成り立ちにくくなった

現在会議は二か月に一度ほど。よって、「自分で勉強する」「訊いて覚える」が難しい飲み会などでのコンフリクトをネタにする無形のルールの伝承も困難

→経験のない若衆に伝わっていない

マニュアルを明文化してほしいという若衆が増加。だが、「無形のルール」によって生まれるせめぎあいやダイナミズムがマニュアル化することによって失われるというギャップ

◎祭礼をめぐる興趣とダイナミズムの消失こそが、祭礼の危機と似内の仕組みの変容である

六、祭礼のダイナミズムは引き継がれるのか (108~110)

現在の祭り：「フェスティバル化」「委員会化」「イベント化」

誰がやっても何とかするような運営の仕方にならざるを得ない

「楽衆塾」...祭礼に関する知識を学ぶための学習会

しかし、祭礼が持っている柔軟性やダイナミズムが伝承できるかは疑問

コロナにより、口承によるコンフリクトやルールの伝承の機会が減少

◎固定化された「伝統」をマニュアル通りに継承するだけではなく、活力とダイナミズムをともなっでんしょうされていくかどうか

矢野晋吾著 第四章 諏訪地域における御柱祭^{おんぼしらさい}の変化と継承

～“観光資源”化と“伝統”のせめぎ合いの中で～(pp.119-151)

報告者：中野ありす

一、氏子の奉仕から、「見られる」祭礼へ(pp.119-120)

○御柱祭

- ・長野県諏訪地域の諏訪大社を中心に行われてきた祭礼
- ・数え年で七年に一度(寅と申の年)に催行
- ・山より巨木を切り出し、氏子の人力のみで曳行、神社の四隅に立てる

→諏訪地域の人々の生活時間の中軸となり、精神的な支柱としての機能を果たす

☆変化① 祭そのもの

従来：地元地域の氏子による諏訪大社への自主的な奉仕としての祭礼

1980年代後半(バブル期)：観光資源としての側面が年々強まる

→結果、担い手である氏子・行政・観光関係者、観光客、地元の氏子たちの間
祭礼に対する意識のズレが生じている

☆② 担い手

従来：消防団を主軸とした屈強な若い男性

祭礼に附随する要素の拡大傾向にともない：若年層、女性

→積極的に祭礼に関与してこなかった層の参加促進、アクターの多様化が進展

“観光資源”化に伴い祭礼が「開かれ」ていくプロセスのなかで、祭礼、地域社会にもたらされた変化とは？

二、諏訪地域と諏訪大社・御柱祭の概況(pp.120-126)

(1)諏訪地域

2021年現在、岡谷市、諏訪市、茅野市、諏訪郡下諏訪町、同原村、同富士見町の六市町村から構成→御柱祭に直接かかわる氏子の範域

○人口

1980年～2015年まで微減傾向 平均約207,000人

2020年 コロナにより移住者・Uターン者が増加
約212,000人

→全体として、少子高齢化が進展し微減傾向にある

理由は、高収益を得られる産業に恵まれていたから

(2)諏訪大社の歴史

諏訪地域の信仰の軸となってきた諏訪大社

～奈良・平安時代：神功皇后や坂上田村麻呂の時代に神威を示した。

国家安泰と五穀豊穡を祈願し歴代朝廷が崇敬

平安時代：関東第一大軍神として知られる

鎌倉時代～：多くの将軍や武将が社領を寄進、奉納した

庶民→雨・風の神、水の神、五穀豊穡の神として崇敬

現在：膨大かつ特殊な神事を行う古社。全国に約6,500社



○祭神

タケミナカタノカミ オオクニヌシノカミ ヤエコトシロヌシノカミ
上社→建御名方神(男神) 父 大 国 主 神 兄 八 重 事 代 主 神 = 国造りの神々

ヤサカトメノカミ
下社→八坂刀売神(女神)

○構成

諏訪大社は 4 つの神社の総称

- ①上社前宮 | 諏訪湖の南方
- ②上社本宮 |
- ③下社春宮 | 諏訪湖の北方
- ④下社秋宮 |

四つの神社の四隅、合計 16 本の柱を建てる



(3)御柱祭の歴史

奈良時代～：桓武天皇 信濃国の租税を造営費に充当

すわだいみょうじんえことば
1356 年：文献登場 『諏方大明神絵詞』

江戸時代：諏訪郡内が軸となり祭礼が行われた

明治時代～：下社・上社の地域分担はじまる

1994 年：長野県無形民俗文化財

(4)生活時間としての御柱祭

諏訪の人々にとって、日々の生活における精神的な支柱、人生の時間の一つの主軸

○御柱祭が行われる年の厳しい禁忌

- ・ 結婚式、元服式、家屋の新築建て替え等 (現在もその傾向あり)

○蕩尽(財産を湯水のように使い果たすこと)

御柱祭の際、曳行の経路に面した氏子の家では酒食などの「おふるまい」をする

多額の出費→地元の信用金庫では御柱祭に向けた積み立て預金の商品がある

三、“観光資源”化する御柱祭(pp.126-135)

(1)“観光資源”化へのプロセス

1962～1980 年緩やかに観光客数増加

～1986～急増

1998 年：長野オリンピック開会式にて御柱祭の一部が披露され知名度向上

2016 年：観光客数減少

- ・ 地元行政の予算規模も増加→経済波及効果 200 億超え

- ・ 氏子の参加が近年急増→地元住民のアクターが急増

総動員数の急増→祭礼の“観光資源”化をもたらす

地元の行政、観光関係者、住民⇨御柱祭に“地域資源”としての価値を再発見

(2)運営体制の組織的管理に向けた動き

○観光客増加に伴う影響

- ・ 時間通り見られない ・ 勝手に曳行に参加 ・ 地元民が想像できない危険な行為

↓

御柱情報センター（御柱祭観光情報センター）開設、情報の一元化を図る

- ・御柱祭プロモーション各種事業の推進 ・各種関係機関との連絡調整
- ・情報集約と発信 ・情報一元化検討会議

○対策

- ・駐車場状況 ・問い合わせの一元対応 ・有料観覧席設置
- ・地域住民の思い、取り組みの発信 ・ルール、マナー徹底の呼び掛け

○諏訪地方大社御柱祭情報一元化会議

行政、観光業者だけでなく、氏子組織とも情報を共有する組織

○苦情の大幅な減少

ルールやマナーの周知、パブリックビューイング実施→混乱回避のため新たな取り組み

(3)観光・行政関係者と氏子たちの「温度差」

a.強化される規制

- ・観光客中心の対応→従来の祭礼の運営に新たな変更をせざるを得ない
- ・曳行におけるさまざまな制限、特に時間管理→氏子にとって大きな課題、不安
- ・有料観覧席の設置→時間管理の厳格化(下社)
- ・柱ごとに観客の入れ替え、次の柱の準備→厳しい時間管理(上社)

観光客からは時間厳守の声が上がる

b.誰のための祭礼なのか

- ・観光客向けの対応→氏子からの不満の声
- ・観光要素が強まるにつれ、「村落」の時間→「産業」の時間が重視
- ・時間管理の厳格化→観光客の安全管理の徹底；誰でも気軽に参加できなくなる
- ・地元民の場所から氏子が閉め出される

「誰のための祭礼なのか」「受け入れは飽和状態」「祭本来の形態の維持」

観光客-氏子 「温度差」埋める取り組み

観光客-観光 行政関係者-氏子、指揮氏子-一般氏子

「温度差」なかなか埋められない

四、拡大するアクターと“伝統”へのまなざし(pp.135-143)

(1)拡大するアクター

観光客以上に、氏子の参加が急増

戦前：消防団中心の屈強な若い男たち

戦中：若い男たちになり変わり子供たち参加

戦後：子供に加え、女性の曳行も認められる

近年：急激に氏子の参加が増加

年齢層、性別により祭礼の関与が異なる

①“観光資源”化によりマスメディア等で注目を集め氏子たちが御柱祭を再評価

②祭礼自体の構成要素が変化し、新たなアクターたちの役割が拡大

○伝統的な構成要素の変化

- ・子供木遣り→母親たちも祭礼に付き添い参加する
- ・ラッパ隊→女性、中高生など

屈強な若者の独壇場→“文化系男子”や女性など新たなアクターが活躍する場

御柱祭は、若年男女が地域社会における祭礼にアクターとして参加できる機会

(2)“伝統”へのまなざしのギャップ

観光客からラップ演奏に対して否定的な意見

1980年：岡本太郎氏が御柱祭を縄文文化と結びつけ、その認識が広まる
マスメディアも御柱祭と諏訪地域を縄文時代や古代とのつながりを強調

↓「縄文文化」と関連させ、「観光資源」化を推進

比較的新しい「ラップ」への違和感増大

祭礼の一部でラップ演奏を除外・自粛する動きもある

新規アクターはラップ隊として積極参加

観光客・一部氏子たちの反対の声により祭礼に影響を与えつつある

改めて、「誰のための祭礼なのか」

五、“観光資源”化と“伝統”のせめぎ合いのなかで(pp.144-151)

○「観光・行政関係者」対「氏子」温度差問題

観光客の期待、不満解消のための取り組み→誰のための祭礼なのか

○氏子(特に新規アクター)対「観光客」価値観のズレ

氏子自ら祭礼を再認識→祭礼の構成が多様化してきた

新たな構成要素：新規アクター曳行に花を添える不可欠

→地元氏子たちの「価値観」やメディア認識とのズレ

☆祭礼の担い手

地域社会における一定の機能を果たしてくれる若者が活動に参加する

↓ex.ラップ隊

リクルートメントの契機としての機能を果たしている

若年男女のアクターを生み出す効果は今後の祭礼を考える上で重要だろう

◎まとめ

「温度差」や「価値観」のズレも生じたが、同時に従来祭礼の周縁にいた新規アクターを祭礼へと巻き込む機能を果たしていた。

観光客視点では、“伝統”(縄文、古代)と対立する動きに見えるとしても、参加者する当事者及び地元の氏子たちは多様な“伝統”の一定の側面に準拠した変更である。

↓

変化のなかでこそ、御柱祭という地域に根ざした祭礼が継承されてきたのだろう

↓

祭礼を開く

夏秋英房著 第五章 川崎市宮前区 (pp.154-189)

報告者：阿部仁菜

一、土橋町内会と川崎市立土橋小学校の概要 (pp.155-157)

○土橋小学校

- ・ 隣り合う3つの小学校からそれぞれ一部を分離・割譲して新たに小学校区を構成
→2006年にコミュニティ・スクールとして新設
- ・ 地域社会の参画を理念として掲げた公立小学校
- ・ 学区をいかに調整し融合・統合して学校を運営するかが最大の課題

(初代校長の言葉)

○土橋町内会

- ・ 多摩田園都市開発事業で新たに開発された地域
- ・ 「地域に開かれた学校」として建設されたことに対応して学校運営や教育活動に緊密に参加することが課題
- ・ 流入する人口が多く、世帯数も若い世代を中心に増加しており、児童数も増加

二、土橋小学校と土橋町内会の特性と関係 (pp.157-160)

(1) 土橋小学校区の特性：地域の概要

- ・ 多摩丘陵東部に位置
- ・ 山林の中に畑作と谷戸の稲作を中心とする農村集落が点在していた
→現在は数軒の農家が直売しているだけ
- ・ 1962～1978 土橋地区で土地区間整理事業が開始
1968～1975 小台地区で土地区画整理事業が施行
1966 大井町線(田園都市線)が溝の口から長津田まで延伸
→宮前区内に宮崎台、宮前平、鷺沼の三駅が作られた

(2) 学区の住民の特徴

- ・ 区外に通勤通学する人が圧倒的に多い
- ・ 若年層や子供が多く、市民活動が盛ん
- ・ 働き盛り世代や帰国子女が多い
- ・ 土橋小学校の保護者は比較的高学歴者が多く、子供の教育には熱心な親が多い
→地域行事への参加児童も急減

(3) 土橋町内会は土橋小学校の創設をどのように受け止めたのか

- ・ 期待や関心が深い
- ・ 土橋小学校の子供たちを安全で安心に登下校できるように見守ることは地域の責務

三、社会教育・生涯学習活動における芸能伝承 (pp.160-174)

(1) 土橋太鼓連

- ・ 7団体の保存会が組織されて民俗芸能を伝承している
→しかし、地域全体を見渡せば、民俗芸能の伝承が薄い
地域も学校も芸能については空白地帯が広がっている
- ・ 例外的に、和太鼓や子ども太鼓は、川崎市内でも多くの団体が活動し、和太鼓教室なども開催されている

○太鼓連の始まり

- ・神官から盆踊りの太鼓の指導を受けて練習を始めたのが発端
→その後、盆踊りで子どもたちが太鼓を叩く慣わしが続き、太鼓の練習が組織化
- ・1999年に土橋太鼓連という名称に

○太鼓連の趣旨

- ・太鼓を叩くことにより地域社会への感謝の気持ちを込めて貢献する態度を養う社会教育的な性格を持った活動
- ・地域意識を形成していくとともに、異年齢集団でひとつの目標を達成し、保育園児に接する機会ともなる貴重な体験を提供する教育活動
- ・「先祖の供養のため」に盆踊りを叩くのだということを強調

○活動の特徴

- ・練習の開始と終了における挨拶と礼儀、練習のけじめを重んじる
- ・子どもたちの自立性が高く、規律が守られ、異年齢での教え合いが行われている

(2) 土橋万作踊りの保存会

○万作踊り

- ・狂言(芝居)のなかに、万作芝居として分類

<由来と特質>

万作→豊年万作

- ・主に南関東平野部にちらばる農村演芸であり、境内や掛小屋で演じられた
- ・伝播者の飴屋や地名、囃し詞などに由来する呼び名が様々ある
- ・民俗芸能は郷土性をもち、その土地の進行や歴史物語の一端を担っている

<土橋へどのようにして万作踊りが伝わったか>

- ・川崎市麻生地区王禅寺にいた役者上がりの飴屋→横浜市青葉区保木
土橋の男性が保木まで出かけて習い覚えた
→村の念仏講の宿を廻ったり、結婚式のある家などで踊ったり
- ・村の若衆を中心に村祭りや農家の祝い事などで演じられ楽しまれ、定着した
- ・当時の青年たちの楽しみであると共に地域内に娯楽を提供し、近隣地域とかわりを結ぶ貴重な文化資源であり、また収入源のひとつ

<現在までどのようにして継承したか>

- ・戦災の過程で万作は中断したが、戦後は小学校や公民館で演じられたりした
- 1973 大久保作雄ら有志7名が保存会を結成
- 1974 川崎市教育委員会より川崎市民俗芸能の指定を受けた
- 1991 理事会長の久保和江氏 保存会に初めて女性が加入
- 2019 保存会の構成員は15名に
- ・保存会は様々な行事への出演や、土橋小学校と富士見台小学校に万作踊りを毎年指導している

四、学校教育における民族文化の伝承—土橋小学校の事例をとおして (pp.174-182)

2014年度：総合的な学習の時間の単元計画として社会科の学習と合科でおこなう

2019年度：学習の柱を校歌の意味を考え、何を大切に学び、生活していけばよいのかを具体的に考えることに

- ・3年生で万作踊りを保存会の人から習い、4・5・6年生のときに運動会で万作踊りを保存会の人達と踊る、という大きな流れは堅持されている

- ① 身体性にかかわること
- ② 民俗芸能における詞と音楽の関係にかかわる
- ③ 楽しさ、美しさへの気づきと喜び
- ④ 伝承する必要とその課題に気づいていて、保存会の存続など、保存会の人たちの課題をわがこととして考える

五、学校教育をととして民俗芸能を伝承する意味 (pp.182-185)

- ・「日本のアイデンティティ(伝統、文化の尊重、郷土や国を愛する心)の視点」が学習要領に取り込まれた
- 保存会における教え方の学校における教え方の違い(西郷)
 - ① 学習者と指導者の割合
 - ② 文化的な背景
 - ③ 時間の制約がある
 - ④ 学校では多くの指導者が、その芸能の伝承者ではない
- 「学校芸能」において民俗芸能が教授される際の特徴(呉屋)
 - ① 学校と地域社会の相互作用の過程で新たに想像される、新たな文化であること
 - ② 他の地域の民族芸能や国の文化政策などの影響を受けながらも、地域社会の文脈の中で展開していること
 - ③ 地域の民族芸能の「継承者」を生み出していること

六、学校と地域社会の協働による民俗芸能の伝承と担い手の育成 (pp.186-188)

- ・学校における教育課程内・外の活動として位置づけられることが重要
- ・少子化による児童数の減少や教員の働き方改革が教育政策の課題となる一方で、教育課程の改訂により指導内容は増加 →学校で地域の伝統文化を継承する機会が減る
- ・学校教育：地域社会と連携して教育活動を組織し、協働
 地域住民：学校の運営の参画や教育活動の参加
 →限られた時間の中で行う内容や部活動のありかた、子供たちをどう育てるかの課題がある

俵木悟著 第六章 大里七夕踊と青年団のかかわりの 100 年(pp.195-237)

報告：鳥山凌空

一、大里七夕踊における継承のしくみの変容(p195)

・大里七夕踊

鹿児島県いちき串木野市大里に伝承される七夕踊

→少子高齢化により伝承の危機を迎えている

本章...単なる若年層不足という問題としてではなく、

踊りの継承を支えてきた社会的な「しくみ」の変容として考察

・七夕踊の継承

担いの主体:大正時代初期から姿を現した青年団

しくみ:組織構成、規則、活動内容からうかがう

大正時代から現在までの 100 年でしくみが大きく変化した 3 つの時期を取り上げる

二、地域と事例の概要(pp.196-200)

(1) 地域の概要と社会組織

● 大里七夕踊

・鹿児島県いちき串木野市大里にて八月上旬に行われる民俗芸能

● 大里地区

・いちき串木野市南部

・基本的には稲作と果樹栽培

・若者は近隣企業や役場に就き、駅前へ住み七夕のときは出身集落から参加

(2) 大里七夕踊

・以前は 14 の集落が踊りに参加し演じられていたが現在では 10 に

・構成は 2 種類からなる

参加する各集落から 1 名ずつ踊り手をだす太鼓踊り→七夕踊の中心

集落ごとに分担して担う作り物・行列物

大里七夕踊の本義→青年を一人前に育てること

三、大正～昭和戦前期の七夕踊と青年団(pp.200-211)

(1) 二才から青年団へ

・二才(にせ)...近世薩摩藩で士族の子弟に形成されていた若者組織

→大正初期いくつかの集落で「青年」と変化。

(2) 七夕踊は青年の義務か

大里地区青年団にとって最も重要な活動は七夕踊へ参加すること

太鼓踊りの踊り子を務めることが退団の条件→最近まで青年の義務とされていた

(実際に明記されているのは少ない)

義務と考えられた根拠

...不参加者に金銭を課せられることが挙げられる(p.203)

・課される金銭は二種類

① 毎年の七夕踊に不参加の団員がとられる「日当」 毎年安定

② 太鼓踊りに参加しなかった者がとられる「踊り代金」 日当に比べ高額

日当も踊り代金も諸事情で参加できない青年が払う代償と考えるのが適切

また、踊りに参加したくないという人も多く、
回避するために金銭を支払うこともあったとされている

青年団は踊りに参加すべきとされていながら様々な理由で参加しない人が
相当いたことが認められている

(3) 「日当」「踊り代金」徴収の意味

徴収した日当...踊りで使う経常的費用 (安定)

踊り代金...衣装や道具の修理や新調 (不安定)

踊りにかかる収入は日当と踊り代金のみ

→ 日当や踊り代金を納める者が一定数いることで成り立っていると考えられる
(踊りへの関わり方に選択肢を持たせている)

四、昭和三〇～四〇年代の七夕踊と青年団(pp,211-222)

(1) 戦後の大里地区の青年団の変遷

終戦後旧市来町では、人口が大幅増加し、1949年頃まで青年団活動は盛んになり不在者の数は減少した

1950年代に入り、人口は激減

要因...出稼ぎ先への定着が一般化

→単純な人口流出や過疎化とは異なる複雑な問題となる

15歳で団員となり、団を退団するまではどこへ行っても籍は残ったまま
構成員かどうか曖昧になるからだ

(2) 踊りの最盛期であり、動揺期

この頃の七夕に対し、参加率が低かったのにも関わらず肯定的評価が多い
その要因がいくつか挙げられている

要因

・各集落の青年団と官製青年団組織が切り離された存在となり、青年を1人前に
育てるという意味合いが弱まったこと

・不在青年が増加したことで思い通りの七夕を実現できるようになったこと

・作り物では、流行りものの制作やサングラスをかけて参加できた堅苦しさが無
かったこと

結果として、青年団は親睦団体化し、活動のほとんどが七夕踊に特化

しかし、七夕参加への是非が問われるような動揺も生まれていた

1960年代頃には参加しない集落もあった。

原因は七夕踊の享楽化、官製青年団組織の弱体化がある。

(3) 在郷青年と不在青年の利害の二分化

在郷青年と不在青年との間に七夕に関わる利害の格差の発生

在郷青年...練習参加も容易い

不在青年...日当を払う方がいい、払うしかない

→帰るのにお金がかかる、会社の休暇は取れない

このため「踊りに参加する」という勤めを果たすための条件が大きく異なる

不在青年が帰郷しても七夕踊に対しての好感をもつことは困難になり、後の世代にも響く可能性がある

(4) 「青年の修養」に代わる価値としての「伝統文化」

この頃には「青年の修養」に代わる新たな七夕踊の伝承を支える価値が出現

- ・ 1961 年 鹿児島県の無形文化財の指定→補助金(ほぼ意味なし)
- ・ 1981 年 国の重要無形民俗文化財指定→多くの補助金(現在、大きな財源)

これまでと異なる「伝統文化」として残していこうという考え方が生まれる

五、平成二〇年以降の七夕踊と青年団(からの離脱)(pp,223-229)

(1) 青年団主体での踊りへの参加の限界

2008 年 初めて太鼓踊りに参加できない集落が生まれる

参加できなかった中原集落では、「部落踊り」を検討。

部落踊り...青年団や青年という年齢・資格にとらわれず、集落の有志が結束して参加するという意味

大里七夕踊保存会の発足→各集落青年団をサポートするため、「連絡員」の設置

2012 年 新しい試みで外部から人を呼んでの参加や女性の参加もあった

しかし、参加できない集落は必ず一つはある状態であった

(2) 内発的な改革

2012 年 「七夕踊り継承のための検討委員会」が開催

2013 年 新たな取り組みが行われる

- 1.踊り相談を二か月前に実施
- 2.ポスター作成
- 3.写真コンテスト
- 4.地元学校への協力依頼→地元高校を中心に継続的な協力者

(3) 外部協力者というジレンマ

2017 年 当日の台風接近による祭りの縮小を決定

よって、遠方からの協力者への対応や手配した弁当などのキャンセル

→すべての負担が地元民にかかってしまうという問題も発生。

外部からの協力者が増え、七夕は維持できるようになってはいるが、その分大きな負担がのしかかることにもなった

六、まとめ-責任の分掌のしくみと、その均衡の喪失(pp,229-232)

担い手の内側からの改革が行われ、その方向性には二種類ある

- 1 現状の人・モノ・金などのリソースで実現可能なかたちに七夕踊を作り変えること
- 2 踊りの様式は大きく変えず、それを維持するのに必要なリソースを新たに獲得し再編成すること

七夕踊では、2 番が多くみられ、外部協力者なしでは開催できないまでの存在となっている。

→しかし、増えることで負担も大きい

踊りを伝える責任のバランスを保ち、分掌する仕組みを構築することが必要
→しくみは時間をかけて積み重なったものが一定の構造をもつものと認められ初めて
伝統となる。

牧野修也著 第七章 「担い」のしくみを変容させることで継承する集落芸能

～長野県南佐久郡小海町親沢集落・人形三番叟～(pp. 239-271)

報告：内海空

一、問題の所在(p241)

山村集落において

高齢化や人口減少により若年層の居住者が減少

⇒伝統的に行われてきた芸能・祭礼の担い手を見つけることが困難に。

従来と異なる方法を求められる局面が出てくる。しかし 無制限に変えるのは違う。

「変えられるところ」と「変えられないところ」がある

本章では“なぜ”「変えられない」のかについて考察

二、本章の対象地の歴史と現状(p242-247)

本章対象地域—長野県南佐久郡小海町(度重なる合併の末小海町が成立)

親沢集落は山間部に位置する

産業の変遷

慶長数百年間 少々の畑作が中心の生活

悪条件の農地だが、屋敷数は増え江戸期には集落成立

明治以降 林業主体へ変化

役場用掛かり(庶務)の井出利左衛門が林野保護組合を結成

共有林を管理し、45万5千本のカラマツ人口造林を形成

⇒冬期間就労の場や共有林運営費の残金配当

親沢集落に大きい経済効果をもたらす

高度経済成長期前期頃まで、「親沢は豊かだった」

しかし...

○カラマツ需要の減少に伴い、林業主体の産業構造が変化

⇒農林業以外の産業に収入を求めなければならず、雇用労働者となる。

(役場・農協・建設業等)

○成人子が親と同居しない核家族化も進み人口が減少

⇒年少人口率が低下。

これらが三番叟の継承システムに大きく影響していくこととなる。

三、親沢人形三番叟の歴史としくみ

(1)親沢人形三番叟の歴史

親沢人形三番叟の歴史は天明年間(1781-1789年)に遡る。

安永～天明期⇒人形式三番の盛行期とされる。淡路人形の運搬者(うんさいしゃ)が祈

禱(きとう)舞踊とともに三番人形&尉面(いめん)を伝授。授与された人形類は神聖視さ

れ、神社や人形頭屋の聖所に保管される習慣であった。

○親沢の人形三番叟

五穀豊穡を願い、隣接した川平集落の鹿舞と共に親沢諏訪神社に奉納

・奉納当日

- 1 川平集落の鹿舞を西舞台で奉納
 - 2 親沢集落の三番叟を東舞台で奉納
- 鹿舞と三番叟は2つで1つであり、どちらか一方だけ行うことはできない。
親沢と川平は別集落だが、祭の際のみ共同で行っている。

○沿革

- 明治初年 開催日は旧3月3日に固定されていた
 1967年 開催日が4月3日に変更され固定される
 1970年 川平集落の鹿舞と共に小海町無形文化財に指定
 1985年 人形三番叟のみ長野県無形民俗文化財に指定
 2003年 開催日が4月第1日曜日に変更される。
 ⇒農林業以外に就労したことで、勤務先との関係が無視できず日程を固定して行うことが困難なため
 2015年 「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に指定
 その後 4月第2日曜日に変更される

(2)三番叟のしくみ

a 三番叟の出役者

○従来(永田による記述)

- ・親方(統率者) 1人 ・謡い手 4人
 - ・デコつかい(人形) 4人 ・面箱持 1人
 - ・囃方 9人 ・後見 2人
- 其他・神官氏子総代・祭典係として一戸1人は必ず出役のこと。
 ただし他村からの移住者は参加しない。これら役々は所定の家(いえ)統(すじ)があり、代々長男が世襲する。服装は随意。

○現在

- ・人形 4人 ・囃方 8人
 - ・祭典係 ⇒集落をいくつかグループ分けし、1年交代で行う
 - ・謡い手 ⇒小鼓(こつづみ)が担っている。
 - ・面箱持 ⇒人形の「親方」が担う。
 - 後見 ⇒祭典係が担う。
 - 服装 ⇒羽織と言われる衣装を着て行う。
- 舞台で演じる人以外の役割分担は統合か？ 人形操者・囃方は基本的に変更がない

b.三番叟の一年間の流れ

3月下旬 練習開始

4月 本番

翌年まで練習は行われない。三番叟の人形使うのは約半月のみ。

変わった点

“引きつぎ”＝三番叟役者交代時の「親子杯」

役者が弟子として出役する最後の年の本番後行うことが通例。

「検越」つそろえの前に行く。親沢三番叟特有の役者継承システムに由来

実際に演じる「弟子」を、先代「弟子」の「親方」がきちんと教えているかを親方の親方である「おじっさ」が確認 →代々同じ動きが継承されてることを確認。

一年の流れ

- ①舞台び開きの日：井手家の蔵にある道具一式を公民館へ移動ののち組み立て。
- ②ぶつそろえ：神社の舞台で一度練習。二度目がぶつそろえと呼ばれる。
- ③本番の日：公民館から神社へ、本番の御神酒もらうと役者は神になるとされる。
これ以降は、「親方」も指示を出せない。
- ④本番後：「親子杯」が行われる年以外井手家に道具をもどす。
- ⑤「虫干し」：8月第一土曜日。「弟子」のみ井手家に集まり衣装の陰干し・道具確認を行う。

c. 三番叟出役者の継承のメカニズム

○継承システムの特徴

弟子ー親方ーおじっさを各七年合計二一年勤める親沢の人形三番叟の肝としての特徴は、七年ごとの「弟子ー親方ーおじっさ」という独特のシステムにあると、親沢の人びとからは理解されている。本来、三番叟の役者は、跡取りである長男によって行わる。

擬制的親子関係を結ぶ

⇒それぞれの役ごとに役についての所作・技術や道具の管理の仕方などを伝えている。

身内に出産・葬儀

⇒出役と同じマケ（同族）も出役を慎む。

例)「弟子」ができない場合は「親方」が代行する。

少なくとも三代の間では異なるマケ同士で擬制的親子関係を結ぶことになる。

親沢三番叟の伝統として存在する。

竹内利美。村落内部の集団間の協力関係を、①本家分家関係など同族団・村内親族関係、②近隣関係、③性と年齢で区別した年序集団の三つに分けた。組み合わせやあり方は、それぞれの集落の地理的・歴史的要因によって変わる。

○長男という性別と出生順位という属性的要因によって参加資格が生得的に定められる。

⇒家の跡継ぎである長男という性別+出生順位によって厳密に区別された成員が、参加資格がある者として規定

○「弟子ー親方ーおじっさ」という擬制的親子関係という形年齢階梯の秩序。

⇒擬制的な親子関係を構築することで年序秩序に組み込まれていく。

異なるマケに所属していても、家格的には同じくらいの家が結びつく。

弟子と親方の関係は絶対服従的な関係。

「同世代」であってもそれぞれの「家」の家格によって役柄が定められている。

集落におけるさまざまな秩序を見ることができる。

◎三番叟の出役資格が限定されていたことの意味は小さくはない。

○長男のみ出役資格を持ち、21年間携わる

→三番叟が親沢集落の家の存続・継承に大きな役割を持っていた。

(かつての農村社会にとって基礎単位は「家」だったため「ムラ」にとって不可欠。)

「家」の後継者を村に居住させ続けるために作用していた。

例) 抜けると親方やおじっさに迷惑

おじっさにはなると年齢的に外に出ることが厳しい

↓

五穀豊穰の祈願という民俗的慣習の他に、「家」の後継者としての長男をムラに住み続けさせる機能も、意図せずして有していた。単なる民俗行事ではなかった

○林業主体の産業構造に変化

⇒役ごとにある家筋の系統について意味は弱くなる。

しかし。家筋に基づく役の系統は、依然として明確に意識されている。

例) 本来の役が回ってこない場合、

次に家から出役者が出る際本来の役よりも良いとされる役を回した。

○役者不足が進む

⇒長男のみという参加資格を緩め、長男以外が出役することも増えてきた。

例) 親沢出身で外へ出た人

親が親沢出身の人にも声を掛ける

↓

「親沢の人だけ」という解釈

⇒「親沢在住の者」から「親沢在住の者と親沢出身者及びその系譜にある者」へ拡大し認識された。系譜の者以外からも出役者を募った例もある。

d.親沢人形三番叟の厳しさ

7年ごとに後継者(「弟子」)を確保する必要あり

=「親方」になった時から「弟子」を探さなければならない。

これが年々難化傾向。

○「三番叟は厳しく大変」というイメージ

三番叟の関係は一生モノだと出役者・親沢の人から認識される。

同時に7年交代=親沢三番叟の“肝”との認識。

岡崎：集落という地域社会において、擬制的親子関係な構築は「家族」と見立てていくこととなり教育効果がある。親沢&川平地域において質問調査。若い年代→「若者に伝統や行事を残してほしい」と思わない傾向。

若者の意識が否定的でも、継承は途絶えない

⇒教育方法や教育効果の大きさによるものか

◎担い手不足の原因

⇒人口減少や産業構造変化ではない部分に潜在的に内在。(否定的な見解)

弟子と親方は絶対服従的なタテの厳格な関係としたら認識される。

例)「親にもしたことがないことを、三番叟の親方にはするし、…」

⇒家の後継者確保という意味を孕んだため

◎親沢において三番叟が持つ意味が変わったのはいつか

1917年 「三番叟御手本」以降

⇒御手本制定と同時に、村落内の各家筋に基づき役柄の系統も制定。

養子や新米者は「きたりっぽ」と呼ばれ出役(加入)認められず。

=三番叟が親沢集落にとって特別なもの

村落秩序の維持を図るための社会的な仕組みとして利用
出役が認められない背景
⇒出役を求められることに対する心理的な抵抗あり。
個人の意思に反して強いることも難しい。(現代的価値観)

現代における三番叟の出役者確保の困難性

四、継承することの意味の変化

もはや「親沢の者」のみならず、親沢以外の出席は必要不可欠。

◎三番叟をやめることは考えず、継承を続ける理由

- ①川平との対立関係の上成立しているため。
日程変更や臨時対応を一方で決定することはない。
議論の上了承し決定。
- ②「自分の代で途切れさせたくない」という意思
担う内に見えるものが増えてきた。仕組みの面白さに気づいた。
⇒自分が活きている間は三番叟が続いてほしい。弟子を見つけない。
ステージの変化に面白さを感じ、それを後の代にも体験してほしいと願うように
なっていく。+α 濃密な関係による「社会的居場所」を得る体験。
同じ代との「経験の共有」⇒横社会関係も獲得していく。

◎三番叟を継承させていくことの意味

- ①家の後継者の確保の手段
- ②親沢の者であるというアイデンティティの確認
親沢であるという証が失われてしまう。
⇒21年間続けなければという意識が存在。

◎「親沢の者」でない人の出役

強い意志がないと厳しい部分がある。
なぜそうした意識生み出される？
⇒単なる民族芸能の保存だけではなく「仲間集団」であること。
会員同士の親睦を深める飲み会重視
楽しく過ごすことを目的とする活動(旅行など)
それぞれの立場に応じた振る舞いと貢献を為す
⇒保存会の実質的なメンバーに認定される
仲間意識の基礎が、横のつながりをつくるうえで重要になってくる。

五、親沢人形三番叟の今後

人口減少・少子化の中出役者の資格を変更しながら継承。
次世代への継承の厳しさは年々厳しさが増す。
⇒一人当たりの地域社会での役割が大きくなるが、21年間のサイクルは崩れない。
21年に渡る継承システムの存在が親沢三番叟の肝であるため。ここを崩すと三番叟そのものの消滅の可能性あり。
しかし：出役してくれる人ならだれでもいいわけではない。
次世代の出役者の確保の困難性を生み出している

金子祥之著 第八章 祭礼を<縮小>させる地域社会

～千葉県印旛郡栄町酒直のオビシヤ～ (pp.283-317)

報告者：伊藤源大

一、祭礼をめぐる葛藤と合意(pp.283-288)

(1) 小さな祭礼の<衰退>

オビシヤとは

- ・弓行事 弓を射て1年の作物の作柄など神意を占う行事
- ・年頭の重要な集落行事であるが、地味
- ・集落内やクルワ内で執行 行われる場所の多くは個人宅(毎年順番制)

オビシヤが目立たない理由

→本来オビシヤは秘儀で担い手間だけの宣伝意識→外部への宣伝意識がない

以上のことから

オビシヤ＝「小さな祭礼」といえる

内田忠賢氏

- ① 村的・伝統的・宗教的・小規模・変化の少ない祭り

(ex.讃岐平野の地神祭、埼玉県内のオビシヤ)→消滅するであろう

- ② 都市的・新しい・非宗教的・大規模・変貌する祭り

日本各地の「小さな祭礼」は「行事の衰退」??

(2) 祭礼の変化へのまなざし

阿南 透氏

- ・<衰退論>への批判

→都市化が進む地域ではオビシヤの変容が明らか＝現代社会への積極的な対応では？

有賀 喜左衛門氏

- ・衰退論の問題点

→行事を担う人々の生活を軽視してしまうこと

- ・行事が変化することは地域社会の積極的な意味はないのか？

(3) 地域の合意を問う意味

祭礼の存続→資源の欠乏(量的問題)だけでなく価値や認識(質的問題)として捉えよ

大野 啓氏

昔 祭礼への関与＝「羨望の的」→現代 祭礼への関与＝「負担」

このような価値観の変化は日本の祭礼に広くみられるのでは？

祭礼の継続が困難になる要因

1. 担い手間での価値観の変化

2. 価値観の変化がもたらす価値的対立 「保存の倫理」VS「合理化の論理」

この対立の中で祭礼の今後を判断していく

→単なる外在的評価でなく祭礼の価値の変化・担い手間の合意形成の場面に注目しなければならない

Q,では祭礼をめぐる対立的な価値認識があるなか、どのような論理によって合意し祭礼を存続させてきたのか

二、酒直地区とオビシヤ(pp.288-296)

(1) 酒直地区の社会構造の変化

- ・千葉県栄町酒直地区

2018 年 4 月時点で世帯数 253、世帯人口 571 人と酒直のような平地農業地域の平均的な数値よりはるかに上回っている

→一見「恵まれた地域」に見えるがそんなことはない

「オビシヤは農家の行事である」という認識がある中、酒直地区の農家戸数は減少傾向(離農化傾向)にあり、「オビシヤ=重要な行事」という認識が揺らいでいる

(2) 紙を引き継ぐ行事としてのオビシヤ

酒直地区のオビシヤの要点→新たな祀り手へと神々を受け渡し引き継いでいくこと

- ・戦時と戦後のオビシヤの様子

①誰から誰への引継ぎなのかという組織構成

酒直の場合 地区内を二つのグループに分割

1 から 3 番組 亭方→オビシヤを執り行う

4 から 6 番組 客方→オビシヤに招かれる 翌年に役割交代

亭方の役割→大殿、小殿(一小殿頭)、総奉行、御座奉行、御座給仕人

②どのように引き継いでいくのかという行事構成

前日 守護人一同祭礼当日の段取り確認

当日 祭祀に必要な祭具の準備→客方の家を訪問→「新たな守護人の決定→御山式→宮渡式→終酒盛式→送り込み→新旧守護人らの儀式」

翌日 守護人を中心に残ったもので宴会&会計処理

特徴：神を預かる守護人が行事の中心

大殿 羨望の的である一方、大きな負担

後の時代 大殿が中心の組織構成と丁寧な振る舞いを繰り返す行事構成

三、祭礼規約からみる合意形成(pp.296-300)

(1) 祭礼規約とは何か

酒直地区では「酒直鎮守・素羽鷹神社・春季大祭申し合わせ書及び執行規約」に基づき行事執行

1967 年以降 7 つの規約が作成される。1980 年代以降 その頻度は高まっている

→オビシヤ継承を試みているから

(2) 祭礼規約のねじれ

平成一六年の規約 第一条

この条文には、「保存の倫理」と「合理化の倫理」が書き込まれており、「ねじれ」を抱えた表現である→オビシヤを継承していくうえでの葛藤の表れ

四、改革に揺れる昭和後期の村規約(pp.300-305)

(1) 改革の端緒となった昭和四二年規約

- ・昭和四二年規約が必要とされた理由

→行事が担い手によって「負担」であったから

- ・担い手が感じていた「負担」とは

→高度経済成長の影響により、オビシヤが華美な行事になりかけ、大殿に大きな負担がかかるようになったこと

- ・戦中と戦後のオビシヤと昭和四二年規約の内容の相違点

→①儀礼の場の公共化、②近代的時間が導入されたこと

この規約によって華美な行事になることを避け、守護人の負担を減らした

(2) 揺れ戻しとしての昭和五八年規約

・昭和五八年規約は祭祀組織、祭費負担、祭事いずれの項目にも規定数が増加

Q、なぜこの段階で行事内容を細かく記す必要があったのか

→昭和五八年の時期の新たな担い手は職住分離型の生活を営んでいるため、生活上の共同を通じ行事の知識を身に着けることは難しくなった

昭和四二年規約 「合理化の倫理」

昭和五二年規約 「保存の倫理」を軸にして作成される

しかし、昭和四二年規約 「儀礼の場の公共化」→再び「大殿の自宅へ参集」へ。昭和五二年規約、寄進の分担→大殿だけに村仕事が振り分けられるなど、直進的に進まなかった

五、新たな担いのしくみを模索する平成の村規約(pp.305-312)

(1) 激しい議論を交わした平成一六年規約

少子高齢化→守護人の固定化傾向

平成九年規約 御座給仕人「7歳の男子がいなければ7歳以上でも良い」

→行事を継承していくうえで、参加者などに対する配慮

ある大殿経験者：「祭日を一日にすべきでは？」←合理化の倫理

全体は一日開催案に多数賛成。一日開催を前提とした規約改正を委員会で協議「どこまで簡略化するの？」このような過程で新たな規約が全戸配布。

(2) 行事の二分化による饗応の簡略化

行事内容の変化→饗応の簡略化

・オビシヤの場合

神事と饗応は一体であり分割可能なものではない

近年、神事と饗応が区別され、饗応は自分たちが楽しむための宴席へ。饗応の場面が省略化+儀礼食も変化。儀礼食→オードブルや漬物など。これが守護人や親戚働き衆の負担軽減・行事全体に必要な時間の大幅圧縮。平成16年規約により日曜の一日開催に改定。神事も簡略化すれば？オビシヤは地区にとって必要な神事。ユサンコのようなものではない。

★合理化の倫理 vs 保存の倫理→行事を神事と饗応に分けることで意見がまとまる

(3) 負担の分配

改めて問われた問い→オビシヤは誰の行事なの？

今までの祭祀形態→地区内の一軒が主人となり、行事全体の行事を執行。大殿、相殿、小殿頭に行事に関する役割が集中。大殿以外の守護人の役割規定が増加→大殿の役割を小殿衆に分配

表 8-3 大殿以外の守護人の役割規定が増加：これらは、大殿が担ってきた役割を小殿衆に分配した結果。一方で、大殿の役割規定も増加

①昭和五二年規約→行事内容を事細かに記したこと

②平成十一年規約→オビシヤ以外の年間の奉仕を明文化したこと

つまり、実質的に負担は増加していない。

→儀礼の場の公共化や時間管理はどのように規定されたか

儀礼の場の公共化について。集会所完成とともに積極的な利用がみられた。

昭和四二年規約 神事は神社で行う→この時儀礼空間は大殿自宅と神社で分離

現在、大きな旗をたてるのみ。

儀礼の場の公共化は徹底化→神事は神社、饗応は集会所へ

時間に関してもより厳密に規定したが、会計や引き継ぎに関しては曖昧な時間を設定→これらは担い手の負担軽減を図ってやられているもの

このような改訂は、「大殿を務める家が全責任を負う家事としてのオビシヤ」→「大殿は代表であり、地域が協力して担う村事としてのオビシヤ」という方向転換の表れ

六、<縮小>するという知恵(pp.312-315)

本章の目的

→祭礼を継続してゆくために、人々はどのような論理を形成していったのか

・酒直地区の場合

オビシヤに関わる村規約を時代状況に踏まえて変化

しかし、この村規約の改訂にも二つの倫理の対立 「合理化の論理」VS「保存の倫理」

・対立する二つの倫理の落としどころ

① 行事を二分し、^{きょうおう}饗応のみの簡略化

→饗応の簡略化は酒直地区のオビシヤが神事中心に再構成され継承されていることを提示している

② 負担の分配戦略

→負担を守護人や地域へ振り分け、過去のしくみを参照しつつ儀礼の場の公共化、時間管理を推進

・本章の時に対しての答え

地域社会側

→行事の改変は生活戦略に基づくものである

<縮小>は厳しい状況を認識したうえで衰えることを受け入れながら継承していくこと

筆者 「保存」と「消滅」の両極端は× より多様な時代を生き抜く知恵が必要

危機に際して何を残さなくてはならないのかを問いただし、よりよい<縮小>を見出そうとしていくことが祭礼継承の一步である

第三部 2024 年ねぶた運行団体紹介

青森菱友会

～地域に密着した題材～

【2024 年の見どころ】

今年の大型ねぶたの題材は第七代ねぶた名人である竹浪比呂央氏の『新天地 海峡の先へ』である。舞台は青森県外ヶ浜町、この地に息づく義経伝説を通して、龍の如く天を飛翔し、馬の如く疾駆する麒麟や義経を導く老翁の姿や、義経が新天地へはばたく姿は、青森がさらなる高みへと向かうことを強く願うものである。本体に登場する人物は老翁となっており、源義経は送りに登場するので裏表でワンストーリーとなっているのが特徴だ。ぜひ観覧の際は送りまで注目してほしい。

【歴史】

青森菱友会は平成 2 年に初陣、以降毎年出陣している。平成 2 年からいずれも竹浪比呂央氏が制作を担当している。令和元年は出陣 30 回目の節目の年であった。令和 2 年度、3 年度は青森ねぶた祭がやむなく中止となってしまったため、今年はお出陣 33 回目となる。本団体は平成 30 年に『岩木川 龍王と武田定清』でねぶた大賞を受賞し“平成最後のねぶた大賞”を受賞した団体となった。また、平成 30 年に続き、令和元年にも『紀朝雄の一首 千方を誅す』でねぶた大賞を受賞し、「令和最初のねぶた大賞」を受賞した団体となった。その他、令和 5 年『牛頭天王』をはじめ過去 6 回ねぶた大賞を受賞している。

【運行団体】

青森菱友会ねぶたの今年のお出陣日は、2、3、5、6、7 日の 5 日間である。青森菱友会は地域とのつながりや青森県の文化風土を大切にしているので、ねぶたはあくまでも地域に密着した題材となっている。地域の歴史と文化を深く感じさせるとともに、祭りの伝統を未来へと引き継ぐ素晴らしいねぶたとなっている。運行は体系や隊列に力を入れており、国道沿いに並んでいるビルに菱友会のスポンサーが入っているのだからそこに見せるように運行している。青森菱友会囃子方は音響を使わない生のお囃子を聞くことができる特徴がある。また、跳人は 1 日に 200～300 人ほど参加しているのでねぶた本体・運行・囃子・跳人を通して非常に見応えのある団体となっている。現在四年連続ねぶた大賞を受賞しているので、5 連覇を目指し頑張っている。ぜひ、ねぶた祭りでこの勇姿とねぶたの迫力を体感してほしい。

【協賛・前ねぶた】

前ねぶたは、三菱マークをかたどったものとなっている。今年初登場するのは、青森県出身のアーティスト、GOMA 氏が制作する『天翔る龍馬』だ。ねぶた祭りにねぶた師ではないアーティストの人形ねぶたが出陣するのは史上初らしく、精密かつ大胆な画とねぶた技法のコラボレーションに是非注目したい。協賛は三菱グループ企業となっている。

文責：中野 ありす

青森市民ねぶた実行委員会

～母の愛、子供たちの平和な日常を願って～

【2024 年の見どころ】

制作者は、例年と同じく北村麻子氏であり、「女性らしいねぶた」にこだわっており華やかで色鮮やかなねぶたが印象的である。題材に関してあおもり市民ねぶた実行委員会からの指定は特になく、北村麻子氏が提案している。

今年の題材は「鬼子母神」である。鬼子母神は自分の子供を育てるために人間の子供をさらって食べようとしていた。このことを恐れ苦しんだ人間に相談されたお釈迦様は鬼子母神の最愛の子供を隠すことによって「命の大切さ」「子供を思う気持ちが人間も鬼神も変わらない」ことを説いたという物語である。北村麻子氏はこのねぶたに「子供たちが戦争という醜い争いから一日も早く解放され、安心して平和な日常を取り戻す」ことを願い、制作に取り組んでいる。送りには、美人な姿の「鬼子母神」や元気な子供たち、華やかな配色がなされた花が配置されている。ねぶたの見どころは、右側に配置されたお釈迦様から発せられる後光とその周りを囲む波の表現・色使いである。

【歴史について】

あおもり市民ねぶた実行委員会は企業団体ではなく、様々な仕事をしているねぶた好きな人が集まってできた市民団体である。2002 年からねぶたの運行を開始した。そのきっかけは地元の景気が低迷したことだという。それによりねぶたの台数が減り、運行を休止している団体もいくつかあったため、新たに団体を立ち上げてねぶたを出し、祭りを盛り上げていくことになった。

【運行団体の特徴】

出陣日は8月2、3、4、5、6、7日である。あおもり市民ねぶた実行委員会は今年で出陣21年目を迎える。ねぶた・運行・囃子の三位一体の運行に加え、スポンサーの方々が制作・運行に参加してもらえるように声掛けなどを行っている。「楽しもう」をモットーとして掲げ、賞は後からついてくるものだと考えている。囃子団体は「あおもり市民ねぶた囃子隊」である。囃子方の在籍数は170～180人であり、ねぶた好きが集まり結成された。祭り本番に使用する笛用の音響マイク前には演奏が上手い人以外の人も立たせ、全員が技術向上できるように努めている。大型ねぶたの曳き手は、バイトで雇われた市内の高校生を含む18人から20人で運行している。跳人に関しては花笠を被ることが推進されており、運行がきれいに見えるような工夫をしている。ねぶた台車の組み立てや台上げといったねぶたに関わる準備は市民ねぶたの会員を集い、行われている。今年、あおもり市民ねぶた実行委員会は惜しくも受賞を逃した場合解体せず、ねぶた本体を売却する予定である。例年では8月8日にねぶた小屋にてねぶたの解体作業が行われる。太鼓台車、ねぶた台車等は問屋町倉庫に保管されている。

【あおもり市民ねぶた実行委員会の協賛企業】

協賛による前ねぶたの出陣は、ダイードリンコ株式会社、株式会社ロッテ、クラブツーリズム株式会社、株式会社星野リゾート、麦焼酎いichこの五台である。また、「麦焼酎いichこ」は今年新たに出陣する前ねぶたである。協賛はダイードリンコ株式会社、クラブツーリズム株式会社、株式会社星野リゾート、株式会社ロッテ、オリックス株式会社、三和酒類株式会社、青い森信用金庫、野村證券株式会社、青森新都市病院、株式会社ヤマシ、

株式会社東洋社、株式会社たか久、ヤマダイ株式会社、ロイヤル化粧品株式会社、株式会社あおり北彩館、株式会社富士清ほりうちである。

文責：伊藤源大

日本通運ねぶた実行委員会

～最多連続出陣 運送で企業と地域を結ぶ夜桜～

【2024 年の見どころ】

制作者は、例年と同じく林広海氏である。題材に関して日本通運からの指定は特になく、林広海氏が決定している。今年の題材は「怪猫佐賀の夜桜」である。この題材は江戸時代の佐賀藩成立期に龍造寺家と鍋島家の間の御家騒動であり、龍造寺又七郎の母は飼っていた猫に息子の死の悲しみを語り自害してしまう。猫は母の死体から流れた血を飲み化け猫となり、鍋島光茂を殺そうとするが忠臣・小森半左衛門によって退治されてしまうという古典的な題材である。送りには、桜から関連して「花咲か爺さん」が配置されている。ねぶたの見どころは、今にも小森半左衛門に襲い掛かろうとする巨大な化け猫とその周りを舞う桜である。

【歴史について】

日本通運ねぶた実行委員会は、昭和 22 年から連続して祭りに出陣しており、2016 年には 70 周年を迎えた最も古い歴史を持つ団体の一つである。祭りに参加することとなったきっかけの一つに、祭りに参加したいという従業員の声があった。その始まりが現在まで脈々と続き、70 年以上の歴史を築き上げた。ねぶた祭を広告媒体と捉えるのではなく、地域貢献の一環としてこれまで参加している。

【運行団体の特徴】

出陣日は 8 月 3、4、5、6、7 日である。日本通運ねぶた実行委員会は最多連続出陣団体であり、今年で 76 年目を迎える。囃子団体は、「青森郷土芸能ねぶた囃子保存会」である。囃子方は総勢 40～50 人所属しており、日本通運社員も 3 名ほど所属している。鉦、太鼓、笛の 3 つができて一人前とされ、担当の楽器以外も演奏することが当たり前とされている。運行中は、昔ながらのファンも含め、見ている人がかっこいいと思えるように魅せる囃子を心がけている。大型ねぶたの曳き手は前方に社員、横には社員とアルバイトの半々。後ろにはアルバイトの方々が配置され、総勢約 30 人で運行している。

跳人が最も盛り上がる日は 8 月 3 日であり、メインスポンサーの 1 つである OLYMPUS の関係者が観覧や跳人として参加している。ねぶた台車の組み立てや台上げといったねぶたに関わる準備は、市内店所に在籍する社員を中心に呼びかけ行っており、日本通運社員一体となってねぶたを支えている。

日本通運ねぶた実行委員会は七日日の運行を終えた後、惜しくも受賞を逃した場合は途中まで受賞したねぶたの後ろについて運行し、NX 日本通運（株）青森中央物流事業所に向かう。中央物流事業所にある従業員駐車場では 8 月 8 日にねぶたの解体作業が行われている。太鼓台車、ねぶた台車共に冬季期間などは NX 日本通運（株）青森中央物流事業所に保管されている。

【日本通運ねぶた実行委員会の協賛企業】

協賛による前ねぶたの出陣は、BOAT RACE、Yoster、日本通運の三台である。また、「BOAT RACE」、「Yoster」の前ねぶたは林広海氏が制作する。協賛は損保ジャパン、OLYMPUS、BOAT RACE、朝日生命、青函フェリー株式会社、ENEOS グローブエナジー、紫波運輸である。

文責：伊藤源大

県庁ねぶた実行委員会

～事故なく安全な運行を目指して～

【2024 年の見どころ】

題材は『木鹿大王 妖術を使う』。制作者は大白我鴻氏である。この題材には「木鹿大王は八納洞を支配し、3 万の兵を従え、象に乗り妖術を使う。かつての敵である孟獲と結託し、蜀軍討伐に向かい、猛獣や毒蛇を操る南蛮軍に恐れをなした趙雲と魏延は陣を引いた。」という歴史がある。題材には昨年度の候補のひとつであったものが採用された。特徴は二体ものであることに加えて、象、鳥、虎、蛇といった動物が多く登場することである。送りには馬も登場する。ぜひこの数多く登場する動物に注目してほしい。

団体としての目標は事故なく安全第一で無事に祭りを終えること。夜の運行では ALSOC さんに警備をお願いしているほか、県庁職員も配置し、万全な警備体制をとる。熱中症対策として水分補給用のリヤカーも毎年出しており、安全第一の運行を心がけている。

【歴史】

青森ねぶたミュージアムによれば「県庁ねぶた実行委員会は今までに「県庁」「青森県庁」「青森県庁実行委員会」「青森県庁ねぶた実行委員会」という団体名でも出陣したことがある」という。初出陣は昭和 36 年であり、当時の制作者は 2 代名人である北川啓三氏だった。

昨年 2023 年に記念すべき 60 回目の出陣となり、今年 2024 年は 61 回目の出陣となる。

【運行について】

運行は、県庁職員と月駿会、アルバイトのスタッフが毎日 100 人程度で行う。今年は 2、3、5、6、7 日に運行予定である。曳き手は 24 人程度必要となるが、アルバイトのスタッフに加えて、県庁職員と月駿会の固定メンバーがそれぞれ 10 人程度ずつ協力して行う。月駿会は、県庁内の自発的な組織であり、扇子持ちを育てる団体である。技術の継承のために、過去にねぶたを担当していた職員、人事課で扇子持ちの経験がある職員が立ち上げた組織である。囃子は「県庁ねぶた実行委員会囃子方」が行っており、200 人ほどが所属している。祭当日は毎日 50 人程度が演奏している。跳人は職員の家族、およびその関係者が多く自由参加である。子供も参加しやすくなっているため、ぜひ多くの人に参加してほしい。

【協賛、前ねぶたについて】

協賛企業はない。県庁生協や後助会などからの分担金が主な収入源となっている。前ねぶたは、お米大使、航空機 5 台(ANA、JAL、FDA、EVA、KAL)、青い森鉄道の前ねぶたが出陣する。

文責：吉田翔太

東北電力ねぶた愛好会

～記念すべき 55 回目の出陣～

地域の皆さまへの感謝，東北の復興と発展に寄り添い続ける！

【2024 年の見どころ】

東北電力ねぶた愛好会では、その理念に基づき東北にまつわる題材を採用している。今年の題材は「浪漫海峡 義経飛龍」。制作者は立田龍宝氏。源義経は平安時代末期に兄の追撃を逃れて奥州平泉に落ちのび、最期を遂げたとされるが、一説には蝦夷を目指して逃げ延びたとも言われている。平泉から竜飛崎に至る途中、強風荒れ狂う海を渡れなかった義経は観世音菩薩の化身とされる白髪の翁に三頭の龍馬を授かり、海峡を渡ることができた。その後、蝦夷から大陸に渡り、成吉思汗となりモンゴル帝国を築いたとも伝えられている。外ヶ浜町三厩には龍馬山・義経寺があり、義経の海路伝説の浪漫が県内で数少ない神仏混交で今もなお多くの参拝者が訪れている。源義経のように力強く、これからも東北の復興と発展に寄り添い続けるという強い思いが込められている。

ねぶた本体の見どころとしては、白馬の勇ましい様子が挙げられるだろう。これまで立田龍宝氏の制作するねぶたにおいて、「馬」が描かれることは珍しく、今作では立田氏の馬に注目したいところだ。電力ねぶたは、今年は記念すべき出陣 55 回目という節目の年であり、例年にも増して気合が入っている。

【歴史】

東北電力ねぶた愛好会は昭和 23 年から運行を開始した。経営理念が「地域繁栄への奉仕」ということもあり、地域との共栄を目的に始めた。現在のコーポレートスローガンも「より、そう、ちから。」であり、地域に寄り添い、地域の伝統文化の継承と地域の盛り上げに貢献するため運行を続けている。東北電力ねぶたはオイルショックの影響を受け、昭和 48 年に出陣を休止した。しかし青森市内に在住するねぶたを愛する有志からの復活を望む声が多くあり、労働組合が中心となって東北電力ねぶた愛好会を立ち上げ、昭和 59 年に運行を再開した。運営資金は愛好会員からの会費を中心に、関連企業や取引先からの協賛金により賄っている。現在も労働組合と会社が協力してねぶた運行を行っている。

【運行団体の特徴】

今年も出陣日は 8 月 2、4、5、6、7 日。東北電力ねぶた愛好会として、会員の一体感を忘れずに運行に臨んでいる。青森ねぶたに参加することで地域に寄り添い、日々の感謝を伝えたいとも考えているという。その心意気は、跳人(はねと)参加者が全員「花笠」を着用している様子に見られるだろう。他団体では花笠の着用を条件としていないケースが多いが、同愛好会では跳人参加者に花笠の着用を義務付けている。このこだわりには地域へのリスペクトを感じると思う。理念を具現化する同愛好会の跳人集団は、古き良き青森ねぶたを感じられるとともに、地域へ寄りそう姿勢を見ることができることだろう。また、同社のねぶたを制作するねぶた師、立田龍宝氏との交流も行っており、講演会を開催するなどして愛好会全体の士気を高めて本祭に臨んでいるという。

【協賛】

基本は愛好会会員の会費。なお、関連企業や取引先からの協賛金による協力もいただいている。前ねぶたはかいじゅうステップの 1 台。

文責：内海空

ヤマト運輸ねぶた実行委員会

～「楽しさ」と、宅急便さながらの「安全」運行と！～

【2024 年の見どころ】

今年の題材は、「雪の吉野山 激闘」。制作者は北村隆氏。文治元年（1185 年）12 月、源義経が家来とともに吉野山に入るが、金峯山寺の僧兵が敵になり吉野水分神社まで逃げる。屈強な荒法師が迫り、佐藤忠信が義経の身代わりとなり戦い、覚範を打ち取り一行を救う。雪の吉野山での義経の家来 佐藤忠信と荒法師と呼ばれていた横川覚範の激闘を描いたものである。ねぶた本体については、白を基調とした雪の表現の散らばる表現と、松の木の細やかで繊細な表現に注目していただきたい。加えて、北村隆さん特有の繊細であり色鮮やかな着物の柄は今年も目が離せないところだ。

【歴史】

全国の運送会社の代表で組織している会合が偶然ねぶたの時期に青森で開催され、その時に日通のねぶたが参加していることにヤマト運輸関係者が刺激を受けた。特に宅急便の仕組みを作ったヤマト運輸 2 代目社長が、ねぶた祭りを気に入り当時の担当者が出陣に向けて準備することになった。出陣までに 2～3 年かかっており、観光ねぶたとして出陣していた「大和山（青森県教区連合会）」の枠が空いたところにヤマトが推薦されて運行することとなった。当時担当していた社員がねぶた師の穂元鴻生氏と顔見知りで、穂元氏がデビューするタイミングに依頼することができた。また、穂元氏の一番弟子である大白我鴻氏に意思を継いでいただき 3 年ほど依頼した。その後北村隆氏に依頼し現在に至る。毎年、青森の主管支店長が団体責任者、労働組合の青森の委員長が運行責任者として参加している。実行委員は青森市内の集配しているドライバーで、日中が忙しい。メンバーはヤマトの社員だけで構成しているため、仕事をしながら稼働の合間をみて会議を行っている。

【運行団体の特徴】

出陣日は 3, 4, 5, 6, 7 日。ヤマト運輸ねぶた実行委員会の特徴は何とんでも「安全」に配慮した運行だ。運送業で培ったその安全への高い意識は、ねぶた運行にも活かしているという。近年、温暖化の影響でねぶた開催時期も厳しい気候の中、今年の水車（給水を担う山車）が軽量化されるそうだ。重量による負担の軽減に加え、人員の削減も目指すとのことだ。加えて、ヤマト運輸ねぶた実行委員会では、今年度初めてねぶたに用いる発電機の燃料を「バイオ燃料」に代替する試みをする。ヤマト運輸全体として、持続可能な社会の実現に向けて「カーボンニュートラル配送」に注力しており、今年のねぶた祭においてもバイオ燃料を使用することで SDGs への貢献を図っている。

また、今年も 4 日の運行において「福祉ねぶた」が決定している。障がい者の方々と共にねぶた運行に参加するこの取り組みだが、20 年以上続いている、同実行委員会においてはもはや伝統的な取り組みである。障がい者の参加者は毎年ねぶた楽しんでいる様子であり、今や参加者は 300 名を超えるそうだ。ねぶた本体や運行はもちろん、社会問題に対し、たゆまず取り組み続けているヤマト運輸実行委員会に、今年もぜひ注目していただきたい。

【協賛】

協賛による前ねぶたの出陣はない。協賛は ELM、ファミリーマート、関係各社（トラック業者等）である。そのほか提灯協賛として個人や通常業務の顧客が入っている。

文責：内海 空

NTT グループねぶた

～通信も伝統も、つなぐ～

【2024 年の見どころ】

今年の題材は、「達谷窟伝説」。制作者は北村春一氏。坂上田村麻呂が鬼を退治する数ある伝承の中のひとつ。奥州達谷窟には、悪路王という鬼が住んでおり、坂上田村麻呂によって討伐された。田村麻呂は毘沙門天を祀り、達谷窟毘沙門堂を建立した。ねぶたは達谷窟伝説に由来する姫待の滝で田村麻呂と悪路王が対峙する場面である。過去6年間に渡り、NTT ねぶたグループにて美しい女ねぶたを制作してきた北村春一氏であるが、今年は勇ましい男ねぶたを創り上げる。流れ落ちる滝の躍動感や水しぶきの流動感と、鬼と坂上田村麻呂のシンプルな構図の織りなす迫力は注目すべきポイントである。鬼の赤と、滝の青が対を為す色彩の美しさにも目が離せない。

【歴史】

NTT グループねぶたは通算して 64 回目の参加となる団体である。発足当初は「NTT グループねぶた」ではなく、「電気通信省」や「電気共済会」という名称だった。名称が電気通信省だったとき、部長から「職員と一緒に何か楽しくやれるものはないか」という話があり、職員の士気高揚と、青森市の祭りに貢献するためにねぶたを出陣したのが始まりだ。グループ関連会社である NTT ドコモ、NTT ファシリティーズ、NTT データスマートソーシングなどが協力してねぶたを出している。

【運行団体の特徴】

出陣日は、2、4、5、6、7 日。NTT グループねぶたは、『ねぶたの伝統を未来へつなぐ』をコンセプトに、全社でねぶた祭に臨んでいる。青森市内においても、地域ねぶたが中止になるなど、地方の伝統的な祭が消えゆく中、次の世代へ確実に伝統を繋ぎ、伝えることを目指している。子どもがねぶたへ参加する機会を創出することを目的に、青森市立北中学校の生徒とコラボし、囃子方として 5 日の運行に臨む。約 60 名の北中学校の生徒と共に響かせるお囃子は、次世代へねぶたが紡がれていく様子がうかがえることだろう。また、従来のねぶた祭参加者の高齢化や参加者減少を受け、NTT では他県の社員に対しねぶた祭参加者を募集しているようだ。他県社員からの人気は高く、今年は 1 日あたり 20 名ほどの参加者を予定しているとのことだ。担い手の創出や関係人口の増加に貢献しており、サステイナブルな運営を目指している。さらに、取り組みの一環としてねぶた本体の 3D アーカイブ事業も行っている。NTT グループが蓄積したノウハウを生かし、ねぶたをデータ上でいつでも見られるようデジタルアーカイブしたものだ。毎年、ねぶたがどのようなものか思い出せる革新的な取り組みである。運行中は、跳人を率いる「掛け声台車」の盛り上がっている様子にぜひ注目していただきたい。

【協賛】

NTT 東日本やデータスマートソーシング等、グループ会社が主に協賛している。前ねぶたは、NTT（ダイナミックグループ）マークと、docomo ポインコの 2 台。

文責：内海空

JR ねぶた実行プロジェクト

～新たな出会いの灯～

【2024 年の見どころ】

今年の大型ねぶたの題材は竹浪比呂央氏の『足柄の公時頼光に随う』である。頼光四天王の一人、18 歳頃の坂田公時を題材にした力強いねぶたが登場する。幼い頃から頼まれなる力と勇気を持つ公時が、頼光に見出され家臣として随う様子が表現されている。本体には金時の父である赤竜が登場し、送りには母である山姥が登場している。また、送りには小田原市の足柄山から見える富士山と日本画から 3D 化されたような松が施されている。赤色の雲が見えるところは縁起が良いとされているので、送りに注目すると運気が上がるかもしれない。今年のねぶたは、感染症による困難を乗り越え、活気に満ちた世の中となるよう希望が込められています。公時の力強さは、困難に立ち向かう人々へのエールとなるでしょう。

【歴史】

昭和 39 年に「国鉄」として初陣、平成元年からは「JR ねぶた実行委員会」に名称を変更し平成 21 年から現在の「JR ねぶた実行プロジェクト」に名称が変更された。平成 16 年以降の制作は竹浪比呂央氏が担当している。以降は新青森駅開業や北海道新幹線開業など新幹線の推移や“安全”・“速さ”にちなんだ題材が特徴だ。平成 28 年には、「蝦夷ヶ島と九郎義経」がねぶた大賞に輝いた。

【運行団体】

JR ねぶた実行プロジェクトの今年の出陣日は、3、4、5、6、7 日の 5 日間である。囃子は「JR ねぶた囃子会」が行う。正調囃子で進行ところばしに特徴がある。メンバーは社員と一般の方で、会員数は 170 人ほどで構成されている。練習場所は、昔の第三岸(八甲田丸の海手側)となっており、7 月に入ると日曜日以外の週 6 で練習している。跳人については、グループ会社での募集が各日 120 名、一般の跳人を合わせると 1 日で約 300 名が参加している。蒸気機関車の動輪をイメージしたデザインの跳人衣装が特徴である。また、JR ねぶた実行プロジェクトは SDGs にも取り組んでおり、七夕シーズンになると青森駅構内に笹を用意し、ねぶたの和紙を再利用した短冊を設置している。駅を利用した際には、旅とねぶたに対する強い想いを綴ってみてはいかがだろうか。

【協賛・前ねぶた】

協賛は JR グループ会社、伊藤園。前ねぶたは、JR ロゴ台車と、伊藤園の「お〜いお茶」、「ハイキュー」(バレーボール漫画・アニメ)の合計 3 つとなっている。

文責：中野ありす

青森市役所ねぶた実行委員会

～世代を超えた絆の輝き～

【2024 年の見どころ】

制作者は、昨年と同様、福士裕朗氏である。今回のねぶたの題名は、『十和田湖伝説・八之太郎と南祖坊』だ。十和田湖を住家としようとする南祖坊と、すでに住み着いていた八之

太郎との戦いの場面を描いたねぶたである。八之太郎が戦いで化身した大蛇や、南祖坊が投げつけた法華經の經文が鋭い剣となり八之太郎に突き刺さる様子などを表現している。

また、昨年に引き続き、今年も青森市役所ねぶた実行委員会の前ねぶたとして、公立大学で制作した前ねぶたが出陣する。前ねぶたの題名は『鬼門大金神』であり、困難な問題にぶつかったとしても真摯に向き合い、立ち向かおうとする学生の姿を「大金神」の「鬼門」を破らんとする力強い姿で表現している。学生達で協力して制作したねぶたなので、ぜひ注目してほしい。

【運行団体の歴史】

青森市役所ねぶた実行委員会は 1958 年（昭和 33 年）の運行開始以来、今年で 64 回目の出陣となる。職員の福利厚生の一環としてだけでなく、地域のお祭りへの参加を通じて、ねぶたの伝統文化保存への寄与ということを目的としている。市役所職員は公務としてではなく、任意団体である市役所職員の互助会の事業に参加という形でねぶた祭りに参加している。

【運行団体の特徴】

今年の出陣日は 8 月 2、4、5、6、7 日である。「誰でも自由に楽しく」をテーマとして運行しており、小さなお子様連れの方でも安全に跳ねることができる「子どもハネトスペース」を設けるなど、年齢に関係なく誰でも跳人として参加しやすくなるような工夫をしている。昨年は、跳人全体で 5 日間合計約 1,300 人が参加しており、特に中日（8/4～8/6）は 1 日あたり 300～400 人が参加した。

囃子は、「みんなが楽しく演奏している」ことが特徴で、地域交流の場にもなっている。沿道のお客様にも楽しんでもらえるよう、国道に出たときでも太鼓の台車から離れて観客席の方に出向いて笛と手振り鉦を演奏するという工夫をしている。囃子方は現在 100 人くらいが登録しており、そのうち約 50 人の方が参加している。なお、昨年から青森公立大学の囃子サークルも市役所ねぶたに参加しており、今年は市役所の半纏を着て参加する。若い力が加わった演奏に注目してほしい。曳き手は、経験豊富なベテラン職員の方を中心に、アルバイトも合わせ、約 20 人で行っている。

文責：阿部仁菜

青森市 PTA 連合会

～海上運行をめざしていざ出陣！～

【2024 年の見どころ】

市 P 連の今年の題材は、「龍神と大鯰」である。制作者は内山龍星氏である。題材は市内の小中学生から募集し、25 通ほどの応募があった。その中から中学生の案が採用され、その中学生が描いた通りに内山氏が下絵を作成した。今年の題材には、2024 年 1 月に起こった能登半島地震への復興の願いやエールの意味が込められている。大鯰は地下に棲み、体を揺さぶることで地震を起こすといわれていた日本古来の伝説的な生き物である。そして龍神は天と地を自由に行き来し、気象や海流などをつかさどる神様という言い伝えがあり、龍神が大鯰を果敢に退治する様子が描かれている。一刻も早い能登地域の復興を祈願し、能登の方々がねぶた祭に参加してくれる日を待ちのぞむ。また、特に子どもたちが多い団体であるため、安全な運行でけがをしないことと、賞をとり海上運行をすることを目標としている。

【団体の歴史】

市P連は今年で出陣41回目となる。これまで「中学生ねぶた」、「親子ねぶた」と2度名称を変更し、平成16年に現在の名称に変更して現在まで続いている。しかし、少子化によるスタッフや子どもたちの参加数の減少などの原因によって、存続の危機にさらされていた。そこで昨年はのべ500名の児童生徒（跳人および囃子）が集まらなければ市P連大型ねぶた事業を廃止することにした。しかし、500人の参加を達成したうえに最終的な参加者は1200人を超え、目標の2倍となった。そして昨年は、青森県出身のヒップホップアーティストで、青森ねぶた祭を題材とした楽曲「ラッセーラ」を制作したKREVAさんの応援もあり、大きな盛り上がりを見せた。これからも市P連の歴史は長く続いていくだろう。

【団体の特徴】

青森市PTA連合会の今年の出陣日は、8月2、3、5、6日の4日間である。囃子は、青森市PTA連合会囃子方改め、今年から「市P連ねぶた囃子会」と名称を改め活動を行っている。練習には200人ほど参加し、祭当日では100人ほど参加する。親子での参加も非常に多い。跳人に関して、昨年は500人の参加者が集まったため、今年も500人以上の参加者を期待している。子供たちの参加者については、青森観光コンベンション協会から許可をもらい、学校のジャージにたすきという格好での参加も可能である。曳き手は、龍曳会や高校生のアルバイトをお願いをしている。青森市PTA連合会はほかの団体と比べ、子どもたちの人数が多いという点が最も大きな特徴である。

【協賛、前ねぶた】

メインスポンサーはハッピードラッグ（株式会社丸大サクラ中薬局）である。今年は、マスコットキャラクターであるハピマルをモチーフとした前ねぶたとShop Japan（アクティブスレンダー）の前ねぶたの2台が出陣予定だ。その他では、提灯で協賛を得ている。

文責：松田優唯

青森自衛隊ねぶた協賛会

～龍の文字を心に刻み いざ初陣へ！～

【2024年のみどころ】

昨年までの制作者、有賀義弘氏が引退し、今年から小財龍玄さんが担当する。ねぶた師、内山龍星氏に従事していたため「龍」の字をもらい、北（東北）の守護神として「玄武」から「玄」の文字をとり、雅号を「龍玄」としている。初陣となる今年の大形ねぶたのテーマは『北方守護玄天上帝』である。このねぶたは、世界各国で起きている戦争や紛争、毎年のように起きる大規模な地震や自然災害、そしてそれらに備えあらゆる事態に即応しその存在感を示さんと奮闘する第9師団の姿と、今まさにあらゆる厄災を抑え込み北東北を守護せんと身構える玄天上帝の姿を重ね合わせ、後世に残さなければならないこの国の平和と文化繁栄、そして世界平和への切なる願いを込めたものである。今年の、自衛隊の全体の目標は「制作を間に合わせ、運行を成功させること」である。新人ねぶた師、小財龍玄さんが手がける、インパクト・存在感のある“玄武”に注目である。

【歴史】

青森自衛隊ねぶた協賛会は、陸上自衛隊青森駐屯地に所在する部隊を基幹として、昭和 35 年から青森ねぶた祭に参加し、平成 29 年度の出陣で 55 回目の参加を迎えた。青森陸上自衛隊の正しい姿を地域の方に理解してもらうため、「地域の皆様との親近感の醸成と、郷土と共にある自衛隊の確立を目指すこと」を目的に出陣をした。自衛隊として青森駐屯地からねぶたを出陣した当初は、ねぶた師の佐藤伝蔵氏、千葉作龍氏、鹿内一生氏等に制作を依頼していたが、ねぶた祭りへ継続的に参加するには毎年高額な経費がかかるため、昭和 43 年頃から自衛官中心でねぶたを制作することとした。当初は、ねぶた師の佐藤伝蔵氏に師事をしていただき 3 名が見習いとして参加し、昭和 52 年から師事を受けた 3 名の自衛官が中心となってねぶたを制作してきた。その後、中心となって 20 年近く制作を続けていた有賀氏は令和 5 年に引退した。歴史的に自衛隊の出陣は地元意識に根付いたものである。青森駐屯地の隊員は地元出身者が多く、自分たちの力で地元を守るという意識が非常に強い。自衛官として、また、青森市民として活動し地元を守っているのである。

【運行】

跳人は自衛隊独自の統制踊りを行っており、整った、まとまりのあるという特徴がある。囃子は、50～60 人ほどで、年間を通じて練習を行っている。本格的には 6 月から始まり、祭り当日まで磨きをかける。また新人も多く、若手の育成も行われている。曳き手は自衛隊のみで構成されている。出陣日は 2、3、4、5、6 日となっている。

【協賛】

協賛は津軽海峡フェリー、岡村食品、コカ・コーラ、みずほ銀行である。前ねぶたはコカ・コーラと今年からみずほ銀行が新たに出陣する。

文責：鳥山凌空

マルハニチロ倭武多会

～歴史と伝統を受け継ぎ、上位入賞を目指す！～

【2024 年の見どころ】

2024 年のマルハニチロ倭武多会は、例年に引き続き手塚茂樹氏が制作を担当しており、今年の大形ねぶたの題材は『鶴退治』である。得体のしれない怪物に勇猛果敢に立ち向かい退治した猪早太と源頼政の姿に疫病や戦争、地震などの自然災害などが消滅し、平和な世の中になることを願うものである。特徴は頭が猿、胴が狸、尾は蛇、手足が虎の姿をした鶴であり、本体は猪早太が短刀で鶴の息の根を止める場面が表現されている。また送りは猪早太と共に鶴退治をした源頼政である。特に大きな鶴の面が大迫力であり、そこに注目してほしい。

【歴史】

マルハニチロ倭武多会の歴史は古く、2016 年に 50 回目の出陣となった。これは戦後の昭和 28 年を第 1 回として数えている。当初は昭和 28 年「大洋漁業ねぶた会」、昭和 45 年「青森マルハねぶた会」、昭和 55 年「青森マルハ倭武多会」、平成 20 年にマルハとニチロの 2 社が統合された経緯から「マルハニチロ倭武多会」に名称が変更され現在の形になった。このような歴史を持つマルハニチロ倭武多会であるが、今年 2024 年で 56 回目の出陣となる。

【運行について】

上位入賞を目指すマルハニチロ倭武多会であるが、跳人は1番多い日で120～130人と少ないのでもっと規模を拡大していきたい。跳人は長くマルハニチロ倭武多会に参加して頂いている方もいるが、得意先の方やその家族等、関係者の方々が中心となっており、一般の参加者も増やしていきたい。マルハニチロ社員の方々は、ロープ持ちなどの運行、運営がメインの業務を中心に行なっている。曳き手は高校生のアルバイトが中心で、四隅に大人を配置している。扇子持ちは青森魚類の方々を中心に、関係先の方等5人ほどで行っている。

囃子は囃子方海鳴が担い、本番は100人ほどが参加している。囃子方海鳴は、進行の際「二丁ばち」、「二度ばち」、「流す」という3種類の太鼓の技とそれぞれの楽器の拘りを持って、ねぶた本体や跳人の方々の魅力をより一層際立たせる団体だ。団体として工夫しようと思うところは今まで記録に残していなかったことから、写真や画像として記録を残していくことである。安全面では去年の運行の際、ねぶたをぶつけてしまったので今年はねぶた本体の後ろに人員を配置して、安全第一で運行していきたい。出陣日は8月2、3、5、6、7日となっている。

【協賛、前ねぶたについて】

ねぶた運行に際しては協賛を頂いているが、前ねぶたについては、協賛やスポンサーはない。前ねぶたはマルハニチロの前ねぶた1台が出陣予定である。

文責：吉田翔太

サンロード青森

～海神の導きと未来への航路 海の回復を願って～

【2024年の見どころ】

制作者は、例年と同じく吉町勇樹氏である。題材は、経済情勢や災害を克服し平和を願う思いが含まれていることが多く、世の中の情勢を汲み取った上で吉町氏とサンロードの代表者である櫛引氏の話し合いで決定される。

今年の題材は、『海の神霊「安曇磯良」』である。本題材は神功皇后が三韓征伐に際し、天神地祇を常陸の鹿島に招き軍評定を行おうとしたが、磯良は自分の姿が醜いことを恥じらい現れなかった。そこで住吉の神らが海中に舞台を構え、磯良の好む舞を奏し誘い出すと、龍神に乗り磯良が現れたという伝説が元になっている。吉町勇樹氏は、このねぶたに「海の回復と漁業繁栄・航海安全」を願い、制作に取り組んでいる。送りには「竜宮城」が配置され、その周りに亀や魚が泳いでいる。ねぶたの見どころは辰年にちなみ配置された龍と右側・中央・左側にバランス良く配置された磯良と二体の神々である。

【歴史について】

サンロード青森は、地元の人々に開業を知ってもらおうという目的で出陣することを決めた団体である。開業準備に迫られるなか、ショッピングセンターの呼称の周知も兼ね、ねぶた祭りに参加することが良いのではと地元の出店者からの話もあり、制作が進められた。コロナ禍を除き、今年で44回目の出陣となる。

【運行団体の特徴】

出陣日は、8月3、4、5、6、7日である。サンロード青森は今年で45周年を迎える。囃子団体は、「サンロード青森ねぶた囃子会」である。囃子方は約110人所属しており、全体練習は荒川小学校の体育館やワラッセを借りて、パート毎の練習はサンロードの会議室で行っている。また、入会したものはみんな笛から指導し、メロディーを覚えた人から希望の楽器へ移行するため、全員が笛を吹くことができるのが特徴である。また、サンロードといえば出発前の「出陣太鼓」や「七日囃子」がある。これらはサンロード青森囃子会のオリジナルである。サンロード青森は、プロの演奏家である鳴海昭仁氏が指導者として携わっており、サンロード青森のねぶた囃子を盛り上げている。サンロード青森の運行は、出店者の店長からなる店長会を中心にテナント及び主協賛先の方々に参加してもらうなどして人数を調節している。曳き手は総勢16名おり、すべてアルバイトを募集して集まった高校生らで構成されている。また、協賛関係者の跳人に対してのみ花笠の着用を呼び掛けている。サンロード青森は、惜しくも受賞を逃してしまった場合、8月8、9日にねぶた小屋にて解体が行われている。受賞した場合は年間ワ・ラッセに保管された後、面を取り外しサンロード館内に保管している。ねぶた台車や太鼓台車等は、サンロード青森の立体駐車場1階に保管されている。

【サンロード青森の協賛企業】

協賛による前ねぶたの出陣は、富士通 Japan (株)、Wolt の二台が出陣予定である。協賛は、日本郵政グループ、富士通 Japan (株)、日専連、イオン青森店 等である。

文責：伊藤源大

パナソニックねぶた会

～オールLEDできらめく運行を！～

【2024年の見どころ】

パナソニックねぶた会の今年の題材は、「奥州覇王 独眼竜 伊達政宗」である。ひとりねぶたであり、その迫力に注目してもらいたい。左右に描かれている龍と馬の色彩の鮮やかさと、繊細さにも注目してもらいたい。そして、「独眼竜政宗」がパナソニックねぶた会の題材となったのは今年で2回目だ。伊達政宗は18歳で家督を相続し、19歳になる頃には南奥州を制覇したといわれており、東北人には馴染み深い偉大な歴史的人物である。原画は2月の初旬にお披露目されたそうで、基本的に先生に対して題材の要望はせず、先生が作りたいたものを作ってもらおうというスタイルだ。そして灯りは100%LED電球となっており、1,400個ほど使用されている。SDGsを背景に、省エネにも取り組んでいるという。パナソニックならではのこだわりにもぜひ注目していただきたい。

【団体の歴史】

パナソニックねぶた会は、1961(昭和36)年から運行を開始した。今年で出陣48回目となる。制作者は、北村蓮明氏である。ねぶた会の運営は、パナソニックのご販売店さんが中心となり運営、北東北地区のパナソニックグループ各社が事務局としてサポートしている。運行費用については、パナソニックが出資し運行している。

【団体の特徴】

パナソニックねぶたの今年の出陣日は、2、4、5、6、7日(※7日は総合賞受賞時に出陣)である。囃子方は、「青森わの會」の協力を得て運行。例年1日70～80人ほど、祭期間中延べ150～160人ほどが参加している。子どもは勿論、ベビーカーでの参加もいる囃子会だ。ねぶたを伝承するために、子どもたちもねぶた運行に参加させている。跳人は50～60人ほどで、初日に200人ほどになることもある。曳き手方は、消防第三分団第三班に協力を頂いている。また、昨年より龍曳會の方々も新たに参画頂いて運行している。そして、一斉スタート、一斉解散方式から吹き流し方式になったことで、運行の変化にどう対応するかが課題。台車も曳く際にバランスを取るのが難しくなったため、台座を改造して動きを良くするという工夫を行なったそうだ。

【協賛、前ねぶた】

パナソニックが単独スポンサーの為、前ねぶたは同企業のもの一台のみで運行している。他には、個人(企業)から祭提灯を掲げることで協賛を得ている。

文責：松田優唯

私たちのねぶた自主製作実行委員会 ～みんなで作り上げた大迫力の一人ねぶたに注目！～

【2024年の見どころ】

団体としての特徴は制作から運行、解体まですべてを自分たちで行うことである。小さな子供から大人まで「みんなで楽しく」をモットーに取り組んでいる。実際、小屋では子供たちが出入りしており、「みんなで作り上げている」ということを肌で感じることができる。2024年の私たちのねぶた自主製作実行委員会の大型ねぶたの題材は『独眼竜 政宗』であり、今年の前画(下絵)は我生会の相馬寿朗さんが担当している。特徴は「面」であり、我生会ならではの鼻の作りである。また一人ねぶたであることから迫力のあるねぶたとなっている。送りは宮城県仙台市の礎を築いた伊達政宗にちなんだもので「伊達政宗公騎馬像」や「青いだるま」、「瑞巖寺」、「七夕まつり」の絵などが描かれた美しい送り絵となっている。また、送りには例年通り、カンパし協力してくださった皆様の名前が書かれている。

【歴史】

私たちのねぶた自主製作実行委員会によると、その歴史は「昭和49年7月数人の若者が集い、今のねぶたは費用が大きくなりすぎて、市民から離れつつある。そこで昔の町内ねぶたのような、素朴で皆が気軽に参加できるねぶたを運行しようと、有志が1ヵ月で制作運行したのが始まりである」とのことである。

【運行について】

私たちのねぶた自主製作実行委員会は2～7日すべての日程で運行している団体で、スタッフ全員で協力して運行している。団体としての目標はとにかく運行を成功させることである。その中でも声がけや笑顔を絶やさない事を大切にしている。囃子方は私たちのねぶたのメンバーを中心に関東の囃子会など一緒に出ることもある。人数は50人ほどである。練習は月に1～2回、ワ・ラッセで行っている。跳人は親子連れの方々が多く、毎年200～300人が参加する。なお、昨年の七日日の運行では、女性が扇子もちや曳き手を行い、表を飾った。今年もぜひ注目してほしい。

【協賛・前ねぶたについて】

主だったスポンサーはいない。その代わり、協賛やカンパによって資金を得ている。毎年約 300 もの企業や個人商店、個人の方々から協力を得ており、ねぶた本体周囲に名入り提灯をかけ、送りに名前を書いている。提灯をかけ本体に前ねぶたは計 3 台予定。「私たちのねぶた自主製作実行委員会」の文字が入った扇形の前ねぶた、ENEOS グローブエナジーの前ねぶたなどが出る。

文責：吉田翔太

に組・日本風力開発グループ

～ねぶたを次世代へ！若者に人気の運行にも注目～

【2024 年の見どころ】

制作者は例年通り第六代ねぶた名人位北村隆氏である。今回のねぶたの題名は「朝比奈三郎 鰐鯨を生け捕る」だ。源頼家が水練の技の披露を命じ、朝比奈義秀が三匹の鰐鯨と格闘している場面を描いたねぶたである。北村氏にとっては珍しい一人ねぶたと鰐鯨である。送りは閻魔大王と朝比奈三郎が戦っている場面である。北村氏の作るねぶたの迫力を見て欲しい。

【団体の歴史】

戦後から出陣し 2024 年で 76 回目の出陣になる。消防団の中の一つの班で「に組」としてねぶたに参加している。当初は本町の地域ねぶた「消防第三分団に組」として出陣しており、ねぶた師である北川啓三に制作を依頼していた。に組若者中心で活動しており、東芝が 40 年以上メインスポンサーについていた。運営の中心である「に組本隊」は「に組」組頭を筆頭に約 10 名で構成されており、ねぶた運行全体を仕切る役割担っている。他に 20 年以上の歴史を持つ「に組般若会（はんにゃかい）」と「に組に援会（にえんかい）」があり「に組」の協力会としてねぶた祭本番の際、運行統制を行っている。北村隆氏に依頼してから 2024 年で 16 年目。毎年テーマ設定はしないが、2016 年は 70 周年の記念として消防団の纏（まとい）を取り入れてもらった。2022 年からメインスポンサーが東芝から、日本風力開発(株)にかわり団体名称も変更している。

【運行団体の特徴】

今年の出陣日は 8 月 3～7 日である。毎年「青森市民の皆さん、特に子供たちに喜んでもらえるような粋な運行を心がける」をテーマとして運行している。7 日は全て子供たちがいる場所にねぶたを向ける。また、台上げが終わった後からはどんどん子供たちをねぶた小屋に入れてあげたり、制作者がいた場合は子供たちが知りたいことを質問できるようにしたりしている。囃子は 100 人前後が参加。「青森ねぶた囃子保存会 に組(に組はやし方)」は約 400 名所属しており、一年を通して囃子練習をしている。「に組はやし方」は白半纏が特徴的であり、それに憧れる人も多い。白半纏を着るためには、練習にきちんと参加しているかが重要で、1 年間練習をしっかりとやっているのが認められれば 2 年目の本番で白半纏を着ることができる。本番は道路によって笛や手振り鉦の人は観客の近くに行き自由に楽しませている。観客が楽しむのを見て自分たちも楽しくなるそうだ。昔からのしきたりを尊重し、マイクやスピーカーなどの音響は一切使用しない。

跳人は毎年多くの人に参加しており、2000 人程が参加。運行体系距離の 110m の規定がな

かった時は 300m くらいが跳人で埋め尽くされていた。カラス跳人の全盛期には必ず「に組」のねぶたが最後尾で、カラス跳人を制圧するなど昔からカラス跳人を怠りなく排除してきたことにより青森市民からは安全に跳ねられる場所として根付いているからである。毎年参加数が多いため、子供がいる人は一番前、ベビーカーを押しながら参加する人は一番後ろとエリアごとに分けて安全面を確保している。跳人を守るという点で、この説明を必ず行うことに毎年力を入れている。跳人の衣装や浴衣の貸し出し・レンタルはしていない。花笠だけは貸し出しをしていて、100 個位を用意している。

ねぶた本体の曳き手は前に 10 人後ろに 10 人の 20 人だ。前の曳き手はボランティアで後ろの曳き手はアルバイトである。に組の曳き手をやりたいボランティアの方が多いため、希望人数が前の 10 人を超えたら後ろに入れアルバイト人数を減らすそうだ。

【協賛・前ねぶた】

協賛は日本風力開発とサッポロビール、NEXCO 東日本、町内からの協賛金、県内外の企業である。2024 年度の前ねぶたは日本風力開発とサッポロビール、ポッカサッポロ、NEXCO 東日本、THE ALFEE50 周年記念前ねぶたの 5 つが登場する。

文責：阿部仁菜

青森山田学園ねぶた実行委員会

～大迫力の巨鯨に注目！オーシャンブルーの美しいねぶた～

【2024 年の見どころ】

青森山田学園の大型ねぶたは、昨年デビューした 2 年目の塚本利佳さんが担当する。今年、のねぶたの題材は『宮本武蔵と巨鯨』。これまでねぶたの歴史の中でも、これほど大きな鯨が登場したことはない。正面から見える鯨は腹を上にして、生き生きと表現されている。送りには人魚、タツノオトシゴ、そして二頭目の鯨がいる。全体的としてオーシャンブルーを基調とした青いねぶたである。そのほか正面にはウミガメやエイなど、海の生物が登場する。まさしく近年の異常気象や環境汚染に対し、警鐘を鳴らすとともに、海の美しさを表現した作品となっている。ちなみに送りにはひそかに「チンアナゴ」が紛れており、ぜひ見つけ出してほしい。青森山田学園の魅力は何と言っても若さゆえの熱気だろう。教育機関からの参加ということもあり、若さはもちろんのこと、自由と規律が共存した、統率の取れた、まさに「学生らしい」運行に注目である。

【運行団体について】

1971 年、青森大学開学 3 年目に初の出陣を飾る。当時最大の後援者であった青森県信用組合が、理事長・木村正枝氏に働きかけたのがきっかけである。まだ経営学部のみで、学生数も 120～130 人。ねぶた責任者であった斎藤守太教授を先頭に、大学全体で参加した。当時は、現在のように青森山田学園ではなく青森大学として運行。また、先頭の役員団の前に青森山田高校のブラスバンドが演奏しており、「学生らしいねぶた運行」が行われていた。その後 1989 年（平成元年）より毎年出陣しており、最初に賞（田村磨賞）をとったのが 1994 年の『宇治川の先陣争い』。当時の制作者は、現在の第 6 代ねぶた名人の北村隆氏であった。この年は跳人賞も獲得しダブル受賞であった。北村隆氏は平成 2 年から令和 4 年にまで青森山田学園のねぶた制作を受け持っていた。その間、田村磨賞、ねぶた大賞受賞歴は 6 回。特に平成 18、19、20 年と 3 年連続でねぶた大賞を受賞し、青森山田学園のねぶたの全盛期

を作った。

青森山田学園として出陣するようになったのは2003年（平成15年）から。そこから「学園ねぶた」の愛称で出陣し続けている。OB、そして学園関係者の力が、「学園ねぶた」の源だ。

【運行について】

なんといっても学生生徒中心の元気ある跳人が魅力。曳き手は部活の学生が中心である。そこに教職員・OBが加わって運行される。囃子はOB中心の「隆櫻會」。會の名称は、受賞全盛期に理事長であった故「木村隆文」氏の「隆」、学園のトレードマークの「桜」からとっている。青森市の教育機関としては唯一単独で大型ねぶたを運行しており、青森山田学園から輩出される全国的にも有名なスポーツ選手の活躍が、毎年運行に花をそえている。

文責：佐々木てる

青森県板金工業組合

～今年は美人ねぶたが登場！ 最高の運行で上位入賞へ！～

【2024年の見どころ】

青森県板金工業組合の今年のねぶたの題材は『黄泉比良坂伝説』。神話では、黄泉の国と現世は繋がっており境目として登場する黄泉比良坂。「黄泉比良坂」は過去を乗り越え勇気を与える場ともいわれている。ねぶたは、イザナミが黄泉の軍勢と共にイザナギを追いかける迫力のある場面を表現している。今年は、去年とは異なり女性のねぶたとなっており、北村春一氏が手がける美しいねぶたに注目だ。また、中央には堂々と骸骨があり、その迫力にも期待である。

【運行】

青森県板金工業組合は、運行開始から今年で57年目を迎えている。地域協力事業の一環として、永年にわたり、青森ねぶたへの参加に取り組んでいる。出陣日は、2、4、5、6、7日となっている。

注目すべきは、跳人の数だ。多い時は300～400人ほどいるそうで、例年、最終日の七日日の昼も多くの人が跳ねていて、跳人大集合が見られるだろう。また、海上運行を目標としている板金では、花笠の着用を初日から必須とし、華やかさ、統一感を出すことで上位入賞を狙っている。曳手は板金の青年部が担当している。お囃子は、一心會と言って、初代会長の上野山さんが「みんなが一つになり、囃子の演奏をする。ひとつの心になり仲良くやる」という意味を込めて命名した。去年は、囃子の点数が低かったため、今年は囃子にも力を入れている。運行・跳人、ねぶた本体と点数が良いので、囃子の点数もあげて上位入賞を狙っていく。また祭の当日は毎年、跳人として全国からバイク・ライダーが集合する。ねぶたの時期になるとフェリー埠頭近くのキャンプ場にテントを張って宿泊し、連日参加する。

【協賛】

前ねぶたは、日鉄鋼板・シグマット合体、JEE 鋼板・JFE 鋼板・JFE 商事鉄鋼建材合体と今年から参加の協同組合タツケンの計3台である。その他協賛は日本製鉄株式会社、JFE 鋼板株式会社、(株)角弘、(株)吉田産業、グループ会社などである。

文責：鳥山凌空

ねぶた愛好会

～ねぶた好きの力でいざ出陣！～

【2024 年の見所】

ねぶた愛好会の今年の題材は、『大海の守護神 天妃様』である。青森港開港 40 周年であるため海の題材に決めた。そして今年は辰年ということで、龍も描かれている。2 体の鬼の背後に描かれている天妃様（媽祖）は中国で生まれ、非常に賢明な人物であった。悪者とされていた順風耳と千里眼という鬼を懲らしめて従えていたという。現在では海の安全を守る神様として信仰されている。送りは神様の使いとされている虎爺（フーイエ）という三匹の虎がモチーフとなっており、さまざまな分野での守り神として信仰されている。天妃様（媽祖）とともに人々から崇拝を受けている存在であり、台湾一歴史の長い虎神社といわれている朴子配天宮に祀られている。青森港 40 周年を祝うとともに、海の安全を願っている。また観客に寄り添った運行をすることが目標だそうで、観客の気持ちになって運行を目指す。

【団体の特徴】

ねぶた愛好会はねぶた好きの有志が集まってできた団体であり、今年で連続出陣 44 回目となる。ねぶたの制作は 25 回にわたって石谷進氏に依頼していて、現在の制作者は諏訪慎氏である。ねぶた愛好会の今年の出陣日は、2、3、5、6、7 日の 5 日間である。ねぶた愛好会の特徴は、会員のみなさんで制作から当日の囃子まで自分たちで行なっている点である。制作に関わっているのは 10 人弱だそう。囃子は総計 100 人ほどで、制作に関わっている人も囃子方として参加している。曳き手は、専属の方やアルバイトを合わせて 13 人で、ほぼ前だけに配置している。扇子持ちは 3 人で、一人は 40 代の若い方である。

【協賛、前ねぶた】

メインスポンサーは置かず、みなさんがメインスポンサーとなって運行している。みんなからの協賛だから、という理由でメインスポンサーは置かない方針である。手拭いや T シャツ、提灯などを制作、販売するなどして資金を調達している。前ねぶたは毎年、その年に話題になったものや人物を題材とした金魚ねぶたを制作している。今年の前ねぶたは、オリンピックに関連した金魚ねぶたが制作された。

文責：松田優唯

日立連合ねぶた委員会

～サステイナブルな脱炭素ねぶた～

【2024 年の見どころ】

今年の大型ねぶたは北村蓮明氏の『河津三郎祐泰「河津掛け」』であり、相撲の一手が題材となっている。2024 年は青森県出身の力士「尊富士」が幕内優勝を果たし、相撲の話題がホットだった。また、年初めから能登半島地震が起こり不穏な幕開けとなったが、相撲の四股で地中の邪気を払い、大地を鎮めようという願いも込められている。ねぶたは、平安時代末期、河津三郎祐泰が俣野五郎景久を相撲で投げ飛ばす場面であり、力強さや不屈の精神

が感じられる。

【歴史】

日立連合ねぶた委員会は 1965 年に始まり、2015 年に 50 年賞を受賞し長い歴史を持つ団体である。受賞歴が特に多く、2017 年には 14 年連続での海上運行という偉業を成し遂げた。また、日立の囃子方である「凱立会」も囃子賞を過去に 14 回受賞し、今年は 20 周年という記念の年となっている。

【運行団体】

日立連合ねぶた委員会の出陣日は、2,4,5,6,7 日の 5 日間である。お囃子・運行・制作・諸々含めて一体感がある団体である。それぞれのチームの立場に関わらず、互いに分担・補完・協力し合いながら一致団結して準備を進めてきた。また、お囃子は絶対的な実力をもっており、演出の手法は一緒でも出せる迫力が他団体には負けない。コロナ禍では、感染症の流行にも負けず、「凱立会」は Web など様々な活動を行ってきた。ねぶた期間以外でも様々なイベントに数多く参加している団体だ。一番の特徴は、囃子の音響も照明もねぶた本体の動力も発電機ではなく全てバッテリーで動かしているというところである。扇立会というベテランの扇子持ちによる上品な運行と北村蓮明氏らしい“ねぶた”をどうぞご覧あれ。

【協賛・前ねぶた】

メインスポンサーは日立グループ各社となっており、協賛企業はその他多数ある。前ねぶたは、昨年に引き続きアイペットのイメージキャラクターである犬の「トップイ」くんがリニューアルされて登場する。制作は蓮明氏が手掛けるそうだ。また今年から日立のロゴが入ったパネルも前ねぶたとして登場する予定となっている。

文責：中野ありす

消防団第二分団ねぶた会・アサヒビール

～下北と共に 迫力満点の運行を～

【2024 年の見どころ】

今年の題材は『矢の根八幡』である。制作者は内山龍星氏。以前も制作したことのあるテーマで、得意な題材だ。知られているように、北の果て下北半島の尻屋は東北の鬼門にあたり、鬼神が住んでいて住民を困らせていた。そこで人々は源頼義に鬼退治をお願いした。ある日、悪鬼が現れ、たちまち兵士達は踏み殺されてしまった。その時一羽の白鳩が飛び立ち白衣の明神が現れ弓に矢をつがい引き放つと悪鬼の額の中心を討抜いた。頼義はすかさず首を切り落とした。やがて頼義は神に感謝し、そこに石清水の八幡宮をまつり鈴ヶ森の八幡宮を宮本と定めた。そこは、「矢の根八幡」と呼ばれ地元の守護神としてまつられている。この物語は、むつ、下北半島が題材となっており、そのためむつ市からの参加が注目される。

【歴史】

消防団第二分団ねぶた会・アサヒビールの歴史は長く、今年で 72 回目の出陣となる。『青森ねぶた誌』を紐解けば、1952（昭和 27）年に青森消防第二分団三班がはじめて登場しているが、1955 年の記載では、7 回目の出陣となっている。歴史的には青森ねぶたはもともと地元の消防団や港町の関係者がねぶたを出陣させていた。そのため、に組・風力開発グルー

プとならび消防団としてはその伝統を受け継いでいる団体といえるだろう。アサヒビールがスポンサーになったのは1990年（平成2年）からである。その他ヤマモト食品、スバル自動車、マツダ自動車などもスポンサーについたことがある。

【運行】

団員が中心となって運行を行っている。昨年は4年ぶりの出陣ということもあり、運行でやらなければいけないことを忘れてしまいミスがあったという。今年は、昨年の反省を踏まえ準備期間を1か月延ばし念入りに準備している。まとまった運行を目指し、運行スタッフ集めを行い、役割分担することで整った体系の運行が見られるだろう。

囃子は龍鼓会が担当している。会員数は60人ほどと去年から減少してしまったがその中でも後継者・若手の育成に力を入れており数年後、祭で輝くことが期待されている。曳き手は青森中央高校と青森北高校の野球部の学生アルバイトが8割ほど、残り2割を一般の中学生、高校生、大学生で行われている。

跳人は、例年約150～300人で、地元の事業者や青森中央学院大学をはじめとする学生、スポンサー関係の方々など幅広く参加している。今年は500人を目標としている。また今年のねぶたは下北と関係があり、むつ市と連携する。出陣日は3、4、5、6、7日となっている。

【協賛】

前ねぶたは、協賛であるアサヒビール、アサヒ飲料、日清食品、NECが出陣する。

文責：鳥山凌空

プロクレアねぶた実行プロジェクト

～伝統を未来へ紡ぐ～

【2024年の見どころ】

制作者は昨年、デビューと同時に優秀制作者賞を受賞した野村昂史氏である。今回のねぶたの題名は「錦繡戸隠紅葉狩」だ。世界に誇る伝統文化である「歌舞伎」の演目の一つを世界最高のペーパークラフトとして紹介された「ねぶた」で表現している。歌舞伎における二枚看板を、2025年1月に合併する青森銀行とみちのく銀行の両行に見立てて制作している。新たに誕生する「青森みちのく銀行」を歴史ある歌舞伎へなぞらせ、伝統を未来へ紡いでいく象徴にしたいというメッセージが込められている。また、両行が新たな銀行になる最後の舞台を、歌舞伎のひのき舞台になぞっている。送りは「山神夢のお告げ」。野村氏は昨年の不動明王の顔が気に入る、今年の送りの鬼女の顔は、不動明王の赤ちゃんの頃の顔をイメージして作ったそう。

野村氏は今回の作品について以下のように語っている。「紅葉狩は能や歌舞伎、神楽などで演舞が継承されている。また、ねぶたでもよく作られる題材である。青森ねぶたが未来永劫キラキラと光輝く道が開き続けられ継承されることを願っている。そのためには、平和であること、経済が豊かであること、一人一人が互いを尊重すること、文化の歴史を守りつつ革新性があること、地域の個性を見つめることから始まると思っている。古典的な題材、構成を表現していきたい今回紅葉狩とした」。

【運行団体の歴史】

2022 年 4 月に青森銀行とみちのく銀行の経営統合により、プロクレアホールディングスが設立された。今年で 2 回目の出陣となる。

【運行団体の特徴】

今年の出陣日は 8 月 2、4、5、6、7 日である。プロクレアねぶた愛好会という任意団体があり、会社の正式なプロジェクトから愛好会がねぶたを任せられて運営している。愛好会のメンバーは囃子方を含め総勢 400～500 人。プロジェクトを支えるコアメンバーは 30 人程度。跳人は自由参加である。また、県外の銀行のお客様を招待して一緒に跳ねる。

囃子は昨年約 8 割が初心者であったが 60 回以上の練習を重ねて 7 位に入賞。今年は新規メンバーも入れて約 200 人が参加し、改めて基本から学んだ上でやっていくそう。定期的に練習をしていて、ピークだと 1 週間に 2 回行う。また、並行して囃子方の動画を撮り、振り返りながら自主練習も行っている。曳き手は全員が職員で、プロクレアの野球部員も活躍している。今年のねぶたは髪の毛がとても重く、重心が前になるため負担が大きいそう。

【協賛・前ねぶた】

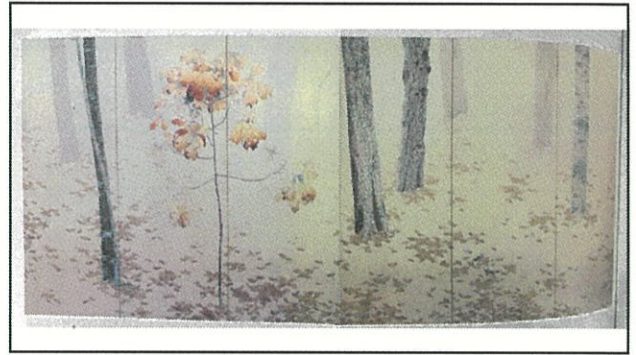
協賛はプロクレアホールディングスグループ各社である。前ねぶたは青森銀行の「aomo」、みちのく銀行の「トムとジェリー」、プロクレアホールディングスのロゴマークの 3 つが登場する。青森銀行とみちのく銀行の前ねぶたは今年で最後の運行となる。

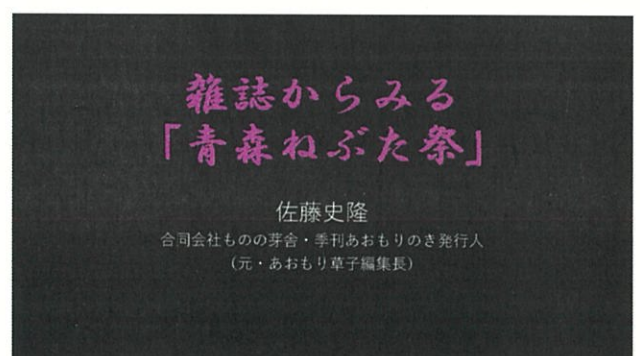
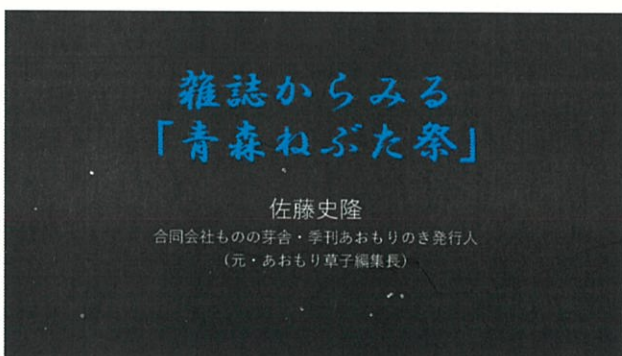
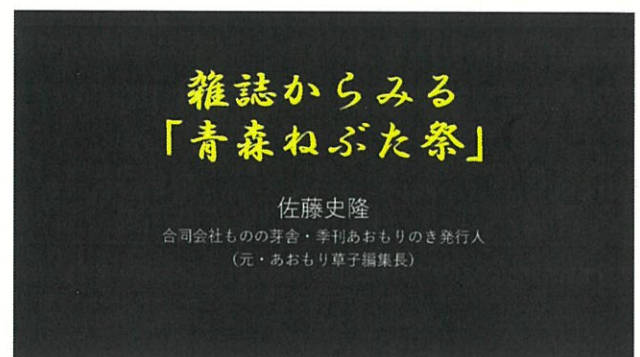
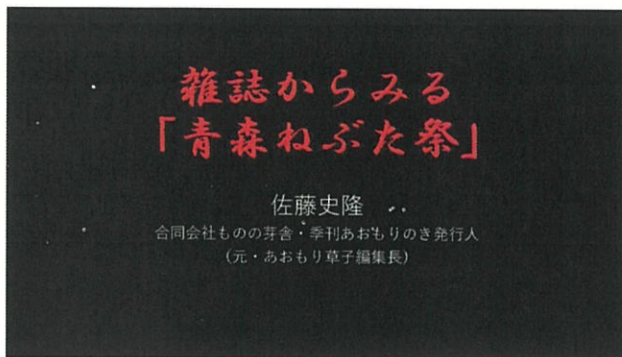
文責：阿部仁菜

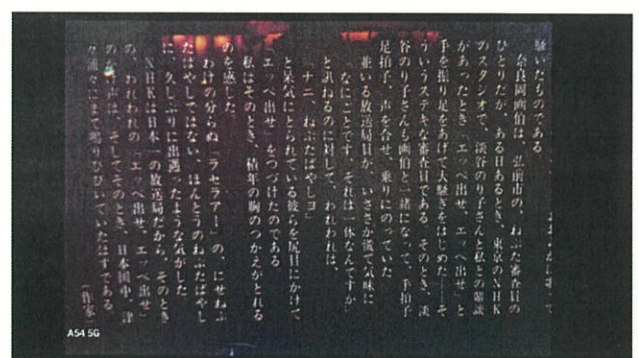
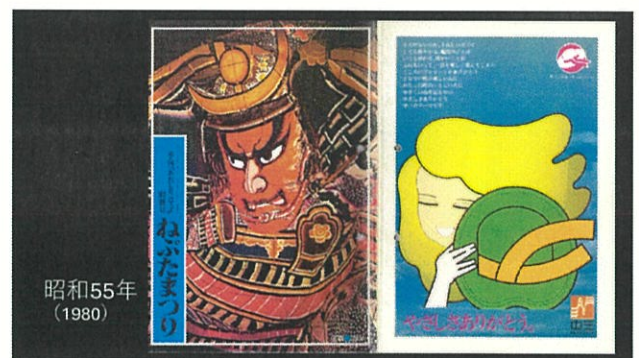
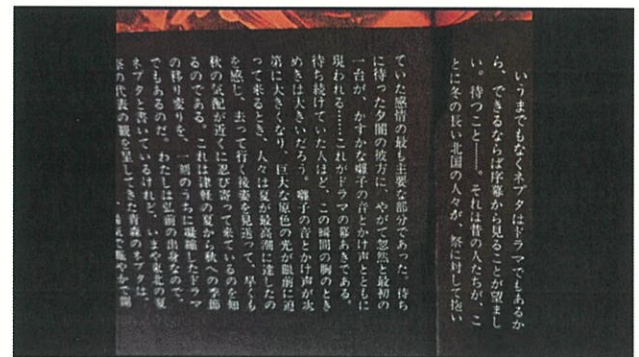
報告資料 学会・公開講座





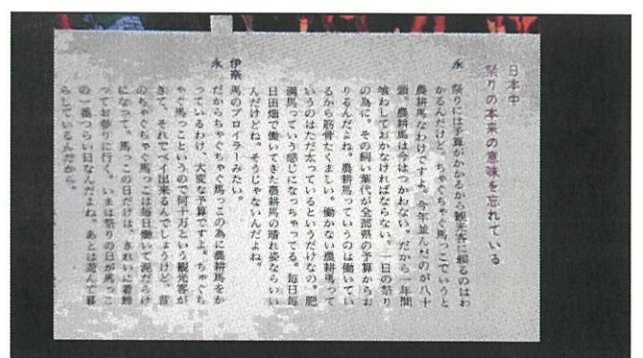




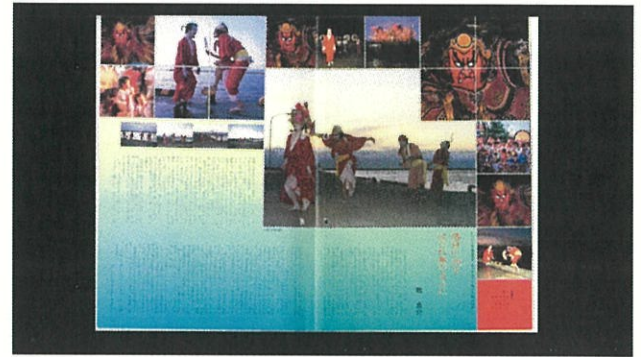




昭和57年
(1982)











平成12年
(2000)



平成13年
(2001)



平成14年
(2002)







ねぶた師の魂を伝えること

青森朝日放送 報道制作局
アナウンサー 稲葉千秋

自己紹介

- ▶ 稲葉千秋 青森市出身
立命館大学（京都）卒
- ▶ 2015年 東京で1年間営業を経験
- ▶ 2016年 青森朝日放送入社
担当番組「ハレのちあした」平日18:15～ キャスター
「夢はここから生放送 ハッピー」土曜9:30～ リポーター 他

「じゃわめぐ」

津軽弁で「血が騒ぐ」
「心の底からワクワクする」

ねぶたを見ていない夏は何か物足りない

地元のアナウンサーになって

- ▶ 1年目の夏 青森ねぶた祭のニュース取材
→特等席で大型ねぶたを見て感動！！
地元のねぶたは誇らしい祭りなんだ！
「じゃわめぐ」はねぶたでしか生まれない！
- ▶ 2019年8月 東北六県夏祭り特番 祭り会場から中継レポート



本格的なねぶた取材

- ▶ 2020年4月8日
青森ねぶた祭が戦後初めて中止に
- ▶ 2020年5月26日
「ねぶた師支援プロジェクト」クラウドファンディングの取材
→青森ねぶた祭主催者ではなく、一般市民が立ち上げ、学生も活動に加わる



コロナ禍で中止！青森のねぶた文化を守れ！ねぶた師緊急支援！

初めてのねぶた特集

- ▶ 2020年6月26日・2021年1月15日放送
スーパーJチャンネルABA「ねぶた師を救え！」
約半年間のクラウドファンディングの活動取材



★ねぶたの捉え方が変化
「祭りの山車」⇒「ねぶた師の魂の造形」

人生を掛けてねぶたに魂を燃やしている
その思いを伝えたい

初めての番組制作 ①概要

「じゃわめぐ！～ねぶた師の終わらない夏～」

2022年10月5日（水）19：00～19：54



▶ 取材期間：2021年3月～2022年9月

▶ 内容：新型コロナの影響で中止となった青森ねぶた祭。

ねぶたのない夏を、ねぶた師はどう過ごし、3年ぶりの祭りの開催に向けてどんな思いを込めて制作に臨んだのか。若手ねぶた師3人に密着。

▶ 担当：ディレクター・ナレーション

初めての番組制作 ②伝えたいこと

「若手ねぶた師の苦悩やねぶたへの情熱を映し出す」

→ありのままを見せることで、ねぶた師にとってはもちろん、

私たち市民にとって、ねぶたがどんな存在なのか感じてもらいたい。地元の祭りの価値を再認識してもらいたい。

▶ 見た人の心に何かが残ればいい。

考える・行動するきっかけになれば。



初めての番組制作 ③気づいたこと

▶ ねぶたはねぶた師一人で作るものではない

→弟子や専属スタッフ・ボランティア・家族などいろんな人が小屋に集う

▶ ねぶた師によって筆の線が違う！

→面が違うのは有名だけど...

▶ ねぶた師同士の交流・師匠への思い

⇒知れば知るほどそれぞれにドラマがある



初めての番組制作 ④成果と反響

▶ 長期間の取材で関係を築けたからこそ言葉や表情を引き出せた

⇒視聴者から「番組に入り込めた。心を動かされた。」という感想が多数。

▶ ねぶた師が小学生にねぶたの技法を伝える活動などを紹介

⇒「知らなかった」といった声多数。

市民にとっての祭りの価値や祭り文化の継承を訴えられた

ねぶた担当としてのこれから

地元放送局の役割を再認識。

テレビの発信力はまだあるはず。

**ねぶた文化を守り、未来につなぐ一助になれば**